
lf、ろーぶれ・わーるど

Shunta-by-Shou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

If、ろーぷれ・わーど

【Nコード】

N2459W

【作者名】

Shunta-by-Shou

【あらすじ】

ある日、車に轢かれそうになった友達を助け、代わりに死んでしまふ武蔵が転生！
最強になりハーレムにしたい武蔵が頑張るはなし

ろーぶれ・わーど（前書き）

初めて書いてみました。これから頑張りたいと思います！
応援お願いします！

ろーぶれ・わーど

いつものように、ただなんとなく学校に通っていたある日のこと。
部活の帰りに友達と遊び話していた、

「なあ、武蔵。今度の休みに映画観に行こうぜ！」

「なんの映画？またアニメか？」

この武蔵と呼んでくるやつが俺の小学校からの親友。坂本 翔平だ。
こいつは金がないくせにこうやって俺をなにかに誘ってくる。

俺は宮上 武蔵。高校3年になったばかりだ。ついでに言うと、
俺の人間関係はこの翔平こと翔しかまともではなかったりする。

「アニメで悪いかよ。お前も好きだろ？」
と翔が言ってくる。

「まあ、好きだけだな。わかった、行くよ。」

実は俺も翔も超がつくくらいアニメやゲーム、ライトノベルが好き
だ。それを分かって言ってるんだろう。

「さすが、武蔵。じゃ、今度の土曜日な。」

「りょーかい。そういや、二次小説でさ・・・」「始まったよ、武
蔵の発作が。お前ホントに二次小説好きだよな。」

そう、俺は特に二次小説とRPGが好きなんだよ、俺の家庭は荒ん
でいて、自然とゲームやアニメにのめり込んでいた。

そんななかで、俺はゲームをする、友達と居る、という時間を大事
にしていた。このときは俺の心が唯一安らぐときだ。

「仕方ないだろ。翔も俺の家庭環境知ってるだろ。」

「あ、悪い。」

「いや、もういいよ。じゃ、土曜日にな。」

「じゃあな。また後で」

く土曜日く

俺は翔の家にいた。

翔の家が映画館に近いから、時間までここにいた「おい、翔。そろそろ行くぞ。」

「ちよつと、待ってくれ。このダンジョンが終わるまで。」

翔は俺が貸したRPGをやっている。RPGは好きじゃないと言ったけど、貸せばちゃんとプレイしている。つと、終わったみたいだな。

「悪い、待たせたな。行こうぜ。」

映画館に着いた。

翔はチケットを買いに行つて、俺は待つてた。

「それにしても休みとはいえ、たくさん人がいるな。みんな暇なのか?」「そういう俺たちも、暇人だけだな」

チケットを買いに行った翔が戻ってきた。

「ははっ、違いないな。だけど俺たちは超がつく暇人だろ」「たしかにそうだな。けど、武蔵は超じゃ収まらないぐらい暇人なんだろう?とりあえずチケット買ったし、入ろうぜ!」

翔の言うとおり、超では収まらない暇人なんだろうな。正直暇ではなく、マンネリなのかもな。代わり映えのしない毎日。なにをしても上手くいかず負の連鎖を続けてただなんとなく過ごしている。でも、翔と居るのは楽しい。

「早く来いよ!良い席が埋まるぞ!」

そうだな後で考えよう、いまは楽しむとするか。

「悪い!今行く!」

「映画面白かったな！武蔵はどうだった？」

観たのはネ○まの映画だ、少年がたったの半年でボスと渡り合えるなんて、恵まれた才能が羨ましいな。

「そうだな、俺はあの強さと才能が欲しいな。」「お前またそれか。見てる場所が違うな」

呆れたように翔が言ってくる。

「しょうがないだろ。俺は弱いんだから、強さに憧れるさ。強くなりたいてな。」

映画を観終わって、夜道を歩いて翔とブラブラしていたら、後ろ10m離れている所でわき道から車がライトを着けず出てきて、こっちに急発進してきた。

道の端によったが翔はまだ話していて車に気付いていないみたいだった。

「翔っ、あぶねえ！」 「え？なん、うわぁっ！」

車はもう翔の真後ろに来ていて間に合いそうになかったが、なんとか翔を突き飛ばすことはできたが、俺は車の激突を受けた。

バン！！！！！！

という音とともに俺は吹き飛んでいた。

視界の端では翔も足に激突されていたのが見えた

（かばいきれなかったな。翔がなにか言っているけど耳が聴こえなくなっている）

「っ……………っ！！っ！！」

身体感覚がほとんど無くなっている。

気付くと5、6m離れていた翔が近くまで来ていた。

「グッ！、ゲホッ！、し、翔。き、聞こえてるか？俺の人生でお前がいてくれて、ッゲホ！ゴホ！良かった。いままで、ありがとう。ッ！ゲホッ！」

「っ……！！！！」　　（翔が涙を流すのなんて、初めて見たな。もしかして俺も涙しているのかもな。意識が薄くなつて、周りが暗くなっていく、これが死なのか）

ろーぶれ・わーど（後書き）

文章が固くなつてしまい難しい

転生（前書き）

やはり書くのは難しい。でも！気持ちよく書いていけるよう頑張ります！

転生

「ここは？一体どこだ？確か俺は翔をかばって…死んだのか？」

一面真っ白の空間にまさに地平線とはこのことだろう。なにがなんだかわからない。

「とりあえず状況確認だな。たしか翔と映画を観に行った帰りに後ろから来た車に轢かれそうになった翔を助けて代わりに轢かれたんだ（やっぱり死んだのか）」

「つつ、つつ、ひつく、えつく」

「ん？なんか泣き声が？」

どこからと見渡すと、後ろに中学生くらいの女の子がいた

「なんで泣いているんだ？」

女の子が泣きながらも話してくる

「つつ、わたしのミスであなたを死なせちゃったの、ひつく、うわあああああん」

「な、泣かないでくれ。落ち着いて話してくれ」

俺は女の子の涙がトップ3に入るくらい苦手だ、どうすればいいか、分からなくなってしまう。

とりあえず落ち着かせないと。どうしよう？

よし、抱き締めて安心させよう。

↓ 落ち着くまで抱き締めていた

「（女の子って柔らかいんだな、それに良いにおいがするし、こっちも何故か安心できる。落ち着く。）」

…そういえば、ジゴロみたいなことしてるな、俺。

「あ、あの、もう大丈夫です。説明させてもらいます。」

もう大丈夫らしいから、手を放すと、顔を上げてくる。

！！！！

俯いてたから分からなかったけど、この子、凄く可愛い！髪は銀髪でショートヘア。顔立ちは整いつつも、幼さを残し、身長は150cmちよつとくらいだろう。大事なことなのでもう一度言おう、もの凄く可愛い！！天使かこの娘は！？」

「っ！そんな、可愛いだなんて／＼／＼／＼／」

あれ？口に出ていたらしい、でも、しょうがないこのかわいさだから！

「え、えつと、いくつか聞きたいことがあるけどいいかな？」

「あ、は、はい！大丈夫です！」

……やっぱり可愛い……じゃなくて。

「えつと、じゃあ、まず俺が死んだのは分かったから。君のことと、この場所はどこか、なぜ君のせいで死んだか。この三つが聞きたい。」

「はい。えつと、まず私は女神です。次にここは神が個人で持つている空間です。あなたが死んでしまったのは、本来はあなたの友達坂本 翔平さんが死んでしまうはずなんです、私が運命の輪を弄ってしまったせいです」

若干鼻を嚙りながら話してくれた。

「……そっか。わかった。怒るつもりはないから、安心してよ、むしろ感謝してる。翔が死ぬより良かった、もし、翔が死んでいたら俺が堪えられなかったよ……それと、俺はこれからどうすればいいのかな？」

それが最大の疑問だった、このまま、天国か地獄に逝くのか。もしくは、二次小説みたいに転生できるのか。
できれば、後者がいいな。

「武蔵さんには、別の世界で、新しい生を歩んでもらいます。」

やった！憧れの転生だ！本当に嬉しい！

「アニメとかゲーム、小説の世界でも大丈夫なのか？」

「はい。もちろんです。武蔵さんには迷惑をおかけしたので、願い事を5つまで叶えますよ。」ニコッ

っ！本当に可愛い娘だ。俺の好みにドストライクだな。多分、惚れてしまったな。

「迷惑なんてかけてないよ（役得だったし）。それじゃ、転生する世界はRPG W（・・）RLDで頼むよ。願い事はもう少し待ってくれる？」

「はい。わかりました。RPG W（・・）RLDですね？」

「ああ。頼むよ」

さて、5つも叶えてくれるらしいから、よく考えないとな。まずは、

1、FF・ドラクエの魔法と技の知識と才能

2、『肉体』と『魂の力』の限界突破、つまり鍛えれば鍛えるほど強くなれる。

3、主人公たちにちかしい存在で1つ年上に転生。これは、主人公が東京で俺はバチカン市国に生まれました、なんて笑えないからな。

4、武器を2つ。脇差しと刀を1本ずつ。

5、保留。なにかあるかもしれないからな。

以上で頼む。」

「わかりました。1については、最初は能力が底辺ですよ？」

「そのための2の願いだよ。」

「なるほど。頭良いんですね。あとは5ですが転生後も私の名を念じれば念話ができるようにしますね。」

「それは良いけど、君の名を知らないぞ？」

「あつ、すみません。私の名はフローラと言います」

「フローラか。いい名だ、可憐でおしとやかで可愛い君にピッタリだね」ニコッ

「ッ！…あ、ありがとうございます！／／／／／／／／／／も、もう少しかかるのでお待ちください／／／／／」ボンッ！

誉められなれていないのか？フローラの顔が真っ赤だ。

俺がこの世界を選んだのは、RPGが大好きだからだ。まさか死んで夢が叶うとは思わなかった。今頃、翔はなにをしているだろうか。あいつが心配だな。

「武蔵さん終わりましたよ？あちらの扉が転生先になります。」

手を出すほうを見ると、確かに、扉がちょっと浮いた状態であった。扉をくぐれば、魔法とファンタジーが溢れる世界へ行けるだろうが、俺にはいつも、翔と一緒にいたから…

「……………」

「どうかしましたか？」

フローラが聞いてくる

「……俺の親友の翔に、俺が生きられたら得たであろう幸運と金運を渡せるか？それとホントにできればいいから、翔が最も強く望むことを叶えてやってくれないか？頼む！」

俺は勢いよく頭を下げて頼んだ。

「……はあ、わかりましたよ」

フローラが了承してくれた。

「っ！、ありがとう！！」俺はフローラの手を両手で握りしめ感謝すると、俺の頬に水が流れている。感謝の気持ちで涙が流れたのは初めてだ。フローラも突然、涙を流した俺に驚いている。

手を放し、浮いている扉に向かい、振り替えるとフローラは微笑を浮かべ、こっちを見ていた。その様は本当に美しく、女神をおもわせた。

心臓が高鳴っている、これは本当に惚れたかな？

「フローラ！色々と願いを聞いてくれてありがとう。フローラは綺麗で可愛いし優しいから良いお嫁さんになるな。」

「ッ！／／／／またお会いしましょう／／／」ポツ

「ああ。また会おう。」最後に見た彼女の表情は頬に赤く染め、優しく微笑んでいた。

最初に会ったときは、泣きじゃくり、子供みたいだったが、今の表情を見ると、やはり女神なんだと、再確認した。

転生（後書き）

なかなか本筋にいけない。地球のみんな！俺に表現力と文章力を分けてくれ！とやりたいですね。

前から書いている先輩方に追い付くように、精進します！

誕生そして少年へ（前書き）

大変だった。とにかく疲れた

誕生そして少年へ

真っ暗だ。

先刻までは、真っ白な空間にいたから、妙な気分だ。

それにしても暗いにもかかわらず暖かくもあり不安ではなく、なぜか安心できる。

ずっとこの温もりを感じていたい。そう思うほど心地よかった。

どれくらいそうしていただろうか。数分かもしれない、数時間かもしれない。

突如、その温もりは、強い光が溢れるとともに終わりを告げた。

「おぎゃー！」

と、こうして俺は誕生した。

目を強く刺激する光と初めての呼吸活動のため俺は力強く泣いていた。

「元気な男の子ですよ。」

助産婦らしい人が、俺を抱き抱えて母親のもとへとやる。

「私の初めての可愛い赤ちゃん。」

母親が嬉しそうに俺を抱き締めてくる。先ほどの温もりが訪れてくる。母に抱かれ、泣きながら考えていると、1人の男性が息を切らしてやってきた。

「ハアハア、ハア。生まれたか！」

「はい、あなた。わたしたちの子ですよ。」
と言つて、男性に俺を渡す。

「（ああ。母の暖かい温もりが去っていく。）」
代わりにゴツゴツした感覚がして、とてもじゃないが心地よいとは言えないが、嬉しかった。

俺は前世では、養子としての子供だったから、これほど母と父の温もりが嬉しいとは、思いもよらなかった。

「ところで、あなた。この子の名前は決めたの？」「おう。力強く立派な男になつてほしいから『武蔵』だ！今日からおまえは宮本武蔵だ！」

「いい名前ね。あなたはこれから武蔵よ。」

…武蔵、か。まさか前世の名前と一緒に、フローラがなにかしたのかな。それよりは姓が『宮本』。ことは俺は主人公たち。宮本翔の兄として生まれたってことか。

眠い。急に眠くなってきた、赤ん坊だからか？ ま、いいや。いまは、寝かせてもらおう。

（1歳）

生まれてから1年がたった。最初は大変で1人じゃなにもできなくて、中身は高校生だから授乳がとても恥ずかしかった、おむつも仕方なく、漏らして泣いて呼んでいた。1歳になる少し前から離

乳食が食べられるようになり、やっと、授乳の恥ずかしさから解放された。

次の課題は歩けるようになり、1人でトイレができるようになることだ、おむつはもう嫌だ！あと半年もあれば歩けそうだ。

そして！最大の出来事として、原作キャラの宮本 翔が生まれた。が、名前が翔「ショウ」ではなく、翔「カケル」だった。不思議だ。これが1年ぐらいで起こったことだ。

〈3歳〉

何事もなく、2年が過ぎて、片言だが喋れるようになり、歩けるようになったので、毎日、近所を走っている。

正直、やることがないので、まだ2歳の翔「カケル」と遊んでいる日々だ。

それに今から鍛えると、成長を阻害しそうだからな。

「にーちゃ！」

まだ舌足らずな翔が俺を呼んで走ってくる。2歳だからまだ足取りがおぼつかないな。あ、転んだ。

ドテッ！

「うっ。いたいよお！うわああん！」

俺は翔に駆け寄る、ケガしたかを見ると、手と膝をケガしている。

「ああ、てとあしをケガしてるな。ちょっとみせてみる。」

俺は翔の手と膝に絆創膏を貼る。俺自身、走ってよく転んでるから絆創膏は持ち歩いている。

「よし！これでだいじょうぶだ！あとは、いたいの、いたいのとんでけー！」

前世の頃、唯一、優しくったおばあちゃんが俺によくやってくれたおまじない。中学生のときに老衰で亡くなってしまっただけで悲しかったのを今も覚えてる。

「カケル、もうだいじょうぶか？」

「うん！いたくない！ありがと！」

「そうか。じゃあ、あそぶか！」

「うん！」

幼い頃は、こんなに、いい子なのに、原作だと凄いスケベになるかと思うと、兄ちゃん悲しい！

〈6歳〉

小学生になったから、行動範囲が増えたから、近所の川の人気のない上流で、最近になって魔法や技の鍛練を始めた。比較的簡単に覚えられたのは、ドラクエの初級呪文だ。

「メラ！」

指を川に差して唱えると、指の先に顔ぐらいの大きさの火の玉ができて、川に向かって飛んでいく。

バジュウウウ！

音を立てて川の水が蒸発する。

「よし、メラはできるな！でも、もっと速さと威力を上げないといけないな、要練習だな。」

「次は、メラミー！」

シーン……

……ま、まあ仕方ないな。中級呪文だし。でもうてるようになってやる！

「バギ！」

小型の竜巻が水を巻き上げている。

「よし、成功！これも要練習だな。」

「次は、ギラ！」

ボボボボッ、ジュウウウ！

前の地面から炎が発生し、川に一直線に進み、蒸発し、消える。

「一応、できたけど。威力が全然ないな。けどいつかは、川を両断するぐらいになってやる。」

炎が川を突き進み両断するのを想像してみる……シユールな光景だな。

「さて、最後は筋トレだ。」

筋トレは、腕立て伏せ・腹筋・背筋・スクワット・その他を各50ずつやって、最後にばてるまでランニング。きついけど、強くなるためだ、死にたくないし、仲間を守るように。

ー筋トレ中ー

「ッハア！、ツ、ハアハア、ハア！つ、疲れた。」

少し休んで、帰る用意をする。そして認識阻害なんてものは使えないから、終始張っていたバリアを消す。魔力がもう0だ。

修行を始めるにあたって、一番最初に覚えた魔法がこれだ。人気がないとはいえ、見つかったら大変どころじゃないからな、だからバリアを真っ先に覚えて応用した結果みたいなものを作った。結果は球状に張れるようになり、半径50メートルはある。けど、バリアは常時魔力消費型の魔法だからきつい。そのおかげか、限界突破の能力で魔力が上がりやすい。でもまだ少ない。

く帰宅中く

近くの公園で、翔と翔の幼なじみの蔵島 勇吾（俺の幼なじみでもある）が近所の悪ガキにいじめられていた。

「なんでいじめられてんだ？とりあえず、助けるか！」

「なにすんだよお。僕たちが先に遊んでたんだぞ！」

「知らねえよ、そんなの。俺が遊びてえからだよ」

「そつだそつだ。はやくお前らはどけ！」
ボカッ！

翔が叩かれて、尻餅をつく。

「いたっ！」

「翔！なにすんだお前ら！」
それに対して、勇吾が怒る。

翔が叩かれた！それで、勇吾が怒っていた。
「まで！勇吾！どうしてこうなったんだ？」

「聞いてよ、兄ちゃん！僕たちが先に遊んでたのに、ここは俺たちが遊ぶって言うて叩かれたんだ！」

「そうなのか？勇吾？」

「うん、そうだよ。だからムカついて。」

「そうか。それはあいつらが悪いな。お前ら！翔に叩いたことを謝れ！」俺も勇吾と同じく怒っていた。何も翔たちに非はないのに。
あいつらは俺の怒声に驚いていた。

「な、なんで、俺らが謝るんだよ。」

「お前らが悪いことをしたからだよ！！無理矢理どかそうとして、さらに、何も悪くないのに叩いたからだよ！！」

さらに声を張り上げると今度は翔と勇吾も驚いていた。

「う。わ、わかったよ。ごめんな。」

「もうこんなことするなよ？」

「うん。」

沈んだ顔で頷いてくれる。

「翔、勇吾。反省したみたいだから、許してやってくれないか？」

俺は前世の頃から、理不尽なことが大嫌いだった。真面目な奴や良い奴が不幸な目に合うのが、嫌いだ。だから、理不尽な奴とかが嫌いだから、子供たちにはそんなふう to 成長してほしくない。

「う、うん。許すよ。」

「僕も大丈夫だよ。」

「わかった。もうお前らも本当にこういう事するなよ。」

「わかった。ごめんなさい。行こうぜ」

「うん。ごめんなさい。」

本当に子供たちには歪んだ大人になってほしくないな。

「兄ちゃん！凄！ヒーローみたいだったよ！」

「本当にヒーローみたいだったし、大人みたいだったよ、兄さん。」

「あ、はは。そうか？／＼／」

素直にそんなこと言われると照れるな。それと何故か、勇吾は俺のことを兄さんと呼ぶ。ま、いいけどね。

「うん！そうだ！兄ちゃん！3人でヒーローごっこやる？」

「うん、いいよ。兄さんもやろうよ！」

「え」

今、修行終わったばかりで疲れてるのに。

「いや？」

露骨に顔に出ていたのか。潤んだ純粋な瞳で見てる。

「つぐ！俺はできた人間じゃないんだ！二人してそんな瞳で見ないでくれ！俺のLPはもう0だから！」

「わ、わかったよ。やるよ。」

「やったあ！じゃあ僕はヒーローね！」

「あれ？翔「カケル」は魔法使いになるのが夢じゃなかったのか？」

「あ、そ、そうだった。」

「じゃあ僕がヒーローやる。」

勇吾がヒーロー役か。良いんじゃないかな？翔は別の意味の魔法使いにならないだろうな？

ちなみに、俺もこのままだと別の意味の魔法使いになってしまう。しょうがないか。

「じゃあ俺は悪の大魔王かな？」俺も本当の英雄「ヒーロー」になつてみたいけどな。

その日の夜、修行のあとのヒーローごっこはやめようと、固い決意をして、真っ白になった宮本 武蔵の姿があった。

「12歳」

小学六年生になった。

今は欠かさずしていた、修行の最中だ。

「メラゾーマ！」

ツドオオオオン！！！！

空から火柱が降り注ぎ、激しい音を立てて、地面を爆砕させる。

「ああ。またクレーターができたか。」

周りを見渡すと半径100メートルぐらいが更地で、クレーターがあちこちにできていた。

9歳くらいの頃からこの様になったので、常にこの修行場所にバリアを改良をしたものを張っている。

「もう魔法の方は完璧だな。あとは、景気よくいくか！」

「フレイムジャベリン！サンダーブリザード！神の雷！ギガグラビトン！アース・ガイア！」

ツツツツ！ドツオオオオオオン！！！！！！！！

「ラストオ！エターナル！オレ！ファイバー！！」

ツカ！ドオオオオオオン！！！！！！！！

「凄まじい爆音だな。砂ぼこりで前が見えない。最後のはやっぱりネタ技だな。」

俺はこの六年間で魔法をマスターし、身体を鍛えていて気を扱えるようになった。だが、まだ女神に貰った刀と脇差しが扱いきれて

いない。刀の銘は『炎鬼』、脇差しは『朧』。

炎鬼は、刀身が赤く、抜き身だと炎だしそうなほど、高温で、斬ったものを全て灰塵と為す、獄炎の妖刀。朧は、刀身は黒、柄と鍔は白の圧倒的な攻撃を持つ、軽く振っても衝撃波が飛び、強く振れば斬れぬものなどないとはかりに斬撃が飛びつづけ、触れたものを一刀両断出来る、破壊力悪魔の脇差し。

「本当に何でもものをくれるんだ、あの女神様は。」

とにかく、扱いづらいが、使いこなすようになるしかないな。

「よし、筋トレして帰るか」

今では筋トレは各500回に増えている。そのせいで、細マッチョになっている。

蛇足だが、この前、鏡を見てきずいたが俺の顔はFF7のザックスの顔にそっくりではないか、身長も170cmあるし、イケメンになれると思わなかった。

それにしてもエターナルの世界行くために、『ギヤスパルクの復活』のβテスト版を応募、抽選で当たらなくてはならない。あと3年後に応募が始まってしまう。どうしよう。

誕生そして少年へ（後書き）

感想、お待ちしております！

β 版テスター（前書き）

短めになってしまふ。

文章が、文章が書けない

β 版テスター

〈15歳〉

どうしよう。本当にどうしよう。

いや、修行は順調に進んでいるんだ。

ただ原作が始まる前にエターナルにいつて教団を倒す下地がしたい、最初はこっちにも教団はあるから探したしてなんとかすればいいと思っていたけど…。

教団の連中はこっち（ガイア）にはどこにいるんだ？調べてみたけど、β テスターの応募先ぐらいいしか分らなかった。けど応募先すら世界に存在しない宛先だった。

だからβ テスターを応募して、プレイしてエターナルに行くしかない。

「でもなあ。俺、かなり優等生で通ってるから父さんたちに頼みづらいしな。それにもし、β テスターするなら毎日ゲームだろうけど許してくれないよな。ハア、修行に行こ。」

〈修行場〉

「とりあえず、修行だな。強くなって困ることはないだろう。」

「グラビトン！」

まずは、自分に常に重力魔法を掛けて肉体強化だ。

「次は瞑想しつつ、咸卦界王拳！」

これは、魔力と気を合成してできた咸卦の力を瞬間的に最大量まで上げ、身体能力を爆発的に上げることができる、今は10倍までできる。

ツパアアアン！

「うわっ！またか。」

この技、コントロールが難しすぎて、持続時間が今は30秒くらいしか持たない。しかも気と魔力の消費が激しく使つと、ばてる。

「ハアハアハア。これは切り札として使うか。ち、ちょっと休憩。」

Side 武蔵 End

Side 父

俺達の息子、武蔵は、小さい頃から手がかからず、子供はみんなそうなのかと思っていた。が、翔は手がかかる子だった、お漏らしはするし、わがままは言うし大変だった。

じゃあ武蔵は？あいつは頭がよく利口だった。我が儘は言わないし、不満も言わない。一度も何かを頼まれたことなどなかった。やはり、親としては寂しいものがある。

「なあ、母さん。武蔵がなにか我が儘とか頼み事とか、今まであったか？」

「なんですか、あなた。いきなり。でも、そういえばそうですね。」

あの子は、自分の事は全て自分でこなし、困ったことなんて言われたことはありませんよ。でも親としては、寂しいですね。」

やっぱり、そうなのか。翔なんかはこの前も、ゲームの応募してくれと、言ってきたが。

なんで子供が親に一言もしてほしいことなど言わないんだ！家族じゃないのか、俺達は！。

「武蔵が帰ってきたら、なにかしてほしいことあるか、聞いてみるか。」

「ええ、それがいいですね。」

Side End

Side 武蔵

「フウ。休憩終わり！魔力も回復したし、魔法の練習するか。」

「ファイガ！フレイムジャベリン！合成！」

俺は炎の魔法が得意だ。工夫した結果、炎魔法を主とするなら、魔法の合成ができるまでになった。

「合成魔法『獄炎の鬼槍』！」

手に獄炎でできた禍々しい魔槍ができる。投擲専用の魔法だ。

振りかぶり、投げる！

ジュゴオオオオ！

ツボオオオオン！！！！

投擲した獄炎の槍が地面を溶かしながら進み、当たったものは、弾け飛ぶ！

「気を抜いたら結界が壊れそうだったな。合成魔法は威力が強すぎるな。明らかにオーバーキルだ、村が吹き飛ぶぞ、この威力は。」

「次はメラガイアー！」上空に直径10mほどの特大の炎の玉ができ、炎柱が落ち、焼き尽くす！

「うん。最上級魔法もほとんどできるようになったけど、最後のまだアレが出来ないんだよな。」

「次は剣術だな。」

炎鬼と朧は、念じれば出てきてくれる。それにしても二刀流って、名前もそうだけど、ホントに宮本 武蔵みたいだ。剣術は似ても似つかないけど。

「我流の型だし。俺は、剣はダメダメだな。」

「二天亜流剣術、一の奥義！雷鳴閃！」

「終の秘奥義！画竜点睛！！」

前方の魔法で造った土の人形100体のうち数体を残して切り刻まれた。

「身体能力だけなら、こんなものかな？気と魔力で身体強化してないしな。」

あとは原作までは、魔法と剣術を極めて、錆びつかないようにしないとな。

少なくとも2年の間にエターナルに行かないとな。

く自宅く

修行を終えて、家に帰ったあと、家族で食事をするが、俺はあまり会話していない。

翔が嫌いなおかずばかりだの言って、俺の方に寄せてくる。仕方なくそれを食べるいつもどりの食事風景だが、今日の父さんの雰囲気を変だ、俺に向けてピリピリした感じを出している。

なにかしたか？学校は成績優秀で品行方正で通っているし、高校は推薦でといに決まってるからピリピリする理由は……ないな。さっぱりわからん。気のせいかな。

「ごちそうさま。」

食事を終えて、食器を台所におき、自部屋に行こうとすると。

「まで。武蔵、話がある。」

父さんが話があると止めてきた。

「なに？父さん。」

「一人で高校を選んで、勝手に推薦受験したそうだな。」

「そうだよ。推薦で受かったから大丈夫だよ。」

段々怒ってきてるな、なんでだろ？

「そういう問題じゃない！なんでお前は何もかも一人でやっているんだ！そんなに親が信用できないのか！？」

「そういう訳じゃないけど、迷惑かけるから（いずれエターナルに行ってしまうからな）。」

「迷惑なんかいくらでもかけろ！親はな！子供の負担を背負うものなんだよ！子供が親の心配をしてどうする！」

激しく激昂する父さんに腹が立つきもなく、ここまで想ってくれていた暖かさに涙がでそうになる。

「…………じゃあ、お願いがあるよ。とあるゲームのテスター版が欲しい、どうしても必要なんだ。」

俺は真剣な声で言う。

「それくらいいくらでも手に入れてやる。武蔵、お前は、もっと人を頼れ。親でも友達でも。」

黙って聞いていた母さんが優しく肩を抱いてくれる、前世で味わったことのない家族の優しさと暖かさに触れて、俺は短く嗚咽を上げ涙を溢していた。

（後日）

家族という未知の温もりにこの世界で初めて泣いてから、数日が経

過していた。

今日父さんがいつもより遅く帰ってきた。

「武蔵！頼まれていたものを手に入れてきたぞ。」

父さんの手には、大きいゲーム機の機体があった。大体、初期のP〇2ぐらいの大きさだ。父さんからゲーム機をうけとり、自部屋に運んでから礼を言う。

「父さん、ありがとう。でもずいぶん早く手に入ったね、どうしたの？」

手に入れるには、応募選考して抽選、当選しなければならないはずだ、それには、数ヶ月かかるって翔が言っていた。

「あ、ああ。知り合いが持っていたんだ。それを譲ってもらった。」

父さんが若干沈んだ表情で言う。

「なるほど、そうだったんだ。知り合いに頼んでまでしてくれてありがとう、父さん。」

「早速ゲームをやるのか？」

「そうだね。なるべく早い方がいいからね。」

「楽しむのもいいが、勉強もしっかりやれよ。」

「わかってるよ、父さん。」

父さんが部屋から出ていった。まさかこんなに早く『ギヤスパルクの復活』が手に入るとは。父さんには感謝しきれないな。

どうやらゲーム機の機体だけでプレイできるみたいだ。RPGは久しくやっていないから意外と楽しみだ、けど今日はもう寝て明日からプレイしよう。

β 版テスター（後書き）

難しい、大変だ。

感想待ってます！

ギヤスパルクの復活（前書き）

中々進めない

ギヤスパルクの復活

〈17歳〉

修行もギヤスパルクの復活のプレイで大変な日々だけど、いまだにエターナルへ行けない。確か、魂の力「イデア」の強さと、ギヤスパルクの復活のプレイヤーの強さが一致したときに、エターナルへ召還されるらしいけど、俺はどれだけやりこめばエターナルへ召還されるんだ？

〈回想〉

父さんからギヤスパルクの復活をうけとり次の日から早速プレイしてみた。

「さて、じゃあプレイしますか！電源ON！」

ブウウウウン！

独特の起動音が聞こえ、株式会社やスポンサーの表示をせずにいきなりオーブニングが始まった。

『まるで本当の世界と変わらない3D世界！NPCのすべてに人工知能が搭載されほとんど人間そのもの！無限に続く冒険世界！世界を救うも滅ぼすも君次第！さあ、君もギヤスパルクの復活をロールプレイしよう！』

派手な演出だが、微細なところもまるで本物みたいだ。後に分かることだが、電源をつけ直すことに全く別のオープニングになる、これだけでも、現在の技術では不可能なほどハイクオリティだ。気を取り直して、ゲームスタート！

「まずは、キャラクターメイキングだな。」

俺は容姿だけはザックスだからな。今の姿そのままつくるか。

名前：ムサシ

性別：男

身長：185cm

体重：70kg

顔：ザックス

服：西洋の服

声：ザックスっぽい

年齢：15歳

種族：人間

「よし、これでいいか。それにしても一つの項目だけでも、数千種類もあるなんて、このゲームはどれだけの容量なんだ？さすがにオンラインは無理みたいだが。」

「次はステータスへのボーナスポイントの振り分けか。10ポイントしかないからよく考えよう。うーん。」

戦士職がいいから攻撃、防御にまわそうか、それとも均等に分けるか？

……よし、決めた！

LV・1

HP	98 / 98
MP	46 / 46

STR	53
VIT	30
DEX	36
AGI	31
INT	39
WIS	22
LUK	48

class: 戦士

こんなもんか、かなり初期能力値が高いんだが。なにかの補正でも入ってるのか？高いに越したことはないから、いいか。職業はジョブチェンジできようになるまでは戦士で我慢だな。もしかしたらアノ職業になれるかな？

「キャラクターメイキングも終わり、やっと、ゲームスタートだ！」

～回想終了～

最初はガルガンシア領の森の泉からスタートして、泉の近辺でレベル上げ。レベル30になって、ガルガンシア王国で、上級職のアーマーンナイトになって、またレベル上げしつつ、酒場でクエストを受けたりしていた。時々発生するイベントは強モンスターなどと戦うものだった。たまに高レベルの人相手や、中ボスクラスのモンスターにやられたり。

ずいぶん前から、竜の里に行き、ベビードラゴンで経験値を稼ぎ、ワイバーンなども倒せるようになり、ドラゴンの中でも亜種、黒龍などを倒した。俺の憧れの職業、ドラゴンスレイヤーになれた。レベル上げていくうちにワイバーンすらも固有技のドラゴンブレイド一撃で倒すことができるようになった。

このゲームにはドラクエで言う、高経験値のメタル系モンスターなどいなかった。

ごく稀に、ボスクラスのモンスターがエンカウントするといった勝負になる。

今はひたすら、ゲームの世界をまわり、あらゆるモンスターとエンカウントし、経験値を稼いでいるが、レベルの仕様が、高レベルなほど、得られる経験値が少ない。

飽きというものはこないが、レベル上げは大変だ。

「はあ、疲れた。2年もやってると疲れるな。それにしてもまだ強さは一致しないのか？」

「臍の手入れでもやりながら、レベル上げるか。」

「お、クインスネークだ。こいつ経験値高めなんだよな。」
フラッシュを使った。ドラゴンスレイヤーのクラスは戦士系の技は
大体使える。固有技は無理だが。

ピンピロピロローン♪

「お、レベルが上がった。」

L V ・ 1 2 0 ↓ L V ・ 1 2 1

俺のプレイヤーのレベルはなぜか、上限の100を越えていた。限
界突破の影響はプレイしているゲームにも、及ぼすのか？

考えていると突如、テレビから、眩い光が放たれて俺を呑み込んだ。

ギヤスパルクの復活（後書き）

感想待ってます！

ついに、エターナルに（前書き）

最近、自分がロリコンなのかなと思うこの頃です。

ついに、エターナルに

眩しい光に俺は脇差し、臙の手入れをしていた手を止め。
俺は光に呑み込まれた。

「っん、っんは…。」

俺は確か部屋でギヤスパルクの復活をやっていて、突然の光に呑み込まれて。気が付いたらどこか見覚えのあるような森の泉の淵にいた。

俺は臙の手入れをした格好で固まっていた…

「……………、あああああああ！！！」
そこで俺は我にかえった。

「もしかしてエターナルへ来れたのか？」
俺は慌てて、泉に顔を覗き込む。

そこにはザックスの顔をした俺の顔が…

「うん。イケメンだ。よかった……………じゃなくて！」

安心して呆けていた俺はもう一度我にかえり、泉を覗き込む。

そこには俺の顔の上に、『ムサシ』とキャラクター表示名が、その下に赤と青のゲージがあった。

「赤のゲージがHPのバーで、青のゲージがMPのバーか。頭上に名前が出るのは、良くも悪くもあるな、偽名が使えないじゃないか。使う気はないけど。」

エターナル来たたと興奮していたが、来たという実感が出てきて少し落ち着き、考える余裕が出てきた。

辺り見回すと、泉があるだけで、あとは森に囲まれている。時々モンスターの叫び声や悲鳴が聞こえるが、聞かなかったことにした。

「ここは気持ちいいなあ。森の中か、それとも泉が近くにあるせいか、ひんやり涼しくて、マイナスイオンたっぷりなのに泉の上からサンサンとした日差しきて温かい。それにこの世界には、排気ガスを出す車がないから空気がとても澄んでて最高の環境だな。」

しばらく俺は時間を忘れるぐらい森林浴を堪能していたら、気が付いたら、日が傾きかけていた。

「やべ、どうやら寝てたらしい。」

ぐぎゅるるる！

腹が、食い物をよこせと催促している。

「腹へったな。半日食べてないからな。この泉を拠点にして今日は一夜を明かすか。そうと決まれば飯だな。」

泉の水を飲んでから、食料を探しに行く。

「何か食べれるものないかな？」
と探している。

とげとげした巨大芋虫みたいなモンスターが数体出てきた。

「確かこいつは、『ニードルキャタピラ』だ。ただの雑魚のモンスターだな、初の実戦には物足りないが、いいか。」

キャタピラがニードルを飛ばしてくるが、そこまで速くないからかわしつつ魔法を使う。

「数がいるから…ダークファイガ！ライデイン！合成！」

「ダークライトニング！」

ツバリバリバリ！！

ニードルキャタピラたちが黒焦げになってG「ゴールド」を残して消し炭になる。

「呆気ないもんだな、探すの再開しますか。」

また探して少しすると、ウサギがあらわれた。けど、頭に角みたいなものが生えている。

よく見ると角ではなく、ニンジンが生えていた。どうやらモンスターではないみたいだ。

「野菜と肉を同時に手に入れて一石二鳥？この世界は本当に未知で溢れているな。楽しいからいいけど。じゃ、戻るか。このウサギ、えーとニンジンラビットと名付けよう！今夜の飯はこいつで決まり

だ。」

泉に戻る途中で見つけた木にイチゴが成っていたから10個ほどとって食後のデザートにしよう。イチゴって木に成るのか？いや、こういうものだと思うことにしよう。

泉にもどり飯の準備をしていた。

「ニンジンラビットどうやって食べよう？……丸焼きでいつか。味付けが欲しいな、ウオーター・ver・ソルト！もはや俺には魔法などお手のものだぜ。」

「ファイア！」

集めた木にファイアで火を着けてニンジンラビットを焼く。

……………。

「そろそろ焼けたかな？いただきます！」

塩加減がきいて、

「美味い！ウサギの肉ってうまかったんだな。このニンジンもうまいな、新鮮とれたてだもんな。」

「次はデザートのイチゴだ……甘い！とてつなく甘い！どれもう一つ……。」

次のイチゴを口に運ぶが「苦っ！え？につが！なんだこれ？どうなってるんだ？」

「他のイチゴはどんな味なんだ？うつわ！酸っぱい！レモンより酸っぱい！こっちは？しょっぱい！これが一番強烈だ！塩の塊食ってるみてーだ！うえ、水！水！」

俺は水をがぶ飲みした。全部食べた結果、あのイチゴは4割ほどが甘いやつみたいだ。

「すごいイチゴだったな、色々な味がした。マジカルイチゴと命名してやろう。」

「さて、これからどうしよう？浮かれてて状況が把握できてなかったな。まず俺の服装が、ジーンズとTシャツの上に白のパーカーだな。しかも裸足。あと武器が手入れていた脇差しの臍しかない。刀の炎鬼はベッドの下だな、なぜか念じてても炎鬼が出てこない。異世界じゃダメなのか、クッソー！なんのための二刀流だよ！」

「嘆いても仕方ないな。これからのことを考えよう。確かガルガンシアの近くだったから。ガルガンシアにとりあえず行こう。そのあとにアルダ村に行きたいな。」

「そうだ、ステータス見てなかったな。確認しとかないとな。」
(ステータスウィンドウ表示。)

ステータスウィンドウ出ると思ったら出た。

ムサシ

LV・121

HP	:	2304	/	2304
MP	:	1429	/	1429
class	:	ドラゴンスレイヤー		
AGE (年齢)	:	17		
性別	:	男		
種族	:	人間		
STR	:	2617		
VIT	:	501		
DEX	:	733		
AGI	:	1045		
INT	:	612		
WIS	:	881		
LUK	:	333		
FOOD	:	98		

あれ？レベルは同じだけど、能力値がプレイしてたときよりかなり高い？なぜ？

「まさか、俺自身の強さを上乘せしてる？いや、それ以外考えられないな。このラスボスクラスのステータスは。人外か俺は！」

アイテムウィンドウを見てみる。

武器

E：朧（脇差し）

防具

E：下着

E：パーカー（白）

E：シャツ

E：ジーンズ

「本当に着ているものが出るんだな。（女の子がノーパンなのが丸分かりだな）……………はっ！？俺はいまなにを。これがミヤモトクオリティか！？内なる変態が表に出てくるなんて、なんて恐ろしい！注意しないとな。」

「気を取り直して次はスキルウィンドウだ。」
クラスードラゴンスレイヤー

スキル

ドラゴンブレイド

パワーブレイク

アーマーブレイク

ダブル

フラッシュ

ブラックジャック

・
・
・

能力変化

攻撃力、物理防御力の上昇。ドラゴンの加護。特定の技無効化。完全変化。

「やっぱり改めてドラゴンスレイヤーのクラスは凄いな。高位以上のドラゴンを千体倒すことでなれる伝説のジョブだからな。あれは大変だった。」

「あとはスキル欄に俺の使える魔法が書いてないな、異世界の魔法は載らないのか。」

これは厄介だな。戦士系のクラスなのにウォーザードクラスの魔法が使えるのが教団とかにばれたらまずいな。全力で潰しに来られそうだ。魔法はあまり使わないようにしないと。

「そついや気の方はどうなってんだ？」

手から気弾を撃つ。

ぽう、ドオオン！

木が爆散した。ステータスを見る。

MP：1429 / 1429

やっぱりMPは減らないか、なら……。

「フラッシュ！」

ズババババ！ボロボロボロ。

朧を抜き、4連撃を木に放ち木が細切れになり落ちる。

MP：1409 / 1429

……つぎは。

「ウオタガ！マヒヤド！」

コポポポッ。ピーーン！ゴトッ。

ウオタガを上空に打ち上げ、マヒヤドで凍らせた氷の塊が落ちた。

MPを見る。

MP：1314 / 1429

「MPが異世界の魔法でも減るな。気は別みたいだが。」

「さて、今日はこの辺で寝るか。確か南西にガルガンシア王国があったはずだから、明日いくか。」

泉の水を飲んで、結界をはり、パーカーを被って寝た。

「（明日から本格的にロールプレイだ。ワクワクするな。憧れのRPGで現実に冒険できる、ゲーマー冥利に尽きるってな。）」

俺は冒険にワクワクし、さまざまな想いを馳せて興奮しながら、まどろみに堕ちていった。

ついに、エターナルに（後書き）

RPGに限らず、ゲームや小説、アニメは見ている人ややる人に夢と希望とやる気を与えてくれると思うんです。

俺は小説を書く人、ゲームを作る人を本当に尊敬します、何度希望をもらったか分からないです。私事ですいません。

感想、意見待ってます。

ガルガンシア王国（前書き）

書いているとRPGがやりたくなってくる。
抑えないと。

ガルガンシア王国

ふわっ。

優しい風に頬を撫でられ身じろぎをして寝返りをうつと、朝日に照らされた泉が光を反射させ、朝の光が木の根元で寝ていた男の瞼に突き刺さり刺激する。

「んあ、ふあああ。よく寝た。久しぶりの快眠だったな。気分もいいし体調もすこぶるいいな。」

起きたばかりの目に朝の日差しは強く、少しばかり目がいたいのが、それすらも良い目覚めを促している。

ジャバツ。バシャツ。

泉の水をひとすくい手にとり、顔を洗う。

泉の冷たい水は完全に起きるには充分だった。

「ああ、気持ちいい。スッキリした。ゴクッゴクッ。プハア！」

顔を洗い覚醒した俺は水を喉を鳴らしてのみやっひと心地が着いた。

「ふう。朝飯を採りにいくか。」

そついい俺は1日の始まりを告げる原動力を採りにむかった。

森の中を朝の散歩をかねて探索していると、ザアザアと水の流れる音が聴こえてきた。

俺は水の音が聴こえる所に向かうことにした。

「着いた。水の音は滝だったのか。魚とかいるかな？探してみよう。」

それほど大きくもないが小さくもない滝が15mほどの崖の上から、猛々しく水が落ちていた。

俺はもう少し下流で魚探すことにした。

しばらく川を見ながら下流にむかい沿ってあるくと小魚が群れて泳いでいた。

「何の魚だろう。鮎みたいな魚だけど少し大きいな。どうやって獲るか、サンダー使えば、一発だけど。他の魚も一発だからな、数匹だけ欲しいのに。」

俺は頭を総動員させて、いろいろ考えた……………チーン。
結果。

「掴み取りだ!!」

原始的だがこれが一番と思えた。サンダーは全部死んじゃうし。槍を作って突こうにも小さいから潰れてしまう。ていうことで掴み取りだ。

「までまで、逃げるな。あつ、岩影に逃げやがった。ちくしょう、俺をなめるなよ。絶対捕ってやる！」

俺は川から少し離れ気配を消す。警戒を緩めて五匹ほどがゆっくり岩影から出てきた。

「（フッフッフ、俺に姿を見せたな？俺の鍛えてきた身体能力で捕まえてやるぜ。）今だ！」

俺の流れるような、かつ、すばやい動きで音もなく水の中に手をいれ鮎もどきを捕まえる。これを5回繰り返した所、五匹すべてとれた。

「よしっ、とれた。けどもう少し足りないな。ん？」

少し離れた下流にニジマスみたいなのがいる。よし捕まえよう。

あの大きさなら突いても潰れないだろう。

「アイス・アロー。」

極小の氷の矢を放ちニジマスに見事ヒットして、貫通した。

浮いてきたニジマスを手にとり。

「ニジマス！ゲットだぜ！」

俺の声が響き渡った。しかしなにも起こらなかった。

「……やばいな。本当に浮かれすぎてる。一人でなにやってんだか。いたい子だろ、俺。ハア。」

自分でいたい子認定した俺は羞恥と自己嫌悪で泉に俯きながら、旅の仲間がいればいいのになぁ、と思いつつ戻っていった。

泉に戻り、ニジマスを早速捌いていた。

「鮎は丸焼きにするとして、ニジマスは刺身にするつもりだったけど、なんで身が黒いんだ？ニジマスじゃなくて毒マスだったのか？ま、焼けば大丈夫だろ。ひと切れ焼いてみよう。」

焼けた。

さぁ、食べようと丸焼きの鮎の頭をとったら、頭から頭から先が崩れ落ちた。なんで！？と思ったが鮎の皮だけが落ちていた。

「エビ？」

鮎の身はプリプリのエビのそれだった。

「ホントこの世界は楽しませてくれるな。いただきますつと。あむ。」

鮎？エビ？エビアユとしよう。エビアユはとても美味かった。極上のエビそのものだった。このエビアユ味が濃い！一口でご飯がいっぱい食えそうだ。

「ニジマスも食べよう。あむ。」

ニジマスの刺身を生で食べてみたら。

「う、生だ。けどこれは魚の生じゃなく肉の生だ。けど美味しいな、魚か肉の脂がのってて、生ハムみたいだ、しかもアルコール。それもブランデーに漬けたみたいにアルコールがすごい。酔いそう。エビアユに巻いて食べよう。」

「エビのプリプリと肉の味とブランデー。ミスマッチみたいだがかなり美味しい！ニジマスは酒肉マスとしよう。」

食後。

「あー満足だ。美味しい飯は元気が出るな。朝飯にしてはヘビーだった。一休みしたらガルガンシア王国に向けていくか。」

泉の水を飲み、出発する準備をする。準備と言っても食事の後片付けと臙の装備ぐらいだが。

今、俺は森の入り口にいる。

「ここが俺の冒険のスタートラインだ。1日だけだったが世話になったな。」

だれともなく森に礼を言う。俺の始まりの場所だからな。また来たいな。

「さあ、俺の物語の始まりだ！」

意気込んで森を出たのは良いけど遠い。果てしなく遠い。

「馬が欲しいな。なんでルーラの魔法が使えない！使えれば一瞬なのに。仕方ないから歩くけどさ。」

ぶつぶつ文句を言いながらガルガンシア王国へむけて歩く俺。

「やはり冒険の苦楽をともにする仲間がいればな。ここに翔「シヨウ」が居ればな、無理かあいつは異世界で平和に生きてるからな。」

一人の寂しさを紛らわして孤独に喋りつつ、はるか彼方にあるガルガンシア王国を目指して進んでいるのだった。

視界の端に映る茂みからなにかが飛び出してきた。
モンスターだ。

表示名は『コヴォルト』。

「コヴォルトか。確かこいつは単独では行動しないはずだが。」
と思ったがコヴォルトが空にむかい咆哮をあげた。

グルアアアア！

コヴォルトは咆哮をあげた！コヴォルトが現れた！

「群れで行動するとは知ってたがこれほどとはな。」

あっという間に俺の周りを囲むように四、五十匹が取り囲んでいた。

「モンスターの癖に賢いじゃないか。」

コヴォルトは下半身は人みたいだが、上半身はワニとトカゲが融合したみたいな形をしてる。尻尾もありワニのそれと同じだ。涎を垂らしながらこちらを窺い、ジリジリと寄ってくる。

「頭がいいやつらだ、並みの奴だったら囲まれた時点で終わりだったが、相手が悪かったな！俺はそうはいかないんだよ！」

そういつて腰に差した臙を抜き放ち、臙を正眼に構える。

「脇差しじゃ格好がつかないが。二天亜流、無刀の奥義、剣鬼。」

ツパアアアン！

俺は研ぎ澄ました剣気を溜めて解き放つ。

研ぎ澄まされた俺の剣気は触れなくともその身が切れる。その様、剣の鬼の如し。

十数匹は剣鬼により真つ二つになる。

「剣鬼は全方位攻撃で使い勝手は良いけど、所詮は剣気か。威力が低い、こればかりはどうしようもないな。」

「エアロガ。」

エアロガを臙に纏わせることにより臙の切れ味、俺の剣気、風の刃で切れ味が桁違いになる。

「二天亜流、一刀、特殊奥義の二、風花繚嵐。」

下げていた臍を上に取り上げる。

それだけで数多の風の刃と斬撃が生き物の入り乱れ、嵐のように
荒れ狂う！

「オーバークルだったな。全方位攻撃だから良いと思ったけど暴風
がおきて、辺りが台風の軌跡を残したみたいになるのが、唯一欠点
だな。」

コヴォルトがGを残して塵と化していた。

「お、コヴォルトの牙が結構な数アイテムドロップしてるな。」

おれはGを拾いコヴォルトの牙をポケットに詰め、ガルガンシア王
国に向かい再び歩きだした。

「王都ガライア」

「や、やっと着いた。喉が渴いた、枯れそうだ。酒場に行こう。い
や先に寢床の確保か、宿を探そう。」

しばらく宿を探し回り高級そうな宿やボロボロの宿、多種多様の宿
があったが、俺はペンション風の白蛇亭という宿に決めた。

カランツ。

「いらっしゃいませ。お泊まりですか？」

「ああ。そうだ。5日ほど泊まる。いくらだ？」

「お食事はいかがいたしますか？」

「毎日、朝夕の食事を頼む。」

「5日の宿泊に朝夕の食事込みその他で1350Gになります。」

「わかった。先に払う」

コヴォルト数十匹で2000Gほどあったので先に支払う。銀貨1枚と銅貨35枚を宿主に渡す。

「はい。ちょうどですね。昼食はどういたしますか？」

「いや、昼は外で食べる。この近くに酒場はないか？」

「この宿の近くですと、宿をでて大通りを道なりに行ったところに『宵闇』という酒場があります、依頼所も兼ねてますのでそこでクエストを受けることもできます。」

「わかった。ありがとう。」

俺は宿を出て言われた道を歩き酒場に向かうとそれらしい建物があり、扉の上には『宵闇』と書いてある。

「ここで間違いないみたいだな。」

ギィ、ボタン。

入るとそこは、酒場と呼ぶに相応しい場所だった。俺は喉を癒すため酒場のマスターらしき人に向かう。

「冷たい飲み物を頼む。」

トンッ

「50Gだ。」

大きめのコップにビールみたいなを出してきた、俺は50Gを払い、一口飲んでみる。ビールみたいなものは林檎の果実酒だった。あっさりとしてアルコールは強くなく飲みやすい、マスターが俺の歳を気遣ってくれたのか？俺は一息に飲み、金を払いおかわりを頼む。

「マスターもう一杯。」

トンッ

コップが置かれる。それを今度はゆっくり飲みつつ、近くにあったクエストボードをみる。

「（素材の採取に、魔物の討伐、護衛の依頼か。）マスター、オスメのクエストはないか？」

「おまえさんは冒険者か？そうは見えないが。」

そりゃそうだ。裸足でラフな格好して脇差し一本じゃ、冒険者に見

えないか。

「ああ、そうだ。金が無くてな。で、どうだ？」

「腕っぷしに自信があるなら王国が開く拳闘大会に出るといい。」

「拳闘大会？」

「ああ、王宮が兵士や宮廷魔法使いの募集をかねた大会だ。賞金は5万Gで、王宮で働くチャンスがある。ただ殺しは禁止だが死ぬかもしれないぞ。」

「王宮勤めは興味ないが、5万Gは惹かれるな。当分、路銀の心配が要らないな。よし、その拳闘大会俺もでるか。いつどこでやるんだ？」

「ちょうど明日だ、場所は王宮お抱えの兵士の訓練で使うスタジアムだ、でかいからここからでも見える。申し込みは明日の予選の前に名前を控えるだけだ。それにこれは噂だが宮廷魔法使いや熟練の兵士が紛れてるらしい。」

「なるほど。マスター、ありがとう。」

「ギャハハハハ。お前みてえな青二才が優勝できるわけねえだろ！優勝はこの俺様だ！」

毛むくじやらの大男が下卑た笑いをしながら嘲笑ってきた、その途端さっきのマスターとの会話を聞いてたのか周りが嘲笑ってくる。

「ふん。弱い奴ほどよく吠える。お前こそ、でかい図体で動けない

んじゃないか？」

俺の言葉でカウンターの向こうのマスターがこれからのことを思い青ざめていた。

もしかして俺がやられると思ってんのか？

「なんだと！てめえ！今ここで血祭りにあげてやる！」

「やれやれ、相手との実力も分からないなんてとんだ三流野郎だな。」

俺は目を閉じて心底嘆息した態度をとる。

「俺はレベル24だ！死ね！てめえ！」

背中の大剣をとりこっちに毛むくじらがくる。俺は閉じていた目を開けると同時にとてつもない殺気を出し、腰の臙を抜き放ち、毛むくじらの大剣を切り上げ、毛むくじらの首に臙を添える。

キーン！

「な！！？」

大剣の半ばから切り落とされ気付いたら首に刃物添えられている。これは恐怖だろう。

「レベル24か、並の奴なら大したものだが。それでは本物の強さを持ったやつには勝てないぞ。それとそんなナマクラな大剣じゃ、切り合いになったら折れるぞ？悪かったな意地悪なこと言って。」

言いながら首添えた臍を離してやる。大男は俺の殺気と恐怖で硬直したままだ。酒場にいた低レベルだと思われるやつらは俺の殺気で気絶していた。

「マスター。悪かったな、騒ぎを起こしてしまつて。」

「い、いや。こんなことはよくあるからな。それよりおまえさん強いんだな、それぐらい強いなら優勝できるかもな。」

「ありがとう。それとムサシでいいよ、マスター。」

それから俺はマスターと楽しく雑談して、毛むくじやら、いや、アスロンと和解して他のみんなとも意気投合して酒場が楽しい笑いに包まれた。

「それじゃマスター、アスロン。俺はそろそろ宿に戻るよ。」

「そうか。ムサシになら明日の予選は大丈夫だろう。頑張りな。」

「なんせ俺に勝つたんだ。俺と当たるまで負けるなよムサシ。」

「頑張るよ。それとアスロン。自分の実力を正確に見極め驕らずに修行すればもつと強くなれるぞ。限界なんてものは無いんだよ。それじゃ宿に戻るよ。」

そう言い残し俺は酒場『宵闇』を後にした。

宿にて、俺は食事をとり臙の手入れをしていた。

「今日は楽しかったな。アスロンも悪いやつじゃなかったし、また明日行こう。手入れ終わり！今日は疲れたからもう寝るか。」

ベッドに転がり、目を閉じて心地いい微睡みに誘われていき闇に落ちた。

く朝く

コンコン。

部屋をノックする音がする、朝の食事を届けに来たらしい。

「ん、朝か。んんん。よっと。」

ベッドの上で大きく伸びをして飛び下りる。

ガチャッ

「ゴメンゴメン、待たせた。運んでくれてありがとう。」

そういつて銅貨数枚をチップとして手伝いの少年に渡す。

ボタン。

水道が無いから桶にウォーターを唱え顔を洗う。

「食べますか。いただきます。」

朝らしいメニューだったがフランスパンとジャム、卵のスクランブルエッグとサラダに飲み物としてミルク。

「ごちそうさま。美味かったけど多分毎日食ったら和食が欲しくなるな。」

準備を整えて、大会の会場、スタジアムに向かうため宿したに下りる。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

宿主が挨拶してくる。

「ああ。快調だよ。よく眠れ過ぎて寝坊したよ、ところでスタジアムはどうやって行くんだ？」

「スタジアムへは大通りを王宮に向けて歩き、王宮の傍らにあります。お客様は拳闘大会に出場されるので？」

「そうだ。優勝してくる、いつてくる。」

「お気をつけて行ってらっしゃいませ。」

カラン。

「ちょっと距離があるな。ま、散歩がてら丁度いいか？」

「スタジアム」

着いた。

「でかいな。面積どれくらいだろ？」

東京ドーム三個分はあるなこんなところで試合するのか。
スタジアムというよりコロッセオだろ。

「お、あそこが受け付けか。」

きれいな女の人たちが対応している。俺は受け付けのお姉さんたちに近づく。

「すみません、拳闘大会に出たいんですけど。」

「はい。では、名前と年齢をお願いします。」

差し出された用紙に名前と年齢を書き込む。

「書きましたよ。」

「では、中に入り向かってつきあたりを左に進んでください。」

俺は中に入り言われたとおりに進むと今度は美少女がいた。

「こんにちは。選手の方ですか？」

「こんにちは。そうだけど。」

「ではこちらの部屋にお入りください。もうすぐ予選が始まります」

ので。」

可愛いけど事務的だなと思いつつ、部屋に入ると入った扉とは別の扉があり扉にFとかいてある。周りを見渡すと他の選手が20人ほどがいて、ほとんどがピリピリして互いに牽制している。

周りを観察していると。

『会場の皆様お待たせしました！ただいま準備が整いましたのでここに拳闘大会を開催いたします！』

見せ物になるわけかべつに構わないが魔法が使わない方が良さそうだな。

『ルールを説明いたします！予選を午前に行い、本選トーナメントを昼食をはさみ午後に行います！予選のルールは簡単！各ブロックにいる選手全員でバトルロワイヤルをします。

本選に上がれるのは各ブロック二名です。それではAブロックの選手達からスタートです！』

ワアアアアア！！！！

予選が始まったかこの中から二人か。一人は俺として、あとはみんなよわ……一人、できる奴がいるな。

噂の熟練兵士か？

待つこと二時間ほど。やっと俺のいるFブロックの予選バトルロワ

イヤルだ。

『残すところあとFとGブロックになりました！次はFブロックの選手達の出番です！』

Fと書かれていた扉が開き、選手たちが出ていく。もちろん俺も。

スタジアムの中央は一段高い台で四方20mほどの広さがある。

『台の上から落ちたり、行動不能になったら失格で、立っているものが二人になるまで戦ってもらいます。それでは！バトルロワイヤル開始です！』

開始の合図とともに皆近くのものとは戦い始める。皆、己の身や魔法で戦っている。

「面倒くさいから二人になるまで傍観してよ。秘技！鏡花水月。」

この技は気配と魔力、気を空間に溶け込ませることで俺のことを認識しづらくなる技だ。

しばらく傍観していると残りが数人になったので鏡花水月を解く。

熟練兵士と思われる奴が突然現れた俺に驚いたが気にしないで戦いつづけ、立っているものが俺と熟練兵士の最後の二人になった。

『バトルロワイヤル終了！Fブロック最後まで残って居たのはムサシ選手とライアン選手です！』

その後Gブロックも終わり昼食の時間になったので昨日の酒場、宵闇に向かう。

カラン。

「ん、おお。ムサシじゃねえか。」

「よう、アスロン。勝ったのか？」

「もちろんだ。俺様が負けるかよ。」

「ハハッ。そうか。マスター！何か軽いものを頼む！」

「おまたせ。アスロン、ムサシ勝てたのか？」

マスターがサンドイッチを持ってきて言う。

「おう！」

「まあな。」

二人で返事をする。

そっぴえば気になったことをアスロンに聞いてみる。

「なあ、アスロン。お前のブロックの他のやつどんなやつだった？」

アスロンは真面目な顔になり答える。

「それがかなり強いやつだった。熟練の戦士って感じだったな。」

「やっぱりか、俺のブロックもそうだ。」

「どういことだムサシ？」

「俺の推測だが多分全てのブロックに一人は王宮直属の精鋭がいる。」

「なんだと！？なんでそんなことを？」

「強いやつがいないか探してるんだろうな。この王国は王宮の力が強い、至るところから強者を引き抜いてるんだろう。」

「なら俺様が強いところみして王国一番の戦士になってやる！」

「そうか。アスロン、そろそろ戻ろう。時間だ。」

「俺はムサシ！お前も倒すからな！」

俺はポカンとしていた。

「プッ、あっはっはっは！面白い。なら負けないで勝ち上がってこい。アスロン！」

くスタジアムく

本選トーナメントが始まり第一試合は俺もアスロンも勝ったが、アスロンは熟練兵士と思わしきやつとあたりギリギリだった。

第二試合は俺の番から始まった。

『第二試合の始まります！この大会が初！ムサシ選手！対するは毎回上位に食い込むライアン選手！それでは第二試合開始！』

相手は俺と同じブロックで勝ったやつだ。

「二天亜流、一刀、二の奥義、斬空閃・乱！」

斬撃の乱舞をライアンは数発迎え撃つが、一発肩にあたり鎧が弾け飛ぶ。

「ぐっ。」

それでも果敢にこちらに向かってきて剣を横尻ぎに鋭く振り俺にあたった……かのように見えたが、俺は凄まじいスピードで動き残像を残し、ライアンの背後に回る。

「なっ、なに！？どこだ！？」

急に消えた俺に驚くもすぐに立て直し背後にいた俺に斬りかろうとするが……。

「遅い。」

シュドッ！ドサッ。

首筋に手刀を叩き込まれ脳震盪を起こし、うめく間もなく気絶し倒

れた。

『ライアン選手気絶！ムサシ選手の勝利！』

俺は控え室に戻った。

アスロンは負けた。相手は魔法使いだがレベルは30を越えているだろう。俺は準決勝も危なげなく勝ち、決勝に上がった。

『さあ！この大会を制するのはどちらか！？今大会初出場にして決勝戦進出したムサシ選手！！それとも今まで負けなし！拳闘大会の覇者！エルトリーゼ選手！』

相手が選手の説明とともに着ていたローブを脱ぐ。耳が長い……。

！？

女！？しかもエルフ！？

今までローブを深く被っていてわからなかったけどまさか女とは。だが戦場では女も男も関係ないあるのは生か死の殺し合いのみ！

『それでは決勝戦！開始！』

いきなり呪文を唱えてきた！

「ファイアークラッカー！」

巨大な炎の玉がゴウゴウと唸りをあげてくる。

かわして着弾したところを見ると炭になっていた……。

「殺す気か！？」

俺の叫びも空しく淡々とファイアークラッカーを何発も撃ってくる。

「少し本気でやってやるか。」

魔力、気。合成！咸卦法！！

俺の身体が淡い光を出し、周辺の空気が荒れる。

「！？。」

相手が身構えるが遅い。一瞬で決める！

ファイガ！ダークファイガ！ヘルファイガ！合成！！

「インフェルノ・ヘルセ狂う黒獄焰！！！」

もちろん死なないように手加減はしてる。

「な、なんだこれは！？」

エルトリゼに全てを焼き消す黒焰のプロミネンスが蛇のように向かう！

「ファイアボール！ファイアークラッカー！フレイムボール！フレアボム！！」

エルトリゼがありつたけの魔法をぶつけて遅くなった俺の魔法を回避する。

「くっ、どこにいった！」

「これで終わりだ。」

トン。ドサッ。

エルトリ―ゼ選手の背後に瞬動、いや、もはや縮地のレベルで接近。今までどうり手刀を弱めに撃つ。弱めなのはやっぱり女の子だから。可愛い女の子を傷物にするなんて俺はできない！！ヘタレだからな。崩れ落ちるボロボロになったエルトリ―ゼを優しく受け止める。

『な、なにがおきたんだあ！？突然ムサシ選手が光を纏ったかと思うと、ムサシ選手が大会初の大魔法を唱え、エルトリ―ゼ選手が迎え撃ち回避したが、ムサシ選手が消えいつの間にかエルトリ―ゼ選手が気絶していた！！しかしエルトリ―ゼ選手が気絶しているので勝者！ムサシ選手！！』

ワアアアアアアア！！！！！！

スタジアムが勝ち割れんばかりの歓声が響く。

『優勝したムサシ選手には後程ガルガンシア王から直々に賞金が渡されます。』

エルトリ―ゼ選手が起きたようだ。

「……は！？」

「起きたようだな、さっき試合が終わったんだよ。」

「そうか。私は負けたのか。」

エルトリ―ゼが沈んでいたが顔を上げる。

「ついてくるがいい。宮廷に案内しよう。」

俺はエルトリーゼの後を追った。

ガルガンシア王国（後書き）

感想待ってます

邂逅（前書き）

なかなか満足にいくもの書けない。

邂逅

「ついてくるがいい。宮廷に案内しよう。」

宮廷に向かっているときも彼女は俯いていた。

「（俺は女の子が悩んだり泣いたりするのがイヤなのに、何のために強くなったんだよ俺は。世界を守る前に目の前の女の子すら救えないのか。）」

「……………」

「……………」

「なあ、エルトリーゼって宮廷魔法使いなのか？」

「……………そうだ。」

「なんでなったんだ？」

「成り行きだ。」

「そうか。」

王宮に着いた。

エルトリーゼが門にいる衛兵と話している。

「門を開ける。拳闘大会に優勝した者を連れてきた。」

「はっ。ただちに。」

表面上は忠義が出ているがこの衛兵、エルトリーゼに負の感情を持つてないか？

よく見れば他の衛兵も良い感情とはいえないものを持っている。

「こっちだ。ついてこい。」

連れてこられたのは、謁見の間という豪華な部屋だった。

「かけてくれ。少し待っていてくれ、王が来るまでしばし時間がある。」

エルトリーゼがこういうが。俺は誤魔化せないぞ、ガルガンシア王よ。

「いや、誤魔化さなくてもいいぞ。エルトリーゼ。」

「！。なんのことだ？」

「警備のためとはいえ、少し人が悪いのでは？ガルガンシア王よ。俺は代わり映えしない壁に向かい話しかける。」

「！！」

エルトリーゼが驚くが、まるわかりだ、気配の存在感がありすぎて

な。

「余がガルガンシア三世だ。だが、なぜ分かったのだ？」

壁からガルガンシア王が現れた。

「初めましてガルガンシア王。

俺はムサシといます。魔法を使っていたみたいですが王の気配が大きくてそれだと誤魔化せるのは素人だけです、一流の暗殺者なら分かってしまうでしょう。それならばただ護衛してるほうがマシです。」

「なるほど。今まで見破ったものがいなかったため。そのような事は気がつかなんだ。話しは聞いている、拳闘大会の優勝賞金だったな。メライデ！」

メライデという人が賞金の入った袋を持ってきた。

「ところで拳闘大会に優勝するほどの実力。余の直属の護衛にならんか？」

鎧に包まれた周りの兵士たちがざわめく。

「ありがたいお言葉ですが、俺は世界を救うために旅をしているのです。」

俺の言葉にピクツとエルトリーズとガルガンシア王が反応する。

「世界を救うとはどういうことだ？」

俺はガルガンシア王を見て、周りをチラッとみる。俺の意図が伝わ

るだろう。

「エルとメライデとこの者以外部屋から出るのだ。」

「しかし、お言葉ですが王様……」

「早く出るのだ。」

「うっ。分かりました。」

兵士が居なくなりこの場にはエルトリーゼとメライデとガルガンシア王、あと俺だけとなったところで話を始める。

「ガルガンシア王はギヤスパルクという名に聞き覚えはありますか？」

「ッ、うむ、よく知っておる。」

「それならば話は早いです。大邪神ギヤスパルクを復活させようとしている教団を倒すために旅をしています。」

「それは事実か？」

「はい。全て真実です。この国にも魔神の石柱がいますね？魔神は七柱います、全ての魔神の封印が解かれてしまうと大邪神ギヤスパルクが復活してしまいます。」

ガルガンシア王たちが驚いているが、構わず続ける。

「この国に寄ったのは偶然ですが、魔神の石柱がいるとなれば話は

別です。魔神の警備の強化をお願いします、それと各国に魔神の存在、脅威を伝え連携をとってください。」

「なぜ我が国に魔神がいると知っている？」

「俺は自分で言うのもなんですが強いです、ですから王宮に入ったときから強い邪悪な気配を感じました。」

「うむ。なるほど、確かにこの城には魔神が封印されている。しかし強いと申したな、ムサシのステータスを見せてくれぬか？」

「……………」

どうしよう。見せるべきか、教団に洩れたら大変なことになる。

「どうしたのだ？」

怪訝な顔をしてガルガンシア王が早くしろと促してくる。

「……………誰にも言わないと誓ってくださいか？」

「うむ。わかった。よいな？エル、メライデ。」

「はい。」

「分かりました。」

エルトリーゼとメライデさんが了承する。

ハア。ま、この三人なら大丈夫だろう。

「わかりました。お見せします。」

ブンッ。

俺のステータスウィンドウが現れる。

「なっ！？LV・121！？ありえない！！」

「なんだと！？しかも伝説のクラス、ドラゴンスレイヤーだと！？」

「こっ、これは！？」

上からエルトリーゼ、ガルガンシア王、メライデさん。

ハア。だからいやだったのに。

ガルガンシア王だけが我に返ったみたいだ。

「わかった。ムサシの頼みを全てきこう。しかし凄いレベルだ、ステータスが桁違いだな。旅をしていると言ったな。ならばエルトリーゼを同行させてくれ。」

ガルガンシア王の言葉にエルトリーゼが正気になる。

「いや、今はまだ連れて行けません。」

「なぜだ！？私が弱いから連れて行けないのか？」

「違う。そうは言っていない、時期が悪いと言っているだけだ。」

「エル落ち着け。」

俺とガルガンシア王の言葉も通じてない。

「私のことが醜いからか！？だからなのか！？私は弱いのか！？」

過去に何かあったのか？強さにやたらと執着してる。涙を流し始めるエルトリーゼを見ていたら我慢できなくなった。

ふわっ。

いつかフローラにしたみたいに優しく包み込むように抱き締める。

「エルトリーゼは醜くなんかない、凄い美人だ。弱くなんかない、誰よりも強いさ。ずっと周りの人に疎まれてきて一人だったんだな、なら俺がエルトリーゼの居場所になつてやる。」

「ッウ、ヒック、ウウツ、ワアアアン！！」

エルトリーゼは涙をポロポロ流し今まで溜め込んできた想いを言葉とともに吐き出していく。

十分ほどして泣き止みエルトリーゼが俺から離れる。

「す、すまなかった。汚してしまった。」

「いや大丈夫だよ。それに俺はエルトリーゼの居場所になるんだから、受け止めないでどうする。」

「／／／／……エルだ、エルと呼んでくれ／／／」

「わかった、エル。」

「／／／／。」

「なぜエルを連れていけないんだ？」

「教団を倒すには戦力が足りません。信頼できるものが4人ほどいますので連れてくるのにおそらく半年ほどかかるんです。」

「なるほど。では半年後にガライアへ来るのだな。」

「はい。明日にはここを発ちます。」

捨てられた子猫のような寂しそうな目でエルが見てくる。

「ムサシよ。では今日は城に泊まるがよい。」

「そこまでしていただけなくても良いですよ。」

「これからのことを酒を飲みながら話そうではないか。」

「ハア、わかりました。今夜は泊まります。」

ガルガンシア王が威厳漂う顔を崩し友達に見せるような表情になった。中々に気さくな王様だな。

さつきからエルが喜んだり悲しんだりを繰り返している。俺と居ると嬉しいのか？そうだと俺も嬉しい限りだ。でもエルにはしてもらわないといけないことがあるからな。そうだとっても半年は我慢し

てもらおう。

「では、夕食の用意をさせよう。エル、ムサシを客室に案内してくれ。準備ができたら呼びに行かせる。」

「はい。わかりました。行きましょう。」

エルが促してくる。

「わかった、行こうか。」

夕食が終わり今は客室にいる、もう寝るだけだ。 夕食はガルガンシアとの会話が楽しかった、敬語はやめると言われたからやめた。

コンコン。

誰か来た。

「開いてますよ。」

入るのを促すと入ってきたのは……………。

side エルトリーゼ

私、エルトリーゼ・ウィンラートは幼少の頃から人に疎まれてきた。私が言うのもなんだが類いまれな美貌を私は持っている。そのせい

で私の友達と言えるのは本くらいしかなかった。私には才能もあったらしくどんどん魔法が上達していったがさらに疎まれるようになった。

ある日いつものように本を選んでいたら、初級火魔法入門という本があったから試しに読んでファイアーボールを打ってみた。

私は火の情熱と美しさに惹き込まれた、だが、私の故郷ユグドラシルは水の神ペリアナイアを崇拝していたため、私は邪教徒と言われ、私は居られなくなり故郷を出て火の神シュラハーを奉る国アライエンに行った。

アライエンはドワーフの国だったが私を普通に扱ってくれた。私は修行をして火の神シュラハーの名のもとにパイロマンサーのクラスになり、旅に出た。

ガルガンシア王国でガルガンシア王にふとした事で謁見した。

私は経緯をかなり、実力があるという事で二年契約で宮廷魔法使いになった、知的好奇心が高い私は王宮の書庫を読みあさりすべて完読した。

私はここでも鳴り物入りで宮廷魔法使いになったと影で言われていて、嫌気が差したところに、拳闘大会で見たこともない火の魔法で私をあっさりと彼は倒した。

王宮での彼の話しは驚くとともに知的好奇心が揺さぶられた、彼の旅に私が同行する話しになったが彼は、ムサシは私を連れて行けないと言った、私は疎まれつづけ、また疎まれるのか、なぜ連れて行けないのか激しく彼に聞いた。

そしたらムサシは困った顔をして私の方に来て、なんと私を優しく包み込むように抱き締めてきた。

私は胸がきゅんとなった。ムサシの腕の中は今まで感じたことの

ない、すべてを包み込むような温もりと、ムサシの俺が私の居場所になってくれると言ってくれ、その言葉が私の心を満たしてくれた。

私は夕食のときもいつの間にかムサシを見つめていた。

ムサシが私に話してくれると胸が高鳴り、嬉しくなるのだ。

こんなことは初めてだ、でも嫌ではない。こんなのは私ではない！

私にとって人というのは知的好奇心や利用価値があるとは思っていなかった。

私に都合が悪くなれば、こちらから背を向けるか、相手を排除してきた。

それが私……………エルトリゼ・ウィンラートという女だった……………

…そう、だった…。それが今私の心はムサシという男に大きく揺さぶられていた。

最初はムサシという男を私は恨んでいた、レベル35のパイロマンサーの私を全力を出さないで戦ったことを。

しかし、謁見の際のムサシの大邪神という言葉で知的好奇心がうずいたが、それよりもムサシのステータスが信じられなかった。

レベルが100を軽く越えてLV・121だと！？しかも伝説のクラス、ドラゴンスレイヤー。お伽噺の中の勇者でもそんなのはいない。彼の強さは史上初でまさに勇者に相応しかった。

ついで、私がムサシの旅に同行するというのをムサシが断ったとき、私は激しく侮辱され、弱いのだと言われた気がして今まで我慢してきたものが爆発して、涙が溢れてきた。

そこで涙を流す私を抱き締めってくれ胸がキュンとなり、とてもムサシのことが気になりだした。

そして今、私はムサシの客室の前にいる。どうしてもムサシに会いたくなり、あの優しい笑顔がみたいと思うと、私は扉をノックし

ていた。

コンコン。

「開いてますよ。」

ムサシの声を聴く、それだけなのに胸がときめく。

私は扉を開け部屋に入る。きっと私の顔は赤くなっているだろう。

side エルトリゼ end

side ムサシ

部屋に入ってきたのはエルだった。顔が紅潮しているように見えるが…

「どうしたんだ？エル、こんな夜中に。」

「用がないときはダメなのか？」

うっ。身長差で潤んだ瞳で上目遣いに見られるとかなりクる。

エルはエルフだが長い金髪で耳はピンと凛々しく立っていて白く細いたおやかな手足、胸だけは成長が見られないが、俺は小さくても全然構わない！

つまりなにが言いたいかというと、ものすごい美人だ、いや、まだ美少女だな。

「ダメって事はないけど、なにかあつてきたんだろ？」

「じゃあ、一緒に寝てくれないか？／＼／」

「え…、一緒に寝るって男と女だぞ？」

「ムサシは私が嫌いなのか？」

また潤んだ瞳、上目遣いのコンボが俺に炸裂！急所にあたった、こ
うかはばつぐんだ！

俺は女性に免疫がないから、これはホントに辛い。

「いや、嫌いじゃないけど、やっぱり不味いだろ。」

「ムサシは私の居場所になつてくれるって言つたじゃないか。」

言つた。確かに言つた。もう少し言葉を選べば良かった。

ああ、エルが泣きそうだ。仕方ないな、俺が泣かすわけにはい
かないな。

「わかつたよ、エル一緒に寝よう。ほら。」

俺はベッドに入りエルが入るスペースをあける。エルがゆっくりと
きておすおすとベッドに潜り込むと俺に抱きついてきた。

ああ。女の子の暖かさと柔らかさが。それに良い臭いが！

理性がプツンしそうになったのを繋ぎ止めたのはエルの閉じられ
た目から雫が零れたからだ。俺もエルを抱き締め返して眠り
についた。

「うーん、ん？」

腕に柔らかいものを感じて俺は目が覚めた。

薄く目を開けると鮮やかな色の金髪が目にはいつてきた。

「そっか。昨日はエルと一緒に寝たんだっとな。」

俺は横で気持ち良さそうに寝ているエルを抱き締める。柔らかい。もぞりとエルが動いた。

「うーん、ムサシ？」

「あ、起こしちゃった？」

「な！？なんでムサシがここに！？／／／」

「昨日エルが部屋に来て一緒に寝ようって…」

「え、あ、ああ／／／そうだったな／／わ、私は部屋に戻る／／／」

「ああ、また朝食でな。」

そそくさと退散していったエル。やっぱり一緒に寝ただけでも恥ずかしかったのか？

朝食を食べ終わり王都ガライアを発つために準備をしているところにガルガンシア王とエルがやってきた。見送りだと思う。

「なんだ、見送りに来てくれたのか？」

「なに、余はよいと言ったのに、エルがどうしてもとな。」

「が、ガルガンシア王／＼」

「そうか、見送りありがとう。エル。」

「ふ、ふん。最低限の礼儀だ。私は別に……」

「それじゃあ、ガルガンシア。俺はそろそろ行く。」

「そういえば、どこへ行くのだ？」

「メルダの町に行ってからアルダ村だ。」

「そうか。では、また半年後に酒を酌み交わそうではないか、ムサシよ。」

「ああ。楽しみにしてるよ、ガルガンシア。それとエル、例の件を頼むぞ？」

本当は頼むのは気が引けるけど、ガルガンシア王国の為だからな。

「わかった。ムサシ、それと……あの……その……」

「俺は半年経ったら絶対またガライアへ来るから、なんたって俺は

エルの居場所だからな。またな。」

俺はエルの頭をポンポン撫でながら言う。

「わかった。待ってるノノ」昨日はエルが凄いデレてきて原作知ってるからびつくりしたけど、今は照れながらも凜々しさを保ってる。俺としてはデレて頼ってくれたほうがいいんだけど。

「じゃあ、また半年後に。ガルガンシア、エル。」

「うむ。魔神の警備強化と各国への伝令、連携は任せておけ。」

「またな、ムサシ。絶対帰ってくるんだぞ。」

俺は二人に見送られ王宮を出た。

「ここからメルダの町まで歩きで数日、馬車でゆつくり行つて1日か。馬車で行くか、幸い金は賞金の5万Gがあるからな。あとは装備を整えたいな。それと食料を買い込むか。」

路地にある、二本の両刃の西洋剣をクロスさせた看板を発見。

「ここが武器屋か、なんかベタな感じだな。」

武器屋に入ると、小太りの店主がカウンターにいた。壁は装飾のハデな大剣やら西洋剣がところ狭しと掛けてある。

他には武器の種類に分けて樽に無造作に突っ込まれている。

「店主、このようなもので大きいのはないか？」

刀と言っても解らなそうだから腰から朧を抜き、店主に聞いてみる。

「知らねえな。その樽に無いなら諦めな。」

店主が無愛想に答える。金がないと思ってるのか？仕方ないと思い樽の中を物色していく。

結論としてあったはあったが、数本だけだ。しかもナマクラより少し良い程度だ。

「（はあ、ないよりいくらかマシか。）店主、これとあとナイフを数本くれ。」

俺はなんてことはないごく普通の刀を選んだ、すぐには折れないと思うが。

「三千五百Gだ。」

俺は賞金袋の中から銀貨を三枚と銅貨五十枚をだして渡した。

通貨は銅貨一枚で十G、銀貨が千G、金貨が一万Gだ。金貨の上に、マジック金貨というものがあり一枚で十万Gらしい、見たことがないから分からないが。

次に向かったのは防具屋だ。これまたベタに赤い盾に白い十字架が入っているやつだ。

中に入ると今度は中年のおばちゃんがいた。

「いらつしゃい、なにが欲しいんだい？」

おばちゃん聞いてくるが俺の欲しいものは決まっている。それは靴だ！このエターナルに来てからずっと裸足だから痛い、若干血が滲んでる。

「靴はないか？あと服を一式欲しい。」

エターナルにいる間ずっと同じ服は不潔だからな。

「冒険者ならこの靴がいいよ。」

渡してきたのは運動靴、スニーカーだった。履いてみる。

少し歩いてみるが中々にいい、サイズもピッタリだ。

「靴はこれにする。服を頼む。」

またおばちゃんが見繕ったのを渡してくる、黒のコートとトランクス、赤いシャツに灰色のスボン。

俺は服のセンスはないがこれはいいと思った。

「うん。これにする。全部でいくらだ？」

「二千六百Gだよ。」

俺は金を払い、防具屋を後にして雑貨が売っている店で旅行用みたいなかいいバッグを買った。

服などを入れて、食料を買いに向かった。

食料を買い求め、干し肉や干し果物があるていど買い、今は馬車屋

にいた。

「メルダの町に行きたいんだが平気か？」

「メルダの町なら今から行けるぞ。」

「なら頼む。」

「五百Gだ」

俺は金を払い馬車に乗り込むと。
馬が歩き始めた。

邂逅（後書き）

意見、感想、アイディアがあつたら遠慮なくどうぞ！
でも酷評はかんべん…

メルダの町…（前書き）

たくさんの方に楽しんでもらえるよう頑張ってます！

メルダの町…

王都ガライアを出発して半日が経っていた。

俺は馬車に揺られながらメルダの町に向かっていった。

今はどんよりとした空で、曇天というやつだ。

「しかし、この揺れは尻がいたくなるな。」

「メルダの町に行くのは家族にでも会いに行くのですかな？」

俺はメルダの町までの道を知らないし、馬を操れないので馬車屋のおじいさんにやってもらっていて、暇だからおじいさんと話している。

「いや、観光みたいなものだよ。旅をしてるんだ。」

「うらやましい限りですな、私など馬車屋の息子だったもので気が付けばこの歳です。私もあと二十年若ければ、旅をしたいものです。」

おじいさんはそういい、遠い目をした。

「まだまだ冒険できますよ。旅の終わりは歳じゃなくて自分が諦めたときですよ。」

おじいさんは目を見開く。

「そうですか。こんな老いばれでも夢を追いかけられるのでしょうか。」

「はい。もちろんですよ。」

話している内に、どんよりとした空は晴れ間を見せていた。

「メルダの町」

あのあと、おじいさんと話ながら馬車で進んでいたが、時々、モンスターにエンカウトして倒していたら、ガライアで買ったナマクラ刀がさっき折れてしまった。

そして今メルダの町に着いた。

ガライアは城に城下町、王都ということでもかかったが、このメルダの町もなかなかにかい。

町の周りは城壁に囲まれて、今俺は東門にいるが東西南北に門が設置されて各門に衛兵が警備に当たっているらしい、町ではなく城塞都市を呼ぶ方がしっくりくるだろう。
馬車が東門の前まで進み止まる。

「ありがとう。おじいさん、助かったよ。」

「なに、私の方こそ世話になったよ。希望を持たせてくれてありが

とう。」

「道中気をつけて帰ってくれ。」

と言つて、俺は衛兵が立っている門を抜ける。

「また武器を買わなくちゃな、まさか1日で折れるとは思わなかった。やれやれ。」

俺は先に装備を整えるために武器屋に向かった。

「いらつしゃい！お、若いひとか、珍しい。」

髭面大男——『ザツカラン』という表示名。

「なにを探してるんだい。値段なら、話になるよ。」

「いえ、俺の使っている武器が折れてしまったので買いに来たんです。」

「ほう。そりゃ災難だったな。どんな武器なんだ？」

俺は臍を抜き放つ。

「これを少し長くしたもののんですが……」

「ん？そりゃもしかしてカタナとか言うやつかい？」

「え？あ、これは脇差しというもののんですけど、もしかして刀があるんですか？」

「おう。あるぞ？この前ドワーフの商人から珍しいから買い取ったんだ。ちよつと待ってる、今持ってくる。」

「まさか刀があるなんてな。それにしてもここの店の店主は今まで店のなかで一番良い人だな、大抵の人は若造だと足下みてくるからな」

店主が一本の刀を持ってきた。

「あつたぞ、これだこれだ。」

刀を店主のザツカランさんが渡してくる。

「ちよつと抜いて、振ってみてもいいですか？」

「おう、かまわねえぞ。そのカタナってやつ細いくせに大剣並に硬くて、切れ味がすごいから家宝にしようと思ってたんだ。」

刀を抜いてみて、亜流剣術を試みる。

スラリ、シュツ　ババツ。キン。

「かなり良い刀ですね、業物なんじゃないですか？」

「……たまげたぜ、お前さん。相当強いじゃねえか。」

「ムサシでいいですよ。それに俺はもつと強くななくちゃならないんです。」

「そうか。買うんだろ？そいつもムサシに使われるほうがいいだろ

う。そういや商人はそのカタナのこと『マサムネ』って言ってたぜ。」

「え!？」

俺は刀をみると柄の部分に正宗と彫り込まれていた、本物かはわからないけど、相当な業物なのは確かだ。

「これを買います。いくらですか？」

「そうだな。四万五千Gつとこだな。」

……確か五万Gから六千六百Gを引いて………四万三千Gほどか
………足りない。

「……………」

「おい、ムサシ。なにをうちひしがれてるんだ？足りないのか？今いくら持つてるんだ？」

「……………四万三千G。」

「そうか、なら、四万Gで売ってやるよ。」

「ホントか!？ありがとう!ザッカランのおっちゃん!」

俺は四万Gを払う。

「いいってことよ。久々にいいもんみしてもらったしな。」

「ホント、ありがとう。ザッカラン!また来るわ!」

「おう。待ってるぜ。」

俺は両腰に朧と正宗を差して、やっとまともな二刀流に戻り、ザッ
カランの店をあとにした。

俺は赤蛙亭という赤い屋根の宿に決め、中に入った。

赤蛙亭は一階は宿の受付と酒場が一緒みたいで何人かがチラッと見
てきたが、すぐにまた会話に戻っていたが……

…一人……ずっと俺を見てるやつがいる。
気にしないことにして宿の受付をする。

「どれくらい宿泊いたしますか？」

「1日だ、夕食は頼む。」

「一泊、夕食付きは三百五十Gになります。」

俺は金を払う。

「二階のつきあたりのお部屋になります。夕食はこの一階で召し上
がってください。こちらが鍵です。」

「わかった。」

俺は鍵を受け取りさっさと部屋に行こうとするが……

「あんた、ちょっと待っとくれ。」

俺をずっと見てきてたやつが俺を引き止める。

声からして女だと思うが、誰だと思い振り返って俺は固まった。

「あたしはマリー。話があるからあたしの部屋に来ておくれ。」

歳は二十代前半、ウェーブした黒髪に切れ長の目、血のように赤い唇に左の目元には青い星形の刺青。

美人だが俺が固まったのはそこじゃない……俺は知っていたからだ……世界を破滅に導こうとし、大邪神の復活を企んでいる教団……その幹部だったから。

俺はすぐに我にかえり教団の情報を入手できるチャンスだと思いなおした。

だが俺のことはまだ一切悟られるわけにはいかない。
約半年後の原作開始までは。

「どうしたんだい？あたしに見惚れたのかい？」

確かに美人だが俺の狙いは違う。

「まあ。でも、たとえ美人でも俺のものになる訳じゃないしな。」

「あんた次第では好きにできるかもしれないよ？詳しいことはあたしの部屋に行ってからだよ。」

「マリーの部屋」

「さて、まずはあんたは日本人だね？」

なにも知らないふりしないな。

「そうだけど。ここはゲームの世界なのか！？」

「ちがうよ。ここはエターナルって世界だ、ゲームの世界じゃないさ。あとあんたのいた世界はあたしたちはガイアって呼んでる。」

「エターナル……ガイア……」

んなこと知ってるから！もっと機密情報がほしいんだよ！

俺は原作五巻までは知っているが教団の本当の真意がわからない。

「そうだ、あたしたち教団があんたたちをこのエターナルに連れてきたんだ。エターナルに来たからには、そこそのレベルなんだろう？」

「そうだけど、あんたも日本人？」

「そうさ。このエターナルではレベルが高ければ金を稼ぎまくって豪邸を建てたり、ム力つくやつがいるなら、暗殺者ギルドに入って殺しちまってもいい。あんたが良ければあたしたちの教団にはいないかい？」

「それは俺に教団に入って世界征服しろってことなのか？」

「その通りだよ、あんた頭がいいねえ。あんたなら入れば幹部になれるかもしれないよ？」

「その教団の幹部って奴は全員が日本人なのか？それとリーダーは

誰なんだ？」

「幹部はほとんど日本人だねえ、なんせレベルが高いからね。あのお方については教団に入ってもらわないとねえ。あと幹部とは別に四天王てのがあるよ。こいつらは別格さ。」

四天王だと？そんなのは俺は知らないぞ。くそ、不安分子が出てきたな。

「その四天王ってやつらも日本人なのか？それと世界征服ってのはこの世界と俺たちの世界なのか？」

「ッ、驚いた！あんた本当に頭が良いんだね、四天王は全員日本人さ。それより本当に教団にはいつて大邪神ギヤスパルクを復活させるために七柱の魔神を封印を解放しないかい？このマリさんに協力してくれないかい？坊や……いやムサシだね。どうだい？悪い話じゃないよ。」

「……………」

腰のミニスカートを若干持ち上げて誘ってくるが俺にも信念がある。それに最後に聞いていないことがある。

「最後に。ガイアとエターナルを世界征服してどうするんだ？」

「それこそ幹部にならないと、ねえ？」

胸の下に片手をやり、上げて強調している、さらにもう少しミニスカートを持ち上げてくる。

凄くセクシーだが残念だな。

敵じゃなければな。

「交渉決裂だな。俺は冒険をまだしたいし、英雄になって、ハーレムを築いて幸せに暮らすという大きな目的があるんだ、世界を滅ぼさせてはやれないな。マリー、あんたこそ俺のハーレム入りしないか？」

「プツ、アハハハハ！ムサシ、あんた頭が良くて面白いよ！今まで誘うことはあっても誘われたことはなかったよ！ホントに残念だね、ムサシが入ってくれないのは。でも、気が変わったらいつでも来なよ、ムサシなら歓迎するよ！」

「俺も気に入った！マリーみたいな良い女は諦めないからな、俺はしつこいぞ？」

「アハハ！期待しないで待ってるわ！」

「その言葉、忘れるなよ？」

俺はマリーの部屋を出て二階の自分の部屋に行く。

「原作よりいい女だったな、マリー。俺は欲張りで我が儘だからな、覚悟してろよ。絶対、俺の女にしてやる！」

教団の幹部、マリーとの邂逅で楽しみが1つ増えて、俺はワクワクしながら眠った。

メルダの町…（後書き）

小説の神様がいるなら俺に舞い降りてほしい…

美人姉妹“妹”（前書き）

これから学校などの諸事情により少し更新が遅れると思いますが、できるだけはやく更新します

美人姉妹“妹”

く朝く

朝になって俺は普通に起きた。

「原作まであと半年しかないのか。ハーレムのためにも悠長にしてられないな。」

俺は一階に下りてクエストを確認する。

全くといっていいほど金が無いんだ！おそらく千Gもない。

クエストボードを流し読みで見ていくと気になる単語があった。

「依頼人がアルダ村の村長？俺の目的地じゃないか。これにしよう。待ち合わせは、『憩』という宿か。よし、早速行こう！」

目的地に行けるし、報酬金も手に入るし、一石二鳥だ。これに乗らない手はない！

く宿『憩』く

俺は急いで宿に入った。「ここにアルダ村の村長が泊まってないか！？クエストを受けに来たんだ！」

「ア、アルダ村の村長ですか？オランドウ様でしたら一階の部屋、奥から二番目のお部屋です。」

女将が俺の剣幕に気圧されながら教えてくれる、女将の商売根性すごいな。

少し落ち着こう、焦っても仕方ない。こういう時は深呼吸だ。

スー、ハー。スー、ハー……

よし！俺は部屋に行き扉をノックする。

コンコン。

「クエストボードを見て依頼を受けに来ました！」

ノックして大きめの声で用件を言う。

ガチャッ。

扉が開いて、頭が少しさみしいことになっている背が低い丸まった男性が出てきた。キャラクター名は『オランダウ』。

うん、いかにもこの人だな。

「おお。やっと来てくれたか。待っておりましてぞ。」

「依頼を見てきた、ムサシです。」

「私はオランダウです。依頼を見たのならお分かりかと思いますが、今私の村は危機に陥っているのです！」

やべ。嘘ついちゃった。依頼なんて全然見てなかった。アルダ村しか見えてなかったからな。

「すみません。なんの依頼でしたっけ？ド忘れしてしまつて。」

「え、コヴォルト退治ですよ！村の近くの森にあらわれたんですよ。」

「その依頼俺達が受けるぜ。」

四人組の男が部屋にはいつてきた。

なんだこいつらノックもしないで勝手に入ってきて挙げ句には俺の受ける依頼を横から、かつさらおうとしている。ふざけんなよこいつら。

俺の嫌いな道德を守らない非常識なやつらだ。

「おい。待てよ、その臭そうなたった男。勝手に入ってきて人が受ける依頼を横からとってんじゃねえよ。」

「ああ？なんだあ？ガキがなめた口聞くなよ、俺はレベル20の魔法使いだぞ！」

「レベル20？たつた？俺の仲間にはレベル35がいるんだが？」

俺のステータスを出すわけにいかないから、根拠はないが、エルを話に出すが……

「ホラつくのも大概にしるガキ！」

ダメだ、このデブ。

話なんかで通じるほど利口じゃねえな。

自分の言うことやることを全く疑問に思わないし、省みることができないタイプだな。

メラゾーマで焼き付くしてやろうか？それとも臍と正宗の錆びにしておやろうか？

俺は、嫌いなタイプ、トップ3には口調が変わり態度も変わる。女の子を泣かす奴、理不尽な奴、非常識なバカ。この3つが俺の嫌いなタイプだ。

「ま、待つてください！争うのはやめてください！でしたら両方の方にお願ひします。」

俺が豚をなに殺しにするか考えていたらオランドウさんが妥協案を出してきた。

ちつ。殺りそびれたか。

こいつの連れの戦士3人は良識があるみたいだな。豚を鎮めているが、豚がパーティーのリーダーなのか、連れの戦士は強く言えてない。

「オランドウさん、俺はそれで構いません。」

「俺もそれで我慢してやるぜ。」

(((((我慢してるのはこっちだよ！))))))

今、豚以外が同じことを思った気がする。

「そ、それでは荷馬車があるのでそれに乗ってアルダ村に行きましよう。」

オランドウさんがこの場を締めくくり、出発を促す。

今、俺は荷馬車の前にオランドウさんと座っている。

どうやら豚野郎なバカ……家畜は檻の中のほうが落ち着くらしい。さすがは家畜だ。

「ムサシさんも荷台の方に乗ってください。」

オランドウさんが荷台をすすめてくるがあんな家畜といたら俺まで臭くなる。

「いえ、大丈夫ですよ。アレと一緒に居たくないんです。」

俺がそう切り返すとオランドウさんが苦笑いを浮かべる。

「ところでムサシさんは冒険者みたいですが、若いですね。」

「そうですね。俺は17歳ですから、でも実力がありますよ。この前にコヴォルトを数十匹ぐらい倒しましたから。」

俺はポケットからコヴォルトからドロップしたコヴォルトの牙を十個ほどオランドウさんにみせる。

過信するつもりはないけど、実力はあるはずだ。レベルは化物級だ

しな。

「本当ですか？これは心強い！一時は不安になりましたから。」

後ろの荷台のをチラッとみる。オランドウさんは不安だったみたいだ。

若造一人と食料がリーダーやってるパーティーだからな。なんか荷台の方でブヒブヒ聞こえるなあ、檻が臭いと家畜がわめいているようだ、お前の方が臭いだろうが。

「見えてきましたよ、アルダ村です。」

オランドウさんもブヒブヒ聞こえるのは気にしてないようで、俺に言ってくる。

気を取り直してまだ遠くだが、平凡だが平和そうに見える。

良い村だ。

オランドウさんの村長としての技量がうかがえるな。

村に馬車が入っていき美女が現れた。

「お父様、お帰りなさいませ。」

少し紺色な黒髪ロングなボンツ、キュツ、ボンツな女性が神官のよな服で迎えてくれた。

「今、帰った。レヴィア。冒険者の方を連れてきたぞ。イシユラはどこにいる？」

「それがまた友達を数人連れて森に探険に行ってしまったみたいで
す。」

レヴィアさんが心配しすぎて悲痛な声をだしている。

「なんだと！？いま森は危険だ！村の青年団を行かせよう！ジャッ
コー！エド！来てくれ！」

なにやら原作ヒロインが一人、イシユラは危険な森に行ってしまった
みたいだ。オランドウさんが村の青年団を救助に向かわせるみた
いだが、俺も行こう。

女の子が危険な目に合っていて、それを姉が心配しているのを見
て、行かないようじゃ、男が廃る！！

「オランドウさん！俺も行かせてください！」

「いや、ムサシさんは、ここにいてください。これはアルダ村の問
題です。」

「いや、子供たちが危険目にあっているのに村も町もない！俺は行
きます！」

「ムサシさん………わかりました。では、青年団隊長のジャッコー
が率いる第一パーティーに入ってください。」

「わかった。ジャッコーさんだな、よろしく頼む。」

「ジャッコーでいい。俺もムサシと呼ぶ。こっちこそ頼む。みんな
！準備はできたか！？これから第一PTと第二PTで別れて子供た

ちを搜索する！行くぞ！」

『オオオオオオ！！』

ジャッコーの号令で、

二十人ほどしかないが皆が空気を震わすほどの雄叫びを上げ、俺たちは村を出た。

side ムサシ end

side イシュラ

あたしはアルダ村の代々続く神官の家の次女に生まれた。

あたしは冒険に憧れている。自分の力で道を切り開いて進む。そんな冒険がしたい。

けどあたしは神官を継がなくて済んだけれど、それでも村から出たことなんか両手で数えるぐらいしかなかった。

そんなあたしは村の友達たちを誘い、錆びた剣を手に、度々、村をこっそりで、弱いキャタピラーなんかのモンスターを倒していたけど……

最近村が慌ただしいから村の大人に聞いてみたら、コヴォルトの群れが村の近くの森に現れたんだって！

あたしは少しでも皆の役に立ちたくて友達を強引に誘ってコヴォルトの群れを倒せなくても、偵察に森に入っていたけど、それはあとで間違いだったと気付いた。

コヴォルトが一匹だけで森の少し開けた場所をうろうろしていたのを見つけた。

「コヴォルト！でも一匹しかない！倒そう！」

「無理だよ。キャタピラーより絶対強いよ。」

「そうだよ。もう戻ろうよ、イシユラちゃん。」

あたしはみんなにそう言うけど、みんな乗り気じゃないみたい、けど、あたしは強く押す。

「一匹だけだから！倒したらすぐ帰るから！行くわよ！」

あたしはコヴォルトに向かって錆びた剣をふりかぶりながら駆け出しました！

振るった剣は弾かれたけど、コヴォルトがよろめいた。

いける！と思い、あたしはまた剣をふりかぶった、みんなもそう思ったみたいで手に持つてる木や畑で使う鍬をもって、こっちにきた。

けど、あたしのまた降り下ろした剣は空をきって、地面に激突した。

「いたあーい……コヴォルトは？」

剣が地面にぶつかって、手がしびれた。

コヴォルトを見るとあたしの降り下ろした剣をかわしていて、空を見上げていると思ったら……

グアアアアア！！！！

鈍く低いけど響き渡る声を挙げた。

そうしたらあつという間に5体ぐらいコヴォルトが出てきて囲まれてしまった！！

みんなの顔は青ざめていた、あたしも青ざめていたにちがいない。

コヴォルトはあたしたちにどんどん近づいてきた。

あたしたちのなかで一番歳が低い女の子が悲鳴をあげた。

「キャアアアア！！」

女の子のあげた声に反応して、あたしの前にいたコヴォルトが鋭い牙をみせて、あたしに噛みつくこうとしてた、あたしは剣なんか下げて怖くて震えていた。

「うつ、ひつく、うえ（あたしここで死んじゃうのかな、そんなのいやだよ！怖いよ！姉様！お父さん助けて！）。」

あたしはほとんど泣きながら、心のなかで助けを姉様たちに叫んだ！

もう噛みつかれると思ったそのとき……

「あぶない！

二天亜流、三の奥義。四葉！」

ザザンッ！

男の人が森の中からきてあぶないと叫びなにかを言った。

一瞬顔が見えた、姉様と同じ歳くらいの男の人があたしとコヴォルトの間に割り込んで二つの剣を左右に振るっていた。

その男の人は姉様と同じ髪の色で、身長は180cmは越えていて、男の人の着てる黒いコートがひらひらしていた。

「かつこいいい…」

純粹にそう思った。

コヴォルトをみれば×印に斬られて、崩れ落ちて、G「ゴールド」に変わった。

そのまま男の人はあたしたちの周りにいるコヴォルトをあっという間に三体を一撃で倒していた。ときには突いて、ときにはソニックブームを使って倒していた。

「すごい……。」

男の人はすごく強くて、戦う様がまるで蝶が舞うように軟らかく動き、蜂のように鋭く攻撃する。

「イシユラ！子供たち！大丈夫か！？」

青年団のジャツコーさんが来た。

あたしは男の人の戦いに見惚れていたのと、助けが来た安堵であたしは油断していた…

いつの間にか最後のコヴォルトがあたしに鋭い爪をふっていた。

「くそっ、あぶない！」

男の人が急にすごいスピードできて、あたしを抱き締めるように抱き寄せたけど…

ズバッ！ブシュッ。

三本の鋭い爪はあたしを守ってくれている男の人の背中を容赦なく切り裂いた。

黒いコートが裂けその下の赤いシャツも裂き、男の人の背中を抉り鮮血が散った。

「ぐっ！っ、ううう。くっ、……………二の奥義。斬空閃…」

男の人が痛みで顔をしかめて鈍いうごきで、コヴォルトに振り返り、ソニックブームを放ちコヴォルトを両断する。

男の人の背中がどんどん真っ赤に染まっていき裂けた背中が痛々しい。

「うっつ、あたしのせいだ！あたしが森に入っただから！ごめんなさい！ごめんなさい！」

あたしはひたすら男の人に謝る。

男の人がコヴォルトを倒して、あたしの方にゆっくり歩いてきて、あたしの前まで来た。

男の人が手を出してくる。

あたしはぶたれると思い、肩を震わせてビクツとした。

けどあたしに訪れた感触は違った。

ワシャワシャ。

「けがはないか？大丈夫か？」

男の人が痛みのせいで玉のような脂汗をかきながらも、柔らかない笑顔で、暖かい手であたしの頭を撫でる。

「ツツ！、なんで怒らないの？」

あたしのせいで大怪我したのになんで怒らないの？

あたしは困惑していたら……

「痛いからとかじゃなくて、ただ助けたいと思ったから助けたんだよ。それに人を助けるのに理由なんか要らないよ。」

男の人はキョトンとしていたがそう言って、あたしの頭をまだ撫でながら優しく微笑む。

あたしはドキンとした、顔が熱くなってくる。

「え、えっと。あたしはイシユラです。助けてくれてありがとうございます。／＼／＼／＼」

「そうか、君がオランドウさんの娘か。俺はムサシだ。」

「よし、子供たちは保護した、しかし、ムサシの傷の止血をしないと。」

「あ、俺は大丈夫だ。…………ケアルア。」

ムサシさんが呪文を呟くと出ていた血が止まり、傷が塞がれる。

「ムサシ、回復魔法使えたのか、けど、この傷はあとになるな。」

「仕方ないさ、可愛い女の子を守った勲章だと思うさ。さあ、はやくアルダ村に帰ろう。」

ムサシさんがそう言い、モンスターに警戒しながらアルダ村に向かって歩いていく。

ムサシさん…… かつこよかった。

ヒーローみたいに駆けつけてくれて、コヴォルトを一撃で倒すほど強くて、自分が大怪我をしたのに優しくて…… アルダ村に歩く、ムサシさんは英雄みたいだった。

side イシユラ end

side ムサシ

森に入って搜索していたとき、聞いたことのある叫び声が聞こえた。どうやらジャックや他の人は聴こえてないみたいだ。

「（今の叫びは獲物を見つけ仲間を呼ぶコヴォルトのものだ！急がないと！）こつちだ！」

「お、おい！？どこに行くんだ！？」

一刻を争うから俺はかなりのスピードで駆け出す！

しばらくして女の子の悲鳴が聴こえてきた。

「くそつ、間に合え！」

俺はさらにスピードをあげ悲鳴が聴こえた場所に駆ける。

駆けつけたときに子供たちがコヴォルトに囲まれていて女の子が嘔みつかれそうになっていた。

「あぶない！」

二天亜流、三の奥義。四葉！」

俺は女の子とコヴォルトの間に割り込み、臍と正宗を抜きクロスに振り切る。

目の前のコヴォルトを倒して周りにいるコヴォルトを倒しにかかった。突きで倒し、遠い奴には二の奥義。斬空閃をかました。

あと一体というところでさきほどの女の子が油断していて、コヴォルトの爪が降り下ろされそうになっていた。

「（斬空閃、はダメか。女の子にあたる。俺が庇うしかないな。魔力。気。合成、咸卦法！）くそつ、間に合え！」

俺は女の子を抱き締めるようにコヴォルトの爪から庇う。

ズバッ！ブシュッ。

直後、俺の背中を三本の爪が切り裂いていった。激痛が走り、血が溢れ出る。

「ぐっ！、っ、ううう、くっ！……………二の奥義…斬空閃。」

コヴォルトを倒す。

女の子が自分のせいだと言ってひたすら謝っている。背中がとてつもなく痛い！どうなっているんだ？ま、それより。

けがはないのか？

俺は女の子に寄っていく、ここで気づいたが、この女の子、キャラクター名が『イシュラ』だ。

朱色に薄茶色を混ぜたような髪に、ワインカラーの瞳、155cm前後の身長でかなり可愛い。

「けがはないか？大丈夫か？」

俺は女の子の頭をワシャワシャと撫でながら言う。

驚いているみたいだ。

「ツツ！、なんで怒らないの？」

怒る？なんで？あ、もしかして自分のせいで俺が怪我したと思っているのか。

「痛いとかじゃなくて、助けたいと思ったから助けたんだよ。それに助けるのに理由なんか要らないよ。」

できるだけ柔らかく言う、それにしてもイシュラの髪の毛やわらかいな。気持ちいい。

「え、えっと。あたしはイシュラっていいいます！助けてくれてありがとうございます。／／／／」

「そうか、君がオランドウさんの娘か。俺はムサシだ。」

知ってるけど一応言う。

「よし、子供たちは保護した、しかし、ムサシの傷の止血をしないと。」

「あ、俺は大丈夫だ。…………ケアルア。」

血が止まる。

「ムサシ、回復魔法使えたのか、けどこの傷はあとになるな。」

「仕方ないさ、可愛い女の子を守った勲章だと思うさ。さあ、はやくアルダ村に帰ろう。」

回復魔法を使ったけど、本当はキツイからはやく休みたいんだ。

アルダ村に帰る最中にイシユラが砕けた口調になり、なんで村にいるのだとかステータスを見せてくれたの、しまいには師匠と呼ばせてくれたの。

正直疲れていてなに言ったか覚えてない、ステータスは見せてないはずだ。

こうしてイシユラ救出戦を終えアルダ村に戻っていった。

美人姉妹 “妹”（後書き）

感想待ってますよ！

けど中傷誹謗はやです

感想などは作者のやる気になっています。

美人姉妹“姉”（前書き）

最近、学校が始まってものすごい疲れてます。

学校にも飽きてしまった……あと半年で終わるから我慢するか

美人姉妹“姉”

くアルダ村く

さつき怪我した痛みが引いてないからもう一度回復魔法を使う。

「ケアルラ」ボソツ

ふう、やっと痛みが引いた。

余裕が出てきた。

「……ムサシさん！もったいぶらないでステータス見せてください
！」

さつきからイシュラが話しかけてたみたいだ。

正直いままで痛みでボーっとしてたからな。

「ああ、ゴメンゴメン。痛みで朦朧としてたんだ。」

「あ……ムサシさん、ごめんなさい。」

イシュラがまた顔を沈める。

「俺が實力不足だったんだよ、それに傷じゃなくて可愛い女の子を
守った勲章だからな。」

これはホントだ。

俺が雑魚モンスターから攻撃をもらうとは思わなかったから。

イシュラがハッ！として顔をあげる。

「ムサシさん！やっぱり師匠と呼んでいいですか！？あたし、もっと強くなりたいんです！」

うーん、気持ちは分かるだけに断りづらい。
でもイシュラのためだ。

「俺は師匠と呼ばれるほど強くない、さっきも大怪我したしな。それとイシュラ、強さは目的にしたらいけない、強さはあくまでも手段だからな。もっとよく考えて、自分の目的を見つけるんだ。」

このエターナルに来るまでは俺もただ力を求めればいいと思ってた。

でもアスロンやオランドウさん、エルに会って守りたいと思った。

俺の目的は楽しい冒険をして、この世界を守りハーレムを作って幸せになる……！
だからな。

「ムサシさん……わかりました。あたしの目的を見つけます！」

どうやらわかってくれたみたいだ。

「そうか。良かった。」ニコッ

笑みを浮かべてイシユラの頭を撫でる。

うん、やっぱり気持ちいい。羽毛みたいな柔らかさだ。

「ツツ!?……………それは反則です／＼／／」

「（なにが反則なんだ？）アルダ村に着いたぞ……………なんか騒がしいな。」

反則の意味を考えてたけど、アルダ村の奥で人が集まりざわざわとしている。

「や、離してください!」

「おい!俺の誘いを断るのか!?超高レベルの俺様がコヴォルトを倒してやんねえぞ!」

「ですがムサシさんも居りますし。」

「ああ!?あんな小僧になにが出来んだよ!今頃コヴォルトの餌になつてんじゃないか!」

人だかりに近づいていくと話が聞こえてきた。
まだオランドウさんたちは帰ってきた俺たちには気づいてない。

それにしても家畜を放し飼いにしたのはまずかったな、レヴィアは美人だから家畜が発情してレヴィアの白い綺麗な手を無理矢理掴んでる。

嫌がつてんのがわかんないのか？

いや、ブヒ語を喋る家畜にはわからないか。

「姉様！なにしてんのよ！姉様から離れろ！」

イシユラが我慢できなくなり家畜に文句をつける。

同感だ。イシユラ。

この家畜には一度現実を見せた方がいいな。

「おい、その家畜。油ぎった汚い手をレヴィアさんの手から離せ。」

「

「イシユラ！無事だったか！？」

オランドウさんがイシユラを見て安堵している。

俺は目の前の盛ってる家畜をなんとかしないとな。

「なんだあ？てめえ生きてたのか。どうせ逃げてきたんだろあ？」

「ムサシは子供たちを囲んでいたコヴォルトを一瞬で倒したんだ、逃げてなどいない。それに俺たちはなにもしていない。」

ジャッコーが俺を持ち上げてくれる。他の青年団もそうだと言ってる。

まあ、事実だけだな。

「コヴォルトぐらいなんとかできないわけないだろ。それより、きたねえ手を、さっさとどける!」

ビシッ!

「いつてえ!」

いつまでも離さねえから手刀を家畜の手に落として強引に離させる。

「お前のあいては向こうの家畜小屋にいくらでもいるだろうが。」

「てめえ!なめた真似しやがって!」

「くらえ!ファイアークラッカー!」

家畜が俺に手を向けて火魔法中級呪文を使う、直径2mほどの炎の玉を作り出すが……

「その程度の実力か?メラミ!」

ゴオオオオオ!!

俺の手から燃え盛る焰の玉が出る。

俺のは直径5mほどだ。違う中級魔法とはいえ実力の差がしれる。

「どつした?このままぶつけ合うか?」

俺は家畜を挑発するが、いくら能なしな豚野郎でも自分の魔法の方が弱いと思っただけだ、魔法を治めてくる。

「ちっ、おい！行くぞ！」

豚野郎がこの場から去っていく。

ふん、やっと自分の実力のほどが知れたか？

「ありがとうございますムサシさん！イシユラだけでなくレヴィアまでも助けていただいて、どうぞ家に寄ってください。お礼をしたいで…」

「いや、レヴィアさんが嫌がっていたから当然ですよ。それに個人的にあいつは嫌いですから。

だからお礼なんていいですよ、そんな下心はないですから。」

別の下心はあるけど。

俺はちらっとレヴィアとイシユラを見る、二人とも可愛いし美人だ。

本当に不思議に思うんだが、どうしてこのオランドウさんの遺伝子からこんな美人姉妹が生まれるんだ？

俺が変なのか！？

いや、きつと突然変異が起こったに違いない！

うん、きつとそうだ。それしかない！

「そんなこと言わずにどうか寄ってってください。」

「わかりました。お言葉に甘えます。」

オランドウさんの押しの強さに負けた。

俺には男色の気はないので寄ってこないでください！

「それではこちらです、ついてきてください。」

俺はついていこうとしたら後ろから声がかかった。

「あの、先程はありがとうございました。私はレヴィア・アローネです、レヴィアでいいです。」

「いや、俺が勝手にやっただけだよ。」

でもレヴィアは可愛いから気をつけないとな。それと俺はムサシでいいよ。」

「え！？／＼／＼」

レヴィアが頬を赤くして照れている、綺麗だけど可愛いなあ。

俺が眺めているとオランドウさんがはやく来いと催促するから眺めるのをやめる。

「でかい神殿だな。ここはなにを奉っているんだ？」

「ここは風の神、ファドラを奉る神殿です。」

オランドウさんではなくレヴィアが答える。

「レヴィアはこの神殿の神官なのか？」

「……はい。そうです……」

レヴィアの顔が暗くなる……。

「……そうか。……レヴィアは他にしたいことがあるのか？」

「ッ！！？」

「もし、あるならちゃんとオランドウさんに言わないと。俺も出来る限りのことはするよ？」

「……………」

あれ？もしかして地雷踏んだ？

長女だから好きなこともできずに否応なしに神官になったのかな。

若いんだから好きなこととしていいのに我が儘言っているのに。

あとで俺が背中を押してみるか。

オランドウさんもきつと分かってくれるはずだ、あんなに娘を心配してたんだからな。

「着きました。ここが我が家です。」

「大きいですね。まるで館じゃないですか。」

西洋の館そのものじゃないか。

「わんっ！」

「おわつと、この犬は？」

犬が小屋からでてきて俺に飛び付いてじゃれてきた。

「うちの番犬のシルバーですよ、師匠。でもシルバーはあたしたち以外はなつかないのに、さすがです！師匠！」

「そうなのかよろしくなシルバー。
それとイシュラ、俺は師匠じゃない。」

「イシュラ、師匠って？」

レヴィアが気になったのか聞いてくる。

「勝手に呼んでるだけです。でもイシュラ、今度師匠って言ったら、目的を見つけても鍛えないからな。」

「ええっ、そんな！」

「あの、目的とは？」

「ああ、イシュラが強くなりたいたって言うから、本当に自分のしたいことをよく考えろって言ったんだ。」

「そう、ですか……」

「こんなところに突っ立ってないで早く家にはいりましょう！姉様

！ムサシさん！」

「そうだな。」

俺たちは家と呼ぶ館に入って行つた。

side ムサシ end

side レヴィア

私はレヴィア・アローネ、今年で16歳になりました。

私は風神ファドラに代々仕える伝統ある家に長女として生まれま
した。

幼い頃から風神ファドラに仕える神官の後継者になるため……
……いえ、ならされるために日々、礼儀作法や神官としての在り
方、ファドラへのお祈りをしてきました。

二つ下の妹のイシュラは次女なので神官にならないで毎日、村の
他の子供たちをつれ回して楽しそうに遊んでいました。

私には窓の外から景色を眺めるぐらいしかできませんでした。

やがて今から一年半ほど前にお母様が出掛けていた先でモンスター
に襲われて亡くなってしまいました。

私は神官のための修行で悲しんばかりいられませんでした。

その頃から今までストッパーでもあったお母様がいなくなってしまう

つて時々、イシユラが村の外に友達を連れてモンスターを倒しに行くようになったのです。

それをイシユラから聞いたときはとても羨ましくてイシユラを憎んだこともあります。

けれど血の繋がった姉妹なので同じくらい心配していました。

私が16歳になり神官の修行を終えたある日、村の近くの森にコヴオルトの群れが現れました。

お父様はコヴオルト退治の依頼を出すためにメルダの町にいつている最中にイシユラが友達を連れて森に行ってしまったと子供たちから聞き、私は青年団の隊長、ジャツコーさんに言いました。

ジャツコーさんはすぐにPTを編成してくれイシユラたちの保護に向かうという時にお父様が冒険者の方と帰ってきました。

私は余所の人が苦手でした、なにかあれば私の胸をいやらしく見てくるのですが、お父様が雇った冒険者の方は私の胸でなく、私自身を見てくれていました。

冒険者の方はムサシさんと言うらしくお父様たちとの会話を聞いてイシユラたちを助けに行ってくれました。

お父様の依頼を受けてくれたのは二組いるらしく一組は先ほどイシユラを助けに行ってくれた男性、もう一組は戦士三人に魔法使いのパーティーでした。

魔法使いの太った男の人が私の身体をいやらしく見てくるのです、
あろうことかその人は少ない報酬でコヴォルトを退治してやるのだ
から私に伽をしると言ってきました。

私はもちろん断りましたが、男の人が伽をしないとコヴォルト退治
はしないと言い、強引に私の腕を掴んできました。

そこへ森に行ったはずのイシユラが帰ってきて私の腕を掴んでい
る男の人に離せと言いました、イシユラの傍にいた一人の冒険者の
方が男の人を挑発して私の腕を掴んでる手を力づくで離してくれま
した。

けれど男の人が怒り中級魔法を使い、ムサシと呼ばれた人に大きな
炎の玉を向けました。

しかしムサシさんはさらに大きなゴウゴウと唸る焰の玉を作り男
の人をさらに挑発しましたが、男の人が仕方なさそうに去っていき
ました。

お父様が私も助けてくれたことも含めてお礼がしたいとムサシさん
を家に招きました。

「わかりました。お言葉に甘えます。」

ムサシさんは家に来るらしい。

あ！まだお礼を言っていない！

「あの、先ほどはありがとうございます。私はレヴィア・アローネ
といいます。レヴィアでいいです。」

「いや、俺が勝手にやったことだよ。」

「レヴィアは可愛いから気をつけないとな。それと俺はムサシでいい。」

「え！？／＼／＼」

「いつも男の人は胸を見ているから可愛いなんて言われたことはない。」

「可愛いって言われて照れてしまう／＼」

「お父様が早く来なさいと言っている。」

「行かないと。」

「ここは風の神、ファドラを奉つてゐる神殿です。」

「神殿についてムサシさんに説明します。」

「レヴィアはこの神殿の神官なのか。」

「神官ということには誇りをもっています」

「けれど私だってイシユラみたいに年相応に遊びたいのです。」

「…はい。そうです……」

「…そうか。レヴィアは他にしたいことはないのか？」

「ッ！？」

「ムサシさんは私が本当はワクワクした冒険や不思議なことを見たい」

という想いに気が付いている!?

「……………」

「もし、あるならちゃんとオラندوقさんに言わないと。
俺も出来る限りのことはするよ?。」

「着きました。ここが我が家です。」

私たちの家に着いた。

番犬のシルバーが私たち以外にはなつかないのにムサシさんに楽しそうにじゃれている。

ムサシさんがイシュラに師匠って言われていた。

なんで?

「イシュラ、師匠って?。」

「勝手に呼んでるだけです。でもイシュラ、今度師匠って言ったら目的を見つけても鍛えないからな。」

「ええっ、そんな!!。」

「あの目的とは?。」

「ああ、イシュラが強くなりたいうて言うから、本当にしたいことをよく考えろって言ったんだ。」

「そう、ですか……」

私の本当にしたいことは決まっている、未知や不思議なことに溢れている世界を旅したい！

でも神官をやめるわけにはいけないから、旅をするなら家出するしかない。

どうしたらいいの？

家に入って台所に近い部屋で私とイシユラとお父様、そして冒険者のムサシさんがテーブルを囲んで椅子に座っている、

私はみんなにお茶を出すために少し離れた台所にいる。

「改めて、イシユラとレヴィアを助けていただきありがとうございます。だが、イシユラ！森は危険だからあれほど入るなと言っただろう！」

「でも、あたしも村の役に立ちたかったんだもん！」

お父様とイシユラの口論が始まったけどムサシさんはじっと見てると思ったら、お父様に口を挟んだ。

「ですがオランドウさん、イシユラはもう子供ではありませんよ、自分で考えて村の役に立つことを行動にしてくださいです。

それにたとえ森に行きたいと言っても、村の人は相手にしなかったんではないですか？だから自分で行動した……でもイシユラも誰にも言わず危険な森に入ったのは良くないぞ？」

「た、確かにそうですが……」

お父様がムサシさんの論弁にたじろいでいる、それをイシユラはふん、そうでしょ。みたいな顔をしてたけどムサシさんの最後の言葉ではつが悪そうになる………けど……ムサシさん、イシユラに甘いですよ。

「わかりました。わたしにも非がありました。イシユラとはあとで話します。」

それとは別に依頼の事なんですがムサシさんに頼もうと思い、青年団の若い連中に経験を積ませたいので明日のコヴォルト退治に同行させたいのですが、どうですか？」

話は明日のコヴォルト退治の話に変わって、私はお茶を淹れてお父様とムサシさんの前に置いて、椅子に座る。

「いいですけど、さすがに全員を守るとかはできないのでそういうことになっても自己責任ですよ？」

「もちろんです。じぶんの身は自分で守らせます。」

「それとあの魔法使いのパーティーはどうしますか？おそらく恥を掻かされたから着いてきますよ？」

「あの方たちにも報酬を払います。」

あの魔法使いが村に残ったらどうしようと思ったけど、明日の討伐に着いていくみたいですな。

できれば私も着いていきたいです。

「あたしも行く！いいでしょ？お父さん！」
イシュラと一緒にいくと言い出した。

「ダメだ！話をジャッコーから聞いたぞ！ムサシさんがいたからな
んとかんったものの、ヘタをしたら死んでいたんだぞ！」

「オランドウさんさきほども言いましたが、イシュラはもう子供で
はないですよ、考えて行動できます。大丈夫ですよ。
それなら明日の討伐は俺が常にイシュラに気を配ってますよ。」

本当にムサシさんはイシュラに対して甘いです。

それは姉の目から見てもイシュラは可愛いですからね、もしかして
私も行くと言ったら守ってくれるんでしょうか？

「あの……お父様。私も着いていつてはダメですか？」

私もワクワクする冒険がしたい！と思ったら口から言葉が出ていま
した。

「な、レヴィアまで何を言うんだ！？」

「まあまあオランドウさん、落ち着いてください。大方、小さい頃
からイシュラとレヴィアは村から出させなかったんでしょ。」

それは体が熱くなるような冒険がしたくなりますよ。

イシュラとレヴィアは俺が命に代えても守りますから許してやって
ください。」

ムサシさんは私のこともかばってくれた。

それにしてもどうしてムサシさんは的確に私の心を当てられるのでしょうか？

「ううむ、そうですね。わかりました。二人をお任せします。ところでムサシさんのステータスを見せていただけませんか？疑っているわけではありませんが二人の娘を預けるに信頼する強さなのか。」

「それはあたしも知りたい！」

イシュラもずっとムサシさんにくつついていたのに知らないみたいだ。

私も気になる。

コヴォルトをもっともしないというムサシさんの強さが。

「……………わかりました。バリア結界。」

ブウン

部屋に透明な壁ができた。壁魔法なのかしら。でもなぜ？

「外から聞こえない見えないように結界魔法を張りました。」

ブンッ

ムサシさんのステータスウィンドウが現れる。

「ッ！！！؟؟？」

「な！？なんですか！？このステータスは！？」

「え！！！？？」

LV121のドラゴンスレイヤーですって！？
ありえない！！

「こ、これは。ムサシさんこのステータスはなんですか？レベル100越えなどありません！！説明してください！」

お父様がいままで見たことがない慌て方でムサシさんに説明を求めます。

ムサシさんに私たち三つの視線が集まります。

「クラスがドラゴンスレイヤーなのは高位のドラゴンを100体倒したらになりました。レベルが100オーバーなのは俺の体質です。」

「ド、ドラゴンを100体！？それに体質とは！？」

「俺の体質とは限界突破です。鍛えたら鍛えた分強くなり、強くなる上限が無いんです。」

強さに際限が無いなんてムサシさんは世界で一番強いんじゃないかしら。

「なるほど。それでそのステータスなんですな。レベル100なんていけませんから、間違いなくムサシさんは世界で一番強いですな。安心してイシュラとレヴィアを任せられます。」

ムサシさんがこんなに強いなんて。

「さすがです！やっぱり師匠と呼ばせてください！もう決めました！」

イシユラがすごい興奮している。

「今日のところは家に泊まっていてください。」

「ありがとうございます。危うく野宿になるところです。」

「お父様、そろそろお夕飯にしますね。」

「わかった。レヴィア！ムサシさんに最高の料理をもてなしてくれ。」

「それは嬉しいですね。レヴィアみたいな美人の手料理が食べれるなんて幸せです。」

／／／／そんな、美人だなんて／／
私は張り切って台所に向かいます。

「レヴィアも満更ではないようですし、嫁にどうですか？」

「え。いや、それは嬉しいけど。レヴィアの意思を尊重しますよ。
アハハ／／」

お父様の言葉でムサシさんの頬が赤くなります、可愛い、と思ってしまったのは私だけではないようでイシユラも可愛いと思ってるみたいだ。

「むむっ、あたしも手伝う！」

イシュラがお父様の言葉で躍起になってお夕飯をイシュラと作りま
す。

「美味い!!」

ムサシさんが私の作った料理を美味しそうに食べてくれます
頑張ったかいがありました。

「師匠！このオムレツも食べてください！あたしが作ったんです！」

「美味いよ、イシュラ。イシュラも料理が得意なんだな。」

「えへへ、師匠のためならこれからも毎日作りますよ！」

「いや、別に俺のためじゃなくてだな。
嬉しいけどさ。」

イシュラってばムサシさんのことが好きなのかしら？

ムサシさんも満更ではなさそうだし。

……なんかいい気分ではないわ。

私はイシュラみたいにはなれない。

男の人とベタベタするなんて。

そうして男の人との初めての食事は、ムサシさんが嫌ということではないけれど、良く分からない胸に渦を巻く暗雲のような気持ちで過ぎた。

く早朝く

部屋で私はコヴォルトを退治するために準備していた。

準備といっても私には戦う力はない、けど、念のためなんの魔法付与もされてないワンドと動き安い服装にするだけ。

私にはせいぜい皆が倒したコヴォルトのアイテムやG「ゴールド」を拾うくらいしかできないけど。

コンコン

「レヴィア、準備は出来たか？ムサシさんたちが待っているぞ。」

お父様が私を呼びに来た。皆さんは準備が出来たみたい。

「いま行きます。」

私が村の入り口まで来ると、今日コヴォルト討伐に参加するメンバーがもう来てて私を待っていたらしい。

早速迷惑を掛けてしまい申し訳ない気持ちになる。

「すみません、遅れてしまつてごめんなさい。」

「いやいやレヴィアちゃんは初めてなんだから仕方ないよ。」

青年団の若い人たちが5人くらい着いてくるらしい、ジャックコーさんも隊長としてパーティーに入つてゐる。

「姉様！遅いですよ！師匠のすごさを見せるのが遅くなつちやいます！」

「までイシュラ。俺はいつからお前の物になつたんだ？」

「え、あたし、そんなこと言いましたか？師匠は師匠ですよ！」

「イシュラ、お前は……いや、もういい。」

レヴィア遅かつたな、何かあつたのか？」

イシュラがムサシさんに軽口を言っている、会つてまだ1日なのにどうして二人はあんなに仲がいいのでしょうか。

イシュラが少しうらやましいです。

優しくて強いし格好いい……この村の人しか知りませんが、ムサシさんのような人はそうはいないと思います。

そう思つてイシュラがうらやましい。

「いえ、初めてだったので少し浮き足立ってたんです。すみません、遅れてしまつて。」

「ギャハハ！この俺が守つてやるよ！」

「やめろ、くさ男。レヴィアに触れるなど言つただらう。」

昨日の臭い人が私に近寄ってきましたが、ムサシさんが壁になってくれます。

「聞いたぜえ、お前こんな子供なんか守って大怪我したんだってな。今日は後ろで俺様の活躍を見てていいんだぜ？」

ムサシさんがイシユラを守って背中を大怪我したのは聞きました…

「でも！危機に駆けつけて知らない子供たちのために体を張れるなんて私は格好いいと思います！」

私はムサシさんがバカにされてムツとして、気がついたら口が開いてました。

「確かに俺はまだ弱い、油断してたと言えばそれまでだ…」

「なんだあ？その女。こいつに惚れてんのか？こんなやつより俺が守ってやるよ！ギャハハハ！」

「…だが、俺はレヴィアやイシユラを命に代えても守る！もう慢心なんかしない！」

二人は俺に守られるのは嫌か？」

ムサシさんの言葉で顔が赤くなってしまった。

どうしてそんな恥ずかしいことを真顔で言えるんでしょう？

「嫌なんかありえません！あたしは師匠に守ってもらいます！」

「私も……私のことも守ってください／＼」

「ちっ！てめえなんかコヴォルトの餌になっちまえ！」

「わかった。二人は俺が全力で守るよ。」ニコッ

「ッ！？／／／」

「し、師匠／／／」

ムサシさんのあの笑顔は反則です。

胸が苦しくなって、もつと笑顔が見たくなってしまう。

「じゃあ、そろそろ行くか。部外者だけどこの討伐は俺が指揮することになった。

どうやら相当な数のコヴォルトがいるらしい。

最悪のことも覚悟しておけ！では行くぞ！」

ムサシさんの叱咤するような号令でコヴォルト退治に向かいます。

「すごい……………」

私たちが森に入ってムサシさんと青年団の皆さんがコヴォルトと戦い始めているけど

数十体いるうちのほとんどをムサシさんは相手にしている。

本当にすごい！こんなに強いムサシさんはなんで旅をしているのでしょうか？

王様とかの直属の護衛とかになれると思うんですけど…

「二天亜流！特殊奥義！百花繚乱・焰雷！」

ムサシさんが二振りの剣に炎と雷を帯びさせて剣を縦横無尽に振っている、今のでほとんどのコヴォルトを倒してしまっています、すごいです！

「くそっ、おい！女！こっちに来い！」

「な、なにをするんですか！？離してください！！」

ムサシさんの活躍で魔法使いの人は出番がなくなってしまい、激昂して私の腕を掴んできました！気持ち悪いです！

「やめてください！だれか！たすけ……」

「静かにしろ！黙って来い！」

太った男の人が手で私の口を塞いできて、森の奥に連れていかれてしまいます！

私はみんなが遠ざかるのを見て涙を溢します。

「（だれか！助けて！だれか！）」

森の奥深くまで連れられてやっと男の人は止まってくれます。

「はあはあ、ここまでくりや追って来れねえだろ。ん？なに泣いてんだ女！ギャハハ！安心しろ、お前は俺の女になるんだ！可愛がつてやるよ！」

この男の気持ち悪さと、不安で涙がポロポロと溢れて止まりません！
私はどうなってしまっうでしょう……頭に浮かぶのはムサシさんの
柔らかな笑顔です……

（ムサシさん助けてください）

s i d e レヴィア e n d

s i d e ムサシ

ふう、あらかたコヴォルトを倒したな、まだ少し残ってるけどこれ
なら若い青年団でも大丈夫だな。

イシユラは疲れたのか肩で息をしている。

青年団はまだ残りのコヴォルトと戦っている。

レヴィアは確かG「ゴールド」を拾って……いない！？
どこにいった！？

辺りを見回すと豚のパーティーの戦士三人が戦っている……豚野
郎がいない！！

「おい！そこのお前！豚はどうした！？」

「え！？あ、そういえばいないですね。」

「俺は知ってますよ。あつちにレヴィアさんって人を連れていきましたよ。」

豚の仲間が知つてると答えてレヴィアが連れられた方向を指差す。

くそ！あの豚はまだ懲りてなかったか！
今すぐレヴィアを探しに行かないと！

「みんな！レヴィアが豚にさらわれた！いまから俺が探しに行く！みんなはコヴォルトを倒しきったら警戒しつつこの場で待機！すぐ戻る！」

俺は気を使って探知する。

……見つけた！
レヴィアの近くにいるのは気持ち悪い気がひとつあるがこれは豚の
だろう……

……レヴィアに近づいてる気がある……これはモンスターのものだ
！しかも大物だ！急がないとレヴィアが危ない！

いた！

レヴィアたちを見つけたが二人とも固まっている……モンスターか！

「レヴィア！すまない！遅れた！おい！豚野郎が！レヴィアに近づくなと言っただろうが！」

「ム、ムサシさん、後ろ！」

はっ！？後ろから殺気！？

俺は危険を感じてその場所から転がり離れる。

「なんだコイツは？」

振り返るとでかいコヴォルトがいた。

普通のコヴォルトは150cmほどだがこいつは4mほどある、姿形も異なっている。

『グレートコヴォルト』と表示されている。

豚は茫然自失になっているようだ。

「こいつがコヴォルトのボスか！」

さっき感じた危険はこいつが腕を振るっていたからか、俺なら大丈夫だがレベルが30あってもやばい敵だな。

「レヴィア！離れてろ！お前もだ豚！邪魔だ！」

「は、はい！ムサシさん！気をつけてください！」

豚は腰を抜かしている。

またグレートコヴォルトが今度は両腕を振ってきた狙いは俺と豚らしい。

俺は刀で受け止めたが豚は食らって吹き飛んだ。馬鹿が！身の程知らずがでしゃばるからこうなるんだ！

「二の奥義！斬空閃！」
ズバッ！

ガアアアアア！！

本気ではないとはいえ五分の一ほどしかHPが削れてない。

「なんなんだコイツは？突然変異種なのか？同じコヴォルトでも強すぎるぞ。」

豚は木に衝突して両足が変な方向を向いている、ブヒブヒうるせえんだよ！足が折れたくらいで泣きわめくな！

ゴアアアアア！！！！

叫び声が異常なグレートコヴォルトに顔を向けると、なんと天を仰いでいて口から中級魔法くらいの炎の塊ができていた。今も大きくなっている。

「魔法を使えるのか！？」

グレートコヴォルトはまだ炎を溜めている、もう上級魔法レベルだ！

「ちっ！あんなのを放たれたら後ろのレヴィアもやばい！
ならば俺も全力で迎え撃とう。

サンダガ！ライデイン！バギクロス！合成。
究極武装。

一の最終奥義、雷鳴閃・天雷！！」

極大の雷とプラズマが発生して常軌を逸脱する発熱で対象を消し去る天雷がグレートコヴォルトに落ちる！

『バジユウウウウウ！！！！！』

グレートコヴォルトが影も形も無くなる。

《究極武装》

武器に魔法を纏わせるのではなく、魔法を取り込ませることで究極の魔法武器とさせ、技を業へと昇華させるものだ。威力は段違いに上がる。

「レヴィア！無事か！？豚になにかされなかったか！？」

俺は離れていたレヴィアに走り寄る。

「え、あ、はい。大丈夫です。」

「そうか。ハア、よかったあ。無事で。ゴメン、俺が目をはなしたせいでいやな目に会わせてしまった。」

「ムサシさんのせいではないです。私が弱いから……………」

「それなら俺が強くてやるよ、身も心もな。俺はしばらくアルダ村に滞在して鍛え直そうと思ってるんだ。ついでになるけどどうする？」

「え…………。はい！よろしくお願いします！」

「よし、じゃあ戻ろうか。」

「はい！」

「おい！までよ！俺をおいてくんじゃねえ！」

後ろからブヒブヒ聞こえる。

「あ、お前いたの？そういえば真っ先にやられてたな、お前。どうする？レヴィア？」

「私はこのままでいいと思います。嫌がる女性に気持ち悪いことをする人ですから。」

「そうだな。お前みたいな豚は食料になるほうが世のためだ。じゃあな、バギクロス。」

殺傷力のない竜巻だけにセーブして豚男を吹き飛ばす。

「てめえ！覚えてろよ！必ずぶつ殺してやる！！その女もな！」

典型的な負け犬のセリフを吐いて吹き飛んでいくまけい……負け豚か。

「レヴィア、みんなのところに戻ろう。コヴォルトも倒し終わつてと思うから。」

「はい。」

「みんな！無事か！？」

「はい！大丈夫です！姉様は大丈夫だったんですか？」

「ええ、大丈夫よ。さあ、アルダ村に帰りましょう。」

「あのリーダーがいないんですけど、どこですか？」

「ああ、あの豚ならレヴィアに嫌な思いをさせたからな。
今ごろは星になっているんじゃないか？なあ、レヴィア？」

「クスッ、そうですね。二度も助けてくれてありがとうございます。」

「はあ、よかった。やっとあのリーダーと離れます。ありがとうございます。」

「やっぱりそうだったのか。あいつ臭いし、気持ち悪いからな。みんな疲れただろうから、帰ろう。」

「いやー、ムサシさん！今回の依頼を受けてくれてありがとうございます。」

ムサシさんはこれからどうされるんですか？」

村に帰りオランドウさんに依頼達成報告をしている。

「そのことなんだが、この村に半年ほど滞在しようと思う。
俺が旅をしているのは世界を救うためなんだが、時期が悪くて半年ほど待たないといけないんだ。」

「この村に留まってくれるのはこちらとしては助かりますが、世界を救うとは？」

「大邪神ギヤスパルクを復活させて世界を滅ぼそうとしている教団を倒すために旅をしているんです。」

「大邪神！？そんなのがいるのですか！？」

「ああ、詳しく言うと、遥か昔に軍神ゴードスを筆頭とした七神が世界を混沌におとしいていたギヤスパルクを七つに分けて、その七つになった魔神を各地に封印したんだ。教団という連中はその魔神の封印を解いてもう一度世界を破滅に導こうとしているんだ。」

「そんな大きな危機がこのエターナルに訪れているなんて……わかりました。いくらでも滞在していつてください。イシユラ、レヴィアも構わないな？」

俺の実力を知ってるからすぐに信じてくれた。

それにしても美少女二人と生活できるなんて幸せだっ……！！

「半年なんて言わないで一生でも居ていいですよ……！！
師匠ならその教団だって倒せますよ！」

「私もいいです。ずっと居てくれても構わないですよ。」

「二人ともありがとう。俺も美少女二人と半年居れるなんて幸せ者だよ。」ニコッ

「師匠／＼／＼／」

「ツ／／／／」

二人が赤くなってる可愛いなあ。

もしかして惚れてくれたり？いや、そんな都合良くはないか、照れてるだけだな。

好意にあまり触れたことがないムサシは少し鈍いのであった。

「ムサシさん。実はこの地に魔神ヴォイドと呼ばれる魔物が封印されているのですが……」

「魔神の七柱の内の一柱だと思います。警備をお願いしたいのですが無理だと思うので滞在中は俺が、村を出たあとはあてがあるので任せてください。」

「ありがとうございます。封印の呪文を解除できるのは私とレヴィアだけなのでレヴィアのことをお願いします。」

「わかりました。俺もこれから半年よろしくお願いします。」

「師匠！あたしのことも忘れないで下さいよ！」

「わかってるよ、二人とも俺が守って見せるから。」

やっとアルダ村での騒動は終わった。

あとは翔「カケル」と勇吾「ユーゴ」が来るのを待ちつつ、修行するだけだな。

そしてイシユラとレヴィアの好感度を上げる！！

すでに二人の好感度がかなり高いの知らないムサシであった。

美人姉妹“姉”（後書き）

読みやすいよう試行錯誤しているんですが展開がはやくなっています

密度が濃くなり読むのが疲れると思いますがこれからも頑張りますのでよろしくやってください。

恋と修行ときどき戦闘（前書き）

暴走してしまった感が否めないので、許してください。

むさ苦しいほぼ男子校で華がなく、レポート提出は遅れ、課題が大量発生。

毎週毎週、二通のレポート提出……

…俺に安らぎの時間は無いのか？

恋と修行ときどき戦闘

……俺はいま、前世も含めてかつてない出来事に遭遇している。

それは漫画とかアニメとかでよく見ることだが……見て思うのと、実際に行われるの…全く違う！

俺たちはアルダ村に凱旋して村人に讃えられた。そしてオランダウさんの家にしばらくの間、厄介になることにしたが………なんだこれ？

俺の眼前の右にはふわふわ玉子焼きらしき物体が、そして左には肉汁したたるミディアムと思わしき霜降り肉？が突きつけられていた。突きつけられた肉が刺さっているフォークを握る手の持ち主を見ると、ニコニコと悪意を知らないような純粹な笑顔でこっちを見る美少女、ワインカラーの瞳と柔らかそうな赤毛の髪の持ち主…イシュラ。

右には、なぜ西欧風の世界にあるのか疑問だがつかんだらくずれそうなふわふわの玉子焼きを箸で持って、おずおずと顔を赤らめて上目遣いな長い紺色の髪のナイスバディな美人……レヴィア。

俺たちは普通に食事をしていたはずだ、それがいつの間にこんなこ

とになっている？

「はい、師匠！あ〜ん……………もっつ、師匠ってば、口を開けないとあ〜んできないじゃないですか！」

「は、はい、ムサシさん、あ〜ん。」

なんだこれは……………どうすればいいんだ！？戦闘のシミュレーションはしていたが、この状況はシミュレートできなかった！どうする俺！？

1、逃げる

2、素直にあ〜んさせてもらう。

3、とりあえず話してみる。

4、勢いあまってキスをする。

……………1はあとが怖いな、どうなるかわからん。
女性は恐ろしいと聞くし。1は却下だな。

2は難しいな……………正直に言えばあ〜んされたいな、うん。
しかし、戸惑いも大きい。そもそもなぜこうなったか分からないからな。

3は無難だな、話し次第でどっちにでも転ぶけど……………保留。

4……………カオスなことになる気がする。
なんだ勢いあまりキスって！

まさか！この選択は久々のミヤモトクオリティか！？

俺の脳内会議で、理性と欲望とナニかが激しい口論の末に理性が辛勝した。安全牌の3になった。

英雄を目指すのに色情魔になるわけにいかんからな、うんうん。

「ちょっと待ってくれ！なんで、あゝん、なんだ？」

「え、それはもちろん師匠だからですよ！」

「わ、私は二度も助けてもらいましたから、お礼です。それとも私にされるのは嫌ですか？」

「イシユラ、頭のネジが飛んでないか？師匠だからってなんだ？レヴィア、嫌って訳じゃないんだけどお礼つてのも分かるけど……
………間接キスになるぞ？」

「あつ………／／／／」

やっと、事の重大さに気づいたらしい、急速に顔が赤くなってる。レヴィアもちよつと抜けてるな………可愛いけど。

「………でも、ムサシさんならいいです／／／はい、あゝん／／／／／」

えっ！？そうくると思わなかった！どうしよう、断るのもアレだし………いや、考えるのをやめよう。

ここは美人と間接キスをできるのを喜ぶべきだ……！！

「わ、わかった……………あ、あゝん／＼／」

照れてしまうのは仕方ないだろう！初めてのことなんだから！！

レヴィアは俺の言葉で顔をさらに赤くしながら、下げていた玉子焼きを掴んでる箸を俺の口元に寄せてきた。

「は、はい／＼ムサシさん、あゝん／＼／」

パクツと玉子焼きをレヴィアにあゝんしてもらい食べる、さつき玉子焼きを食べたときより美味しい気がする。

「ど、どうですか？ムサシさん？／＼」

レヴィアが上目遣いに聞いてくる。

くっ、精神的ダメージが強い！！

レベル100オーバーの俺を瀕死にする威力！！もしや俺にとっての敵とは美人の上目遣いか！？

「うん、レヴィアの味がして美味しいよ。」

……………はっ！？しまった！精神的ダメージをくらいすぎて俺の中の変態（紳士）が出てきた！！　俺破滅！？

「えっ／＼／＼そんなことっ、こ、困ります！／＼／＼／」

「いや！ゴメン！今のは違うんだ！違くないけど、俺の中の俺がいけないんだ！！」

我ながら意味不明なことを言ってると思う。

俺はパニクるとおかしくなるのだ！！

ああ……レヴィアの俺のハーレム入りがこわれた……………

「え、えつと、美味しかったんですね？嬉しいです／＼／」

つて、あれ？

破滅フラグは？

まさか反対にハーレムフラグか！

どうやらこの数日で好感度はいい感じに上昇中らしい。

俺とレヴィアが恋人なりたててみたいになってる所に、ぶすつと擬音がするような顔で蚊帳の外だったイシユラがご立腹の様子だ。

「えつと、イシユラどうした？」

わかってるけど一応聞いておく。

「だって！姉様とはよくてあたしとはダメなんですか！？」

うつ、今度はうるうるした瞳で見てくるイシユラ。

別の意味で精神的ダメージがでかい。

ハア、レヴィアはよくてイシユラはダメとは言えないな。

美人姉妹にあぐんされる役得だと割り切ろう。

「じゃ、イシユラも食べさせてくれ。あぐん……」

見て分かるほどにパアアと輝くような顔になるイシユラ。

そんなにあぐんしたいのかねえ？

「はい、師匠。あ〜ん。」

パクツと、今までのやりとりで冷めてしまった肉を食べるがやはり美味しいものは美味しいな。

「美味しいよ、イシユラ。」

「あたしの味がですか？」

「ぶっ！ば、馬鹿……………ああ、そつだよ！イシユラの味がして美味しいよー！！」

思わず嘔き出してしまうが開き直すことにした。

「えへへ／＼ありがとうございます師匠／＼／」

「ハア、まったく／＼／」

その後もやけに恥ずかしいあ〜んを二人からされているのをオランダウさんは暖かい目で見ていた。

ああ……………夕焼けが綺麗だなあ、きっと明日は晴れなんだろうな。

若干、混沌と化した食卓を見て俺は現実逃避していた。

「では、オランドウさん。行ってきます。」

「はい。よろしくお願いいたします。イシュラ、レヴィア。ムサシさんに迷惑を掛けないようにな。」

「わかってるよ、お父さん。それに、危なくなったら師匠が助けてくれます。そうですね？姉様？」

「そうね。お父様、私達は大丈夫です。ドラゴンをも倒せるムサシさんが居ますから。」

俺が修行に行こうとしたら例のごとくイシュラが着いてくると言い出した。

なぜか、これまたレヴィアも着いてくると言った。

オランドウさんには、しばらくは帰らないと言ったのに、

『二人が着いていききたいと言うのならば連れていってください。』
だもんな。

昨日の今日でこれだ。

確かに俺は、もっと好きなようにしてやる方がいいとオランドウさんと風呂に入ったときに言ったが………裸の付き合いというやつは本音が出るのか、オランドウさんは奥さんが亡くなったことやイシュラやレヴィアのことを腹を割って話し始めた。

イシュラやレヴィアが心配なこと、奥さんに先立たれたが娘のためにも今まで頑張ってきたこと。

そこに現れた俺という旅人のこと。

オランドウさんとは色々なことを話した、俺自身もこれからが不安

なこと……しかし、オランドウさんは真面目に受け止めてくれて、少し吹っ切れた。

俺のいま出来ることは何かを考えた、結論はさらに力を手にいれる事だ………そういえばオランドウさんは風呂から出るときに

『あなたになら娘たちのことを頼めます』

と含みのある言葉を残して出ていった。果たしてあれはなんの意味だったのか…

「分かりました。しばらく帰ってこないと思いますが安心してください。二人は絶対に守りますから。」

「頼みましたよ、ムサシさん。」

修行のためにしばらくアルダ村を出るんだけど、イシュラとレヴィアは本当にそのことを分かってるのか？二人も少しは強くしないな。

side ムサシ end

side イシュラ

あたしと姉様、そして師匠で今は師匠が言う修行場所に荷馬車で向かっているところだ。

昨日は師匠の旅の目的を聞かせてもらい、師匠はまだ姉様と同じくらしいの歳なのに世界を救うために旅をしてるなんてすごいと思った。

あたしも旅してみたいなあ……できれば師匠と一緒に…

「師匠。一体どこで修行するんですか？」

あたしは村からあまり離れたことがないから周りをキョロキョロしてたけど、ふと、疑問に思ったことを師匠に聞いてみる…

「そういえば言ってなかったな。」

本当は俺一人のつもりだったから、ある程度広くて、時々モンスターが出るような場所が良かったんだけど………イシュラたちは全然レベルが低いからな、そこそこの経験値を持った弱いモンスターがいる場所に行くつもりだ。」

「どんなモンスターなんですか？」

今まで、荷台のなかで荷物を整理していた姉様が、あたしと師匠の話に入ってきた。

「（あたしが師匠と話してたのに、本当にこういうことは姉様は気を遣わないんだから！多分だけど姉様は少なからず師匠を想っているはず、師匠はあたしだけの師匠だもん！たとえ姉様でも、これだけは譲れない！）」

「二人にはキツイと思うけど、『ポイズンスラッグ』っていう巨大な黄色いナメクジだよ。」

見た目に反して経験値は割りと豊富だから、レベルアップには丁度良いから頑張ってくれ。」

「え、ナメクジですか？それに私とイシュラだけでですか？ムサシ

さんは手伝ってくれないんですか？」

姉様が胸にただのワンドを抱き締めて、うるうるとした瞳で師匠を見つめている。

師匠とはまだ数日しか過ごしてないけど、師匠は女の子の涙に極端に弱いみたい、だって、今も子供みたいに焦ってるから。

「え、えっと。もちろん常にレヴィアたちはきにかけるよ？」

けど、その場所には他にも『パラライズビー』とか『ポイズン・アンウッド』とかがいるから、俺はレヴィアたちがポイズンスラッグに集中できるようにそいつらを倒さないといけない、極めつけにそこには稀にボス級モンスター『オールドスラッグ』がでるんだ。だから極力レヴィアたち自身で倒してほしい。」

「う、はい、分かりました。」

シヨボンとした顔で荷台のなかに途中だった荷物整理のために姉様が戻っていった。

でも、そんなにモンスターが出るんだ。

師匠がいるなら平気だと思うけど、先日のコヴォルトであたしは痛い目にあったから油断しない。

それに師匠がわざわざ、貴重な修行する時間をあたしと姉様に割いてくれてるんだから頑張ってレベルアップして強くならないと！

鬱蒼と繁った木々が段々、木の間隔が広くなってきた。

気のせいかな木や草も元気が無くなっていつている気がする。

なんだか卵が腐ったような匂いがしてきた、空気も肌にくっついてくるような感じがして、気持ち悪い。

「着いた。この沼地が目的地だ。」

師匠も匂いが嫌なのか気分が悪そうだけど、いつもと変わってないのは超高レベルだからなのかな？

「こ、ここですか？」

姉様が荷台から出てきたけど、姉様はすでに泣きそうな顔になっている、あたしもそうだと思う。

「二人とも、戦う前に言うておくことがある。
今から俺たちはモンスターを殺すが、モンスターと言えど人間と変わらず生きている。

気持ち悪いから倒す、なんて思いで倒さないでくれ。レベルが上がったり、モンスターを倒せて嬉しいなどあるが、戦っているときは頭の片隅にでも自分の目的を必ず置いておくんだ。

なにも考えずに殺すのは殺戮者と同じだ。何のために強くなるか、倒すか、それを忘れないでくれ。」

師匠が真剣な顔であたしたちに話す、そんなこと考えたこともなかった。

あたしの目的のため……

姉様も真剣考えている。やっぱり師匠は凄い。
強さもだけど、人としても大人顔負けだと思う。

あたしは倒すポイズンスラッグと表示された黄色いナメクジを見る。

「フツ、二人とも良い表情だ。分かってくれたようだな。

ポイズンスラッグは基本は動きが鈍く常に背後を取って戦えば勝てる。

それに群れとしての意識がないから一匹ずつ戦っても他のやつらは動かない。

それじゃ、行くぞ。

スクルト、ピオリム、バイシオン！プロテア、バポイゾラ！」

「え、ムサシさん、ドラゴンスレイヤーって魔法がつかえるんですか？」

「いや、俺が特別なだけ。そのことはあとで話す。」

そう言って師匠はモンスターに向かっていった。

「さすが師匠です！姉様！あたしたちも負けてられません！」

師匠の魔法のエンチャントのお陰で体が軽い！

それに力が溢れてきてる！

あたしはダダダッと走って、近くにいたポイズンスラッグの後ろをとって錆びた剣を振った。

ズバッ

「師匠みたいに一撃で倒せないよ。ううん、何回でも攻撃してやる

「!

ノロノロと切られたあとにこっちに向いてくる。けど同じように後ろに回って剣を振る!

ズバツツ

さっきより強く振ったらポイズンスラッグが倒れて、G「ゴールド」が出てきた。

「ハアハア、ハア。倒した…(師匠のエンチャントがあるけどあたし一人で倒したのは初めてだ)やった!あたし一人で倒したんだ!」

あたしが一人で倒したのに喜んでいて、少し離れたところで、姉様が一匹のポイズンスラッグをワンドで一生懸命にポコポコ叩いている。

「(姉様には負けたくない!あたしはもっと強くなって師匠と一緒に旅するんだ!)」

side イシュラ end

side レヴィア

私が頑張ってポイズンスラッグを叩いて、やっと一匹を倒してるのにイシュラはもう次のポイズンスラッグを倒している。

ムサシさんなんかポイズンスラッグ以外のモンスターをもうほとん

ど倒している。

私は頑張ってやっと一匹……………

冒険がしたいなんて私には大きすぎたのかしら……………でも、冒険をしてみたい！もうお父様や皆に決められた道に行くのは嫌だ！そのために私は変わってみせる！

まずはレベルを上げないと…

「えいつ！」

ボカッ！

ボカッ！

ボカッ！

「ふう、やっと倒したわ。」

あれからひたすらにポイズンスラッグを叩き続けてこれで五匹倒せた。

パチパチパチ

「初めての戦闘なのに大したものだよ、レヴィア。イシユラも頑張ったな。」

ムサシさんが拍手しながらこっちに歩いてきた。

ムサシさんが戦っていた場所には凍りついたモンスターたちがい

た。

かなり前に倒して私たちを見ていたらしい。

「姉様！姉様は何体倒したの？あたしは12体！それにレベルアップしたんだ」さりげなくイシュラが、ステータスウィンドウを出し自慢してきてちよつとムツとする。

「そう、よかったわね。ムサシさんもうモンスターはいないみたいですけどどうしますか？」

私はイシュラのことをさらっと流して、これからどうするかムサシさんに聞く。

「モンスターを倒したからにはここにはもう用はない、ここから離れた所を拠点にして、今日はもう終わりだ。」

「そうですか、分かりました。イシュラ。移動するわよ。」

「う、うん。わかった。」

グツグツグツ…

鍋に入っている、ほとんど私が作ったシチューを煮込んでいる。

今は臭い沼地を離れて、草原が少しある高原にきて、焚き火にかけているお鍋の周りでムサシさんを挟むようにイシュラと私が座っている。

ぐぎゅっぐゅ

「姉様……まだ出来ないんですか？お腹が空きました」

「もう少し煮込まないといけないわ。あと少し我慢しなさい。」

「ははは、腹がすごい音出してるぞ。」

でも、イシユラは今日頑張ってたもんな。」

ムサシさんがイシユラを褒めて頭を撫でている。

イシユラが撫でられてるのを目を細めて顔を綻ばせている。

それは確かにイシユラは頑張っていたけど、ムサシさんはイシユラばかり構って！

ムサシさん、イシユラのこと好きなのかしら…

「ムサシさんはイシユラに甘すぎです！

でも、確かにイシユラは、私と違い、頑張りましたからね……それにひきかえ、私はほとんど何もできませんでした。

ムサシさん、私には冒険なんて無理なんでしょうか…？」

話してるうちに悲しくなってきた、涙がポツリと溢れてくる。

私は一人では何も出来ない、どうしたらいいんでしょう。

「レヴィアがそんなふうに思い詰めていたとは知らなかった……ごめんな。」

「あっ」

イシユラと同じように私の頭を撫でてくれる。

……暖かい。

この人といると、お母様が近くにいたみたいで心が落ち着く……

「……………そうだな。レヴィア。イシユラも聞いてくれ。
一つ昔話をしよう。」

ずっと昔の、ある男がなんの力も無かったときの話だ。」

「…え、ムサシさん。それって……………」

「…むかし、一人の男が一つの学舎に通っていました。
男は友もいて、頭も悪くはありませんでした。」

そこそこ楽しい暮らしをしていましたが、男は世の中に飽きてしまいました。

何もかもがつまらなくなってしまう、やる気が起きずにただ、なんとなく日々を過ごしていました。

男は魔法の一つも使えなく、架空の物語に強い憧れを持っていました。

そんなつまらなく思う日々を過ごす男でしたが、ある日、友と過ごしていたとき、不慮の事故が起きて男はそこから離れなくてはなりませんでした。

そこに、男に、憧れていた英雄になれるような選択肢を出す人物が現れたのです。

男には両親がいなく義理の親は居ましたが、天涯孤独でした。
人の温もりに飢えていた男は、英雄になり愛する人と暮らすという目的をつくりました。

男はその人物の選択肢を受けて新たな世界に旅立つと同時に、元の場所には帰れなくなりました。
男は天涯孤独だったので、暖かい家庭が欲しかったのです。

そのささやかだけれど強い目的のため、男は雨の日も寒い日も辛い修行に耐えて、強くなっていたのでした。

…これが男の昔話だ。」

「……………」

「……………あの、その男の人はいま……………」

その男の人の後が気になり聞いてみる。

イシユラも重い話だったから黙り込んでムサシさんを見ている

「ん、その後の男はその目的のため旅をして、つい最近、美少女二人と出会ったらしいよ。」

…それって……………やっぱり……………

「……………師匠、ですよ？その話の男の人って……………」

「さあてね、真実はどこかな？けど話は全て事実だ。

この昔話で、俺が何を言いたいかと言うと、自分の幸せやしたいことに、道を進んでいけてことだ。

レヴィア、悩むのは良いことだが迷うのは良くない。自分にとって何が大事か何がしたいかだ。『ただ生きる』のではなく、『よく生きる』ことだ。本気になった自分の勇気ある一歩は自分の全てを変える『力』を持っている。

強さってというのは力だけじゃないさ、多種多様、星の数ほど存在するんだ。そのなかの自分に合ったものを見つけて強くなればいい。

もう一度言っぞ？レヴィアの目的に見合ったやりかたをすればいい、そのためなら俺は全力で協力するからな。」

お母様のような雰囲気で、優しく頭を撫でてくれ、私のために全力で尽くしてくれるって。

…なんて暖かい人なんだろう。笑顔が太陽みたいだ。

「あゝあ、長い話のせいでせつかくのレヴィアが作ったシチューが冷めてるな。

あむ、でも美味しいな。

あ、悪いな。飯なのに重い話して。もう終わりだから食べよう。」

私にシチューを入れた器を渡してくる。

パクっと一口食べると冷たいけど、さっき撫でられた時に顔が熱くなってしまったから丁度いいです。

さっきまでもやもやしていた私の心が今は、ムサシさんのおかげで星空がよく見える夜空のように澄んでいる気がしました。

ムサシさんの昔話は壮大でした、強さと同じくらい大きい闇を持っていました…

私は私にできることをします、私にしかできないことがきつとあるはずです。

side レヴィア end

side ムサシ

あゝ、なんか空気が重い。

イシュラなんかいつもの元気な天真爛漫さが消えている。

「イシュラ。気に病むことはないぞ？もう過去の話だ、それに今は充実してるから。」

自分の本当にしたいことをしてるからな。
目的はまだ達成してないけどな。」

やっとイシュラが顔を上げた。

「？…師匠の目的って何ですか？」

「男の夢といえば英雄になってハーレムを作る、だ！」

「さすが師匠です、することも大きいですね！師匠ならできますよ！あたしもそのなかに入ってますか？」

「もちろん。レヴィアも、な？」パチッ

キザにウィンクしながらレヴィアに同意を求めている…

「／／／えっと、か、考えさせてください！／／／／」

「あはは、そつか。ま、無理強いはしないよ。」

俺は先に寝るな、火は消さなくても平気だから、さっきこの辺一体に結界を張った。

それじゃ、イシュラ、レヴィア、おやすみ。」

寝袋に入り込む、イシュラたちは簡易テントだ。

さすがに一緒に不味いからな。

「はい、おやすみなさい。」

「おやすみなさいです、師匠。」

……… 最近は心が穏やかだな、今はイシユラたちがいるし、ガイアだと勇吾と翔がよくくつついてたからな。

……… いま思えば、俺の前世の生活はかなり荒んでたんだなあ、世界を一度滅ぼして作り替えてやりてえ、とか思ってたしな。

今ごろ、勇吾と翔は何してるかな、心配だな。

俺はあいつらの兄貴だからな。

「師匠！全部倒しましたよ！」

「おう、よくやったな。」

見渡す限り草原で、今は修行している。

モンスターを倒すのは時々だ、経験値も大事だけど地力を上げないと。レベルがあっても実力ありません！ではしょうがないからな、だから三人で修行している。

イシユラは俺の魔法で作った木偶百体を倒す。

魔法で重力二倍状態だ。

「よし、次は二百体だ！これが終われば、今日は終わりだぞ。」

「う、二百体ですか……師匠！終わったら頭撫でてください！」

「そんなものでいいならな。頑張れ、イシユラは絶対強くなれるぞ。」

「はい！頑張ります！」

「いい子だな、イシユラは……」

「あの、ムサシさん。難しいです。コツを教えてください。」

「コツか…、そうだな、身体に力を入れずに、力をいれる感じだ。ようはイメージだ。」

これは俺の感覚だからな、レヴィアは自分の力を入れやすいイメージを頭に思い浮かべたらどうだ？」

レヴィアは言っでは悪いが昨日の戦闘を見て確信した。

前衛には向いていない。

前衛補助になるか、後衛の方がいいと言ったら、『後衛の戦いを教えてください』と言われたから、前衛補助もできる後衛のタイプに鍛えるつもりだ。

レヴィアの修行は魔力を用いるもので、魔力、つまり、MPを放出して自由に固形化させる修行だ。

MPが多めなレヴィアだからできる方法だ、俺もできるけど戦闘

では基礎の基礎にしかない。

俺は剣士だけど魔法剣士型だからな。

「でも全然出来ないんです。」

「大丈夫だよ、俺は二月かかったし。MPを感じて放出できるだけでも大したものだから、焦らず行こう。」

「はい／＼／」

なぜ照れる、本当に分かん。

さて、そろそろ俺自身の修行をしないと、レヴィアの修行を教えるのに時間食ったから、あまり時間がないけど。

「…グラビトン。ボミオス。あとはバリア結界！」

重力五十倍と減速状態で仮想の敵でイメージトレーニングだ、結界を張ったのは俺の修行は周りに必ず被害が出るから。

「くっ、キツいな。最近は修行できなかったからな。フウ。」

息を吐いて、瞑想する。空想の敵はネギまの公式バグキャラ、バカンことジャック・ラカンだ。

なぜラカンかと言うと、全ての攻撃を笑いながら気合で跳ね返しそ
うだから、あと空想でも倒すとなぜかすぐスカッとするからだ。
故に俺のバーチャル修行相手になっている。

「本気モードで行きますか。

魔力、気。合成、咸卦法。

さらに魔力と気を最大限まで高めて、界王拳。

つぐ！身体に負荷がすごい、だがまだだ。

ホ、ホーリー。ドルマドン。合成。

究極武装

『久遠なる無』！！

」

究極武装『久遠なる無』は正と負の対極の魔法を合成することできた全てを呑み込むブラックホールを、臍に取り込ませることのできる斬るものを呑み込む武装だ。

「行くぞ！バーチャル（笑）ラカン！ウオオオオ！！」

俺はほぼ全力の力でラカンに駆ける！

「大丈夫ですか？ムサシさん。」

「ううう、大丈夫大丈夫。」

バーチャル（笑）ラカンは強かった…

本物はこれほど強くないと思うけど、なんで斬られてるのに平然と、むしろ喜んで攻撃してくるの？

や、やめてくれ！ほぼ全裸で俺のところに……………く、来るな！来るな

いであれええええ！！！！！！

「うわあああつ！！！」

「だ、大丈夫ですか！？師匠！？」

「あ、ああ。大丈夫だ。ちょっと、バーチャルの修行相手がな。」

ここは分厚いラカンの胸板じゃない！！

レヴィアの柔らかい膝枕だ！

…いや、あれは現実じゃない。そうだ、きっと悪夢だったんだ。

ならば今はこの柔らかい膝枕を堪能すべきだ。寝返りを打つ、自然、レヴィアの太ももに顔を押し付ける姿勢になる。

素晴らしい桃のような香りと柔らかくも弾力性のある太もも……

ああ、桃源郷はここにあったんだ……

「ち、ちよつと、ムサシさん！息が当たってくすぐったいです！／＼／＼」

「あゝ姉様、ずるいです！師匠！こっちにどうぞ！」

ちらりとイシユラを見ると正座をして太ももを叩いているが……

………残念だ、イシユラ。

太ももは姉のレヴィアの方が素晴らしいようだ。

俺は無視してまたレヴィアの太ももを堪能する。今度はレヴィアが撫でてきた。

「師匠ひどいです！あたしだと子供だって言うんですか！？」

「い、いや、違うぞ？冗談はこの辺にしといて。
これからは各自の長所を伸ばす修行をする！村に帰るのは一月ごとにする！いいか？」

名残惜しいがレヴィアの膝枕から離れて話を始める。レヴィアが少し残念そうにしてる。

「はい！もちろんです、あたしたちは師匠についていきますから！
朝、修行を始める前に二人に目的はまだでも目標は見つけたか聞いたら、目的を見つけたと言ったから聞いてみたら…」

『あたしは師匠と旅をして、肩を並べるぐらい強くなります！』と
イシュラが言ってくれ

レヴィアは、

『ムサシさんを支えられるようになりたいです』と言った。

嬉しかったけど、それは教団と戦い、世界を救うという選択だ。その覚悟はあるのかと聞いたら…

『はい（もちろんです）！師匠^{ムサシさん}についていきます！…！』
と、断言された。

嬉しかった、新しい絆ができて、その絆が強くなって。

…… オランドウさん、愛娘二人を根なし草の馬の骨との旅を許し
てくれるかな？

裸の付き合いの仲とはいえ、これとそれは別問題だよな…

恋と修行ときどき戦闘（後書き）

なぜかストーリーより日常の方がすらすら書ける気がする、なぜ…？

黒服（学ラン）の3人（前書き）

……恐れていたことが！！書いてたものを誤って消してしまつて、
落ち込んだけどなんとか書き上げました。

これで原作やっと開始かな？

黒服（学ラン）の3人

side ムサシ

「……ぐー、ぐー…すやすや」

……ドタドタタツ！

「ワンツ！ワン、ワンツ！」

バンツ！ボフツ

「っおふツ！？く、な、なんだ！？」

「クウーン、クウーン」ペロペロ

「うわっ、シルバーか！？なんで俺の部屋に……って、こら！ペロペロすんな！」

思い出した…昨夜は、たしか豪雨だったから、小屋は可哀想だとレヴィアが家の中に入れたんだった。

「師匠っ、起きてますか？姉様が、朝御飯が出来たから呼んできてっ……あれ、シルバー？なんで師匠の部屋にいるの？」

「昨日、家に上げたからな。

なんでか俺はシルバーに好かれてるんだよな、もしかしたら起こしに来てくれたのかも。」

「ふうん、そうですね。じゃあ、着替えたら下に降りてきてください。」

イシュラが部屋を出ていった。

「さて、腹も減ったし着替えて、下に行きますか。
…うわ、頬がシルバーに舐められてデロデロ。」

俺は顔を洗って服を着替えてシルバーを連れて部屋を出る。

半年前から、修行に行きっぱなしで、ときどきアルダ村に帰ってたけど、一月ほど前から村に戻っている……そろそろ勇吾たちが来るからだ。

オランドウさんから、ずっと前にイシュラとレヴィアの旅立ちについて許しを得ている。

なので、一月前からアルダ村で修行しながらイシュラ、レヴィアとのほほんとした日々を送っていた。

下に降りていくと、リビングにイシュラ、レヴィア、オランドウさんが朝御飯をまだ食べないで待っていた。

「みんな、俺を待たないで先に食べてても良かったのに…」

「あたしは師匠と一緒に食べたいんです。」

「私もムサシさんと一緒に食事したくて。」

「ムサシさんはもう私たちの家族のようなものですから。
この家は、食事は家族全員で食べますから、待つのは当たり前です
よ。」

イシユラたちの健気な思いとオランドウさんの家族、という信頼が
心に染みる。

俺はこの家の一員なんだな。

「そうですか。すみません、遅れてしまつて。
では、食べますか。」

「「「いただきます（ワンッ）！」「」「」

「今朝はスクランブルエッグ、トーストにサラダか。美味しそうだ
な。」

「ふふつ、ムサシさんにそう言ってもらえると嬉しいです。」

優しく微笑む母のように柔らかな表情が神々しくて、朝日より眩し
い！

こんな理想の女性が嫁さんだったらいいのに。

「むっ、師匠！姉様にデレデレし過ぎです！
あたしならいつでもOKですよ？」

「ぶっ、なにがだよ……」

予想外な言葉に思わず吹いてしまう。

「こら、イシユラ。はしたないぞ。」

「はい、ごめんなさい。でも師匠、あたしは本気ですよ?」

また吹いてしまう。

「お、お前なあ……」

「ムサシさん、私もですよ?」

「レ、レヴィアも……?」

「はい。ところで、ムサシさん。今回は随分長く村に居ますけど、次の修行はいつからですか?」

「もう修行はしない、レヴィアたちも結構強くなったしな。」

「え、それってどういうことですか?」

「ああ、それは……」

バタンツ!

「村長! 食事中にすまない!

村に見慣れない黒い服を着た超高レベルの男たちが来た! どうする! ?」

「なんだと! ? いまその者達はどこにいる! ?」

村の青年団隊長、ジャッコーが慌てた様子でオランダさんに話す
……それより……

「……………来たか」

「ムサシさん、来た、とはどういうことですか？」

さすがにオランダさんが聞いてくるが、先ほどより落ち着き、安心した様子だ。信頼されているということだ。

「そいつらこそ俺が、待ち望んでいたやつらです。ジャッコー、そいつらはどこにいるんだ？」

「今は青年団の連中で村の入り口に引き留めてる。」

「わかった。オランダさん行きますよね？」

レヴィアたちも来てくれ、これから旅をともにする仲間を見て損はないはずだよ。」

「はい。わかりました。」

「師匠が言うならわかりました。」

「うむ。ムサシさん、その者達は信用していいのですかな？」

「はい。オランダウさんたちと同じくらい信用が置けます。」

「わかりました。では行きましょう。」

村の入り口に青年団がいる、その先には学ランを着た三人がいた。

「（三人！？ユーゴに……カケルに……）あ、あいつは！な
んでこんなところに！？」

俺が見た三人のうち一人はあり得ない奴だった。

けど、俺は多分、そいつのことを一番信賴している。

……俺の……一番の親友だったやつだ……

そいつは俺を見つけたのか、手がちぎれるのでは？と思うくらい手
を振ってきて、俺の方に走り出してきた。

side ムサシ end

＼ガイア＼

side 宮本 翔

僕は宮本 翔！健全な高校生の華の16歳さ！

16年間、僕は一度も女の子にモテたことがないのに、なんでクラ
スのチャライ男には可愛い彼女がいるんだ！

「なあ、ユーゴ。なんで世の中は思い通りにならないんだろっなあ。

」

「なにをバカなことを言ってるんだ、カケル。」

「一枚皮を剥けば皆同じなのに、なんで僕はモテないんだ！？それに世の中が思い通りになれば世界中を美少女と美女にして、キヤツキヤツウフフなことができるのにつつつつ！！」

「そんなことがあるわけないだろう、ゲームの中だけだ」

今日は夏休み前の終業式の朝だ。

夏に入るに相応しい澄みきった青空だ、しかし、この時期は夏休みという樂園とともに通知表という身も蓋もない残酷な現実を味わう天国と地獄の日だ。

さつきから一緒に登校して話しているのは幼なじみの敵島 勇吾だ。ユーゴは僕が小さい頃にいじめられっ子にいじめられていたときを助けてもらってから友達になってよく遊ぶようになった。

実は僕もユーゴも根からゲーマーなんだ。

一緒に大体のゲームはプレイした仲だ。

敵しい世の中から逃げるように毎日ゲームをする日々を送っているんだ

「はあ、本当にゲームの中に入れればなあ。

モンスターを倒して美女をたくさん侍らすのに」

「確かにそんなことができればいいよな。

それより兄さん……ムサシさんはまだ見つからないのか？」

「あ……うん。そうなんだ。まだ兄さん見つからないんだ。」

「そうか…もう兄さんがいなくなってから1ヶ月が経つのか」

僕たちの言う兄さんは、僕の実兄、宮本 武蔵だ。

兄さんは1ヶ月ほど前に突然家から居なくなってしまった、家に靴もあつたし、部屋にはゲーム機が起動してテレビが着いたままだった。

いつもいじめられっ子から僕たちを守ってくれた兄さん……

「やっぱり兄さんがなんにも言わないで失踪するわけない！」

「うん。俺もそう思う。あの強くて優しい兄さんが失踪なんてありえない。

きつとなにか事情があつたんだ」

僕たちのヒーローだった兄さん…

本当にどこに行ってしまったんだろう。

「……あ！カケル！時間がやばい！遅刻する、走るぞ！」

「あつ、ユーゴ！待ってくれて、僕が運動苦手なの知ってるだろ！」

「仕方ないな、ゆっくり行くけど走るぞ！」

「ああ、わかった。」

ユーゴは優しい、頭も良くて運動もそこそこできるのに僕みたいな男と一緒にいてくれる

今も遅刻しそうなのに僕を気遣いながら走ってくれている。

兄さんとユーゴ……。

僕には二人とも大切な人だ。

兄さんはいつも優しくて強い、僕にとって最高のヒーローだ。

今はどこにいるか分からないけど、必ずきつと会えると僕は思っている。

二人に比べて僕は、運動はできないし頭も悪い、顔も悪いときた。
…このダメ人間、三段活用だっつつつ！！

昔は、

『魔法使いになって皆を守るんだ！』

と、夢溢れることを言ってたけど、今は今日1日を過ごすので精一杯だ。

「（あゝあ、ゲームの世界に入って、僕TUEEEEEEE！！みたいなことしたいなあ。そんで、兄さんとユーゴのピンチを救っちゃったりして、

女の子たちが、

『キヤアアア！カケル様素敵〜！！私をお嫁にもらって〜』みたい
な！？）」

つまらない平凡な1日を過ごすため僕は重い足取りで仕方なく学校に行くのだった。

…しかし、今日はいつもととは違った、運命を変える日になることをカケルは知らなかった…

side 宮本 翔 end

side 敵島 勇吾

ガラッ

「ハアハア、ハアッ。
すいません！遅刻しました！」

「ハアッ、ハアッ。ち、遅刻しました」

ワンテンポ遅れてカケルが教室にきた。

いつもなら教室はガヤガヤしていて、遅刻した者は程度により先生の制裁がくるのに、教室は静まり返っていて、制裁もこなかった。

「宮本と敵島か。早く席に座れ。」

「はい。」

席は廊下側の後ろからカケル、俺の順番だ。

席に座るまでに異様な教室の静けさの原因が分かった。

転校生が来ていた…背は170前半くらいで顔立ちは整っている、髪は茶髪に近くて、少し長めで襟足を越えている。メガネを掛けていてインテリな感じがある。

カケルに言わせれば、

『イケメンは絶滅しろ！』って言いそうだ。

「今日からこのクラスの一員になる転校生の、
『坂本 翔』だ。」

「みんな、よろしく頼むな。」

「席は窓際の一番後ろだ。」

「あ、先生。俺、あの宮本ってやつの後ろでいい。」

なぜか転校生の坂本はカケルを指差して言った、結果、席は一番後ろになった。

「よろしくな、巖島、宮本。俺のことは翔でいいぞ。」

かなりフレンドリーに、俺とカケルにだけ挨拶してきた。他を寄せ付けない感じが割りと気さくなやつらしい。

「じゃあ、俺のことはユーゴでいい。」

「あ、僕もカケルでいいよ。」

坂本……翔がカケルをジッと見てる、なんだ？

「なあ宮本、武蔵って兄貴がいるだろ？」

え！？兄さんを知ってるのか！？

「え！？なんで知ってるんだ！？兄さんがどこにいるか知ってるの！？」

カケルが翔に聞いている

「知ってるも何も、俺と武蔵は親友だぜ？
ところで、どこにいるかってどういうことだ？」

「なんだ知らないのか？」

兄さんは1ヶ月ほど前から行方が分からないんだ……」

なんだ、翔も知らないのか。

それにしても兄さんは親友がいるなんて一言も言っていなかったぞ。

兄さんは周りとは一定の距離を保っていて、親しい友達はいないはずだけど、それに俺とカケルに対しては良く世話してくれたし、気さくだった。

なぜだろう？

「…そうか。まさかもう向こうに行ってるのか、久しぶりに会える
と思ったけどな。」

何かボソボソと翔が呟いている。

「でも、兄さんは絶対に帰って来るはずだ。
俺達にも何も言わないはずがない。」

「ユーゴの言うとおりだよ、兄さんはきつとすぐ帰って来るよ！」

「…そうだな、きつと会えるはずだ。
いきなりで悪いんだけど、勇吾の家か、カケルの家に行ってもいい
か？」

親睦を深めるってことで。」

「それいいね！兄さんの話とかしたいし。

でも、うちは狭くて無理だよ、兄さんの部屋はダメだろうし……」

もう翔と打ち解けている、カケルのこういったところはすごい。

適応力が高いな。

兄さんも誰とも仲良くなっていたな、宮本家の特性か……

「じゃあ俺の家でいい。誰がいるかも知れないけど……」

俺の家族には、馴れ馴れしいうるさい姉と、甘えたがりな兄離れが出来ない妹と、ゲームが大好きで人生の全てをゲームに捧げているような親父がいる。

個性の強い姉と妹がいるせいで自分でも気が利く方だと思う。

俺のゲーム好きは親父の影響が強い、親父はゲームショップとゲームセンターを一店舗ずつ経営していて、生粋のゲームマニアだ……
……だから必然的に家はゲーム博物館となっている、親父の部屋など研究所そのものだ、毎日夜遅くまでゲームを研究しているらしい……妹が言っていたから研究しているかは定かではない。

「武蔵の部屋？ちょっと入ってもいいか？

そのあとに勇吾の家に行こう。」

「兄さんの親友ならいいと思うけど、けっこー普通だよ？」

「構わない、少し気になるんだ。

それじゃ放課後は武蔵の部屋を見に行ったら勇吾の家に行くわ。」

「分かった。それでいい。」

カケルには悪いが、

俺はまだ、この転校生、坂本 翔をあまり信用していない。

突然にこの時期に転校してきて、俺達の兄さんの親友だと言う転校生、翔。

少し考えれば分かるがこいつが兄さんの親友だという証拠がない…。

仮に兄さんが坂本を知っていたとしても、親友なんかではないかもしれない、兄さんは正義感が強くて、よくカツアゲされたりしているやつを助けていたから不良なんかには煙たがられている。

もしかしたらどこかの不良グループが報復のために探っていて、不意打ちを企んでいるかもわからない。

だから確証を、兄さんに会って証言してもらわない限り信じはしない。

あえて泳がせとっておけばボ口を出すかもしれないし。

兄さんがいないから俺がしっかりしないと…。

side 巖島 勇吾 end

side 坂本 翔

放課後になってカケルの家に向かっているとところだ。

やっと武蔵に会えると思ったけど、ぬか喜びで気持ちが空振りしたみたいだ、待望のゲームシリーズの最新作が低クオリティ並みに

ショックだ。

俺は前世で武蔵に命を助けられた、けど代わりに武蔵が死んでしまった。

武蔵が俺のせいで死んでしまって2年が過ぎて俺は専門学校に進学したけど、後悔の念で無気力になってしまい、学校を退学になったが、武蔵の墓参りは毎週欠かさず行った。

あるとき墓参りに行つて家に帰ったあと、突然、頭に不思議な声が聞こえた。

ついに頭が狂ってしまったかと思った。

『あなたは何故苦しんでいるのですか？』

大切な友を死なせてしまったから…

『あなたの友、ムサシさんは別世界で生きています』

余計な慰めはいらない…

「あなたは今、何を一番強く望みますか？」

…ムサシに会つて、謝りたい…

俺は自棄になっていたがこの気持ちは本当だ…

『それがあなたの望みなのです』

ああ、そうだ。頼む、ムサシに会わせてくれ……

『わかりました、では、目を閉じてください』

俺は素直にその声に従って目を閉じた…

ふわっと、身体が浮くような感じがして、宇宙空間を漂うように、ゆらゆらと木の葉が舞うかのようになり、ふわふわと上下左右の感覚が分からないくらい無限の浮遊を漂っていたが今度はふっと、漂う感覚が消え、さっきの声が頭に響いた。

『あなたは次元の波を漂っていたのです、もうじきムサシさんのいる『RPG W（・）（・）RLD』の世界へ着きます。』

わたしは女神のフローラです、ムサシさんによろしくお願いします』

声が聞こえなくなったら足元がすっかりした地面についていた、目を開けるとどこかわからない元の世界に似たどっかだと直感で分かった。

「ここが、RPG W（・）（・）RLDの世界……」

これからどうしよう、原作は2巻までしか知らないし……

まあ、行き当たりばったりでなんとかなるか」

そんなこんなことがあったけど結局は女神様にどうすればいいか教えてもらった。

でも原作主人公、ユーゴとカケル？に会えたからな、あとは流れ

でなんとかなるだろう。

「着いたよ、兄さんの部屋を見たいんだよね。」

最近は僕は兄さんの部屋を使わせてもらっているんだ。兄さんの部屋は二階にあるから。

さ、上がって上がって」

「おじゃましまーす」

「邪魔します」

カケルの家に着いた、

早速、武蔵の部屋に行かせてもらっか。

勇吾と二階に上がると、いくつか部屋が並んでる。

二階に上がって向かって一番右の部屋に『ムサシ』とネームプレートが下がっていた。

「ここが武蔵の部屋か…やっぱり前と変わらないな。」

武蔵の部屋に入ると前世とあまり変わってないから既視感を感じたな。

「兄さんの部屋に入ったことあるのか？」

勇吾が怪しいって顔してる。

そりゃそうか、武蔵の家に入ったことないのに武蔵の部屋を知ってるなんておかしいよな。

「知ってるだけだって、懐かしいなあ〜ホント全然変わってねえなあ。」

勇吾は入ったことあるのか？」

「当然。何度か兄さんの部屋で一緒に遊んだことがある。」

勇吾……………ブラコンぽくね？」

なんか、したり顔で俺の方が武蔵のことを理解ってるんです的な顔してねえか？」

どつりでさつきから冷めた態度だと思ったよ。

「そうかそうか、入ったことあるか。」

武蔵のことだから、こういう引き出しとか押し入れとかに隠してあるゲームとか漫画ももちろん知ってるよな？」

俺は前世で武蔵を知ってるから大体は想像つく。次から次へとゲームが出てくる。

「え！？そんなところに！？

いや、それより兄さんがそんなに大量のゲームを隠し持ってるなんて！」

「なんだ知ってるんじゃないのか？一緒に遊んだんだろ？」

俺の顔は今ニヤニヤしてるだろう。

「そしてここに！！武蔵の秘蔵お宝コレクションが！！……………？これは？」

武蔵のR禁系のブツは必ずベッドの下の絨毯の下のフローリングの

下のよくわからない扉に収容されるけど……

なんか刀みたいなのが出てきた。

いかにも妖刀ですってオーラが出てる気がする……

もちろん、秘蔵の妹系で固められたコレクションも発掘された…。

「刀？模造刀？いや、兄さんがこんな18禁ものを見ているなんて……！」

繁々と刀を見ているとカケルが部屋に麦茶を持って入ってきた。
勇吾は武蔵がそういうものを見ていたことにうちひしがれてる。

「ああ、その刀、僕も昔見たことあるから兄さんに聞いてみたら女神様にもらったって。」

兄さんもロマンチストだね。」

……ロマンチストというより、事実な気がする……

女神とかいうやつ

『ムサシさんによろしくお願いします』

とか言ってたしな、なんで向こうに持っていかなかったんだ？

「ところでどうする？母さんたち居ないからここでも平気だよ。」

「あ、じゃあここに居るわ。勇吾、悪いな。」

「ああ、いや今日は俺は帰るよ。」

『ギヤスパルクの復活』やるから。」

「僕も兄さんの部屋でやろつと、翔はどうするっ。」

「ムサシの部屋に居るわ。」

「それじゃ、勇吾またな。」

夏休み中に一度行くよ。」

「分かった、二人ともまた今度。」

「一度つてお前らどんだけゲームやるんだよ!?!」

俺と武蔵も廃人つて呼ばれたことあるけど、こいつらはゲーム神だ!

「なあゝカケル、暇。」

俺にもギヤスパルクやらせろよ。」

勇吾が帰ってから数時間がたってカケルは一度も休憩しないでずっとゲームしてる。

さっきからカケルはレベル上げしかしてないから見てても面白くない。

「ほら貸せよ、ストーリー進めようぜ!」

「ち、ちょっと!わざと進めてないんだからやめてっ!」

強引にコントローラーを奪おうとしてんだけど、カケルがなかなか強情でコントローラーを手放さない。

「なっ、なにになに!？」

「うっ、なんだ? 眩しい!」

カケルとコントローラーの取り合いをしてたらテレビが急に光はじめた! 眩しさでなにも見えねえ!

「う、ここはどこだ?」

「翔! 大変だ! 僕たちなんかよくわからないとこにいる!」

「ああ? よくわかんないところ?」

辺りを見てみると見渡す限り草原。
上を見ると雲一つない青空に鷹よりも大きい鳥が飛んでいる。

「...どこだここ?」

「ね? ね? 僕たちさっきまで兄さんの部屋でコントローラー取り合ってたのに。」

ああ、ゲーム、セーブしてないよ、早く帰らないと。」

なんかカケルが変な心配してるな。
しっかし、なにもないな……ん?

少し遠くの草原に誰がいる…

「おいカケル、向こうに誰がいるぞ？
行ってみようぜ？」

「どこどこ？」

「あそこ。」

指を差して、その人に向けるが、今は立ち上がっている、いや、立ち上がってるというより呆然と突っ立ってるが正しいな。
何はともあれ行ってみるか。

「翔！早く行こう！」

「慌ててもしょうがないだろ、行くけどな。」

先を走るカケルを俺はゆっくり歩いて追う。

「ユーゴ！？ユーゴなのか！？」

「カケル！？一体ここはどこなんだ？
俺は家で『ギヤスパルクの復活』をやってたら急に光出して気づいたらここにいた。」

「僕たちもついさっきここに来たんだ、誰かいるから来てみたらユーゴだった。」

「おー、ユーゴじゃないか。数時間ぶりだな。」

やっと追い付いた、カケルめ先走りやがって冷静になれよ。

「翔！お前も来てたのか！？」

ん？その頭の上の『シヨウ』と赤と青のなんだ？」

「カケルとユーゴにもついてるぞ？」

頭の上にキャラクター名とHPとMPのゲージらしきものがついてる。

「え？わつ、本当だ。視界の端にちらつと赤と青のなんかが見えた。」

「なんなんだ？これ？」

なにも知らなきゃ当然の反応だな。

「なんか、ゲージの横にHPとかMPって書いてるぞ」

「本当だ、カケル、ちょっと動くな。」

ユーゴがカケルの上のゲージを触ろうとしてる、無理だろう

「通り抜けた。触れない。」

「……ユーゴ、シヨウ。ここよく見たら見覚えあるんだけど……。ギヤスパルクの復活ってスタート地点がランダムに決定されるんだ

けど……ここ、アルダ村の近くの草原だ。
もしかして僕たち、ゲームの中に来た？」

「な……、いくらなんでもそんなわけがないだろう」

「じゃあどう説明するんだよ、それ以外考えられないだろ。」

「まてまて、お前ら仮にゲームの中だとしたら魔法とかできるだろ、
確かめて見るよ。」

全くなんで気がつかないかね。

「そうだ、僕ウォーザードに育ててたんだ。どうやったらステータ
スが見れるんだ？……あ、ステータスウィンドウでできた。
……よっしゃ！さっきやったときのまんまだ！苦労したんだよなあ育
てるの。」

「どうやるんだ？カケル？」

「あ、うん。ステータスウィンドウ出ろって念じたら出た。」

ユーゴもカケルもステータスウィンドウを眺めてる、俺はRPGは
あんまりやりこまないからな。

それにしてもこいつらレベル凄いな。

「ユーゴ、レベル78ってやりすぎだろ！どんだけレベル上げて
んだよ！」

「ユーゴもそうだけどカケル、お前もだろ。」

「カケル、装備が見れるぞ、でも、部屋にいたときの学ランのまんまだ。しかもパンツも装備品に入るらしい。」

「うわ、ホントだ。」

「あつー！ユーゴ！シヨウ！すごいこと思い付いた！」

「なんだ？」

「やめとけ、ユーゴ。聞くだけしようがないぞ。どうせ、これでもパンの女の子が丸分かりだ！とかだろ。」

「うー！シ、シヨウ、な、なんで分かったんだ？」

「なんで分かったか？
そんなの当然だろう…」

「俺もそういう仕様のゲームで考えたことがあるからだ！」

「……………」

「……………」

「……………なにか言えよ、ついでに言つとムサシも似たようなことをよく言つてたぞ。」

「に、兄さんが！？そんなわけない！！兄さんはそんな人じゃない！！」

「ユーゴ…、お前の中でムサシはどれだけ美化されてるんだ？ムサシ

は普通の高校生で普通のゲーマーだぞ、今は知らんがな。

シヨウはムサシの本質を知ってるみたいだ。話が変わってるし。

「ああつ！金が！どんなカスアイテムもまめに売って頑張ったGがゼロだ！」

「とりあえずそのアルダ村に行こうぜ、このままここにいてもあれだろ。」

「ああ、俺は覚えてる。確かこつちだ。着いてきてくれ…………カケル、いつまでへこんでるんだ、はやく行くぞ。」

「待った！まだ魔法を試してないぞ！」

「そうだな、使えるか確かめてからでもいいか。あんまり派手なのはやめろよ？」

カケルが復活して、やる気満々だ。

この中で魔法を使えるのはウォーザードのカケルでユーゴはゴードスナイト、攻撃力特化職らしいから…………あれ？俺はギヤスパルクの復活をプレイしてないけどステータスはどうなるんだ？

「よし、じゃあ景気よく行きますか！」

ギガデイン！」

シーンとあたりが静まり返った。

カケルの声がこだました。

「いや、それドラクエだろ。つまんないギャグかまさないで真面目にやれよ。」

てか、ギガデインでたら俺死ぬぞ！？」

本気で焦った、超高レベルのユーゴならともかく、おそらくNPCと同等なステータスであろう俺が食らったら………うつっ、背中がゾクリとする。下手したら死んでたぞ、俺が。

………いつか仕返ししてやる。

「じゃあ気を取り直して……、
ファイアーボール！」

ゴウとカケルの空に掲げた両手に熱風が集まってスイカ程の大きさの火球ができて大空に放たれて見えなくなった……

「出たな……」

「ああ、出た。まごうことなきファイアーボールが……」

「よし！確認は出来たしそのアルダ村に行くか、あ、でもその前に俺のステータスがどうなってるのか確認したい、いいか？」

「ああ、そつえばそうだな。」

「どうなるんだろう？ギヤスパルクをプレイしてないけど。」

ステータスウィンドウ表示！
念じてみた。

「レベル20？クラスはビショップ？」

20って割りと高くないか？

それにビショップって、俺はいつ転職したよ……？

「ビショップ！？」

そのクラスって確かクエストでNPCを助けまくんないといけなかったよね、ギヤスパルクの復活で一、二を争うぐらい面倒くさい転職条件があつたはずだよな？」

「そうだ、ゲームの中でなければ攻略wikiとか交流掲示板に載ってるのに、うるおぼえで噂だけど、NPC1000人をクエストで助けて、友情値がMAXでさらに特殊条件があるらしい。

ついでに言うと、

パラディンのクラスの最上位がビショップだ。

攻撃ができて仲間を直接補助できる、通称、友愛の貴公と呼ばれる。ギヤスパルクをプレイしてないやつは自動で設定されるのか？」

「シヨウ、スゲー！！ん？でも友愛ってことは兄さんのために転校してきたのか？」

「そう、俺はムサシを助けるために凄く遠くから来た……けど、俺より友愛なやつはいる、現に俺はムサシに命を助けられたからここにいます。

今度は俺の番だ。」

「命を助けられた？……そんなこと普通どつちもできないって！兄さんもシヨウも強い友情を持つてるんだな。」

「そんなことないさ、さあ、早くアルダ村に行こうぜ。」

「ああ、分かった。

………すまない、俺はシヨウを疑っていた。

てつきり兄さんに恨みを持つ不良グループの報復のために兄さんを探しているのかと思っていた。でも違った、何となくでしかないけどシヨウは悪いやつではないと思う、本当に済まなかった。」

…この潔さと慎重なところさすがは主人公と言ったところか……………
…しかし…………俺やムサシというイレギュラーがいる以上何が起るか分からない…。

俺はムサシに命を助けられた……………ムサシのためなら仮にユーゴたちと敵対することになったとしたら…俺は迷わずユーゴを斬る！
この命消えるまで…ムサシに尽くす！

くアルダ村・入り口く

「ここがアルダ村か」

良いところだ、村というが、畑は豊かで西欧風の家々が並んでいて人々の顔は辛い農作業にも関わらず清々しい良い表情で村人は過ごしているな。

…ムサシはこういうのどかな所好きそうだな…

「止まれ！何のようでこの村に来た？」

村の自警団らしい…

さて、どうするか、まあ、本当のことを言ったら通じるはずはないから適当に誤魔化すしかないな。カケルは村が西欧風だからめずら

しがつて、あちこち見てる。俺が説明するかと思うとユーゴが前に出た。

「俺達は旅人です。

ですが、この村の近くで寝込みを盗賊に襲われまして、恥ずかしながら装備や食料、金品の類い一切を奪われてしまつて途方に暮れていたこの村で食料、できれば今晚を過ごせる寝床を貸していただきたいと思い来たのです。」

さりげなくユーゴがステータスをひらいた！

「なっ！！？なんだ！？そのレベルは！？
いや、しかし……

ふむ、そういうことか。なんとかしてやりたいのは山々だが村長の意思なしでは無理だ。

今、若い者が村長を呼びに行かせた、あとは村長と交渉するといい。それにしても若いのに凄いレベルだな。」

「ありがとうございます、では、少しこの場で待たせてもらいます。」

壮年な自警団が逞しい顎髭を撫でながら割りと俺達のことを汲んでくれる、村が良いと人も良いんだな。しかし、レベル78ともなればラスボスが現れたようなものだがあまり驚いていないな、なんだ？

ユーゴは初めてのことがら中々に勇者をしてるじゃないか、他人に不快感を与えず己の要求を無理なく通す、双方に荒波を立てない過ぎたやり方だな。まあ、レベルはほとんど凶悪の域だが……
ユーゴは勇者に相応しい性格をしてるな。

しばらくして村の奥から村長らしき人がやって……きた……!?

あれは!? ムサシか!?

女神様からムサシは転生する際にFF7のザックスの容姿になったと聞いた。

村長に伴って……いやむしろ村長がムサシに伴ってやってくる。

久しぶりの再会で顔がどんどん綻んで、口元が上がるのがとまらない!

ムサシも俺を見つけたみたいだ、かなり驚愕してるムサシに手を振って走る!

子供みたいだとか思うが知ったことか! 俺の命を救ってくれた一番の親友で、この世界で一番大切なやつだ! 姿が変わろうとそれは変わらない!

「ムサシー! ムサシー! ……俺だ! 分かるか!?」

やっと…… やつと会えた!! ムサシに!

side ショウ end

黒服（学ラン）の3人（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

明後日からテストだ、どうしよう？……赤点とらなきゃいつか！

再会と…（前書き）

文才が無くてすいません、小説を読んでないと分からないと思う駄作ですね。

再会と…

side ムサシ

「シヨウ！？本当にシヨウなのか！？

なんでこの世界にいるんだ！？まさか……！？」

なんで異世界に親友のシヨウがいるんだ！？

これは夢か！？

「違う、俺は別に死んでないぞ？

ムサシが死んでしまったあとに墮落していた俺は女神様に会って、お前に会うチャンスくれたんだ。

だから俺は助けられた借りを返すために、ムサシを手助けするために来た。

それに異世界にも若干、興味があつたからな。」

「な……、お前にそんなことがあつたのか。

…てことは、俺は死に損じじゃないか！凄い痛かつたのに！」

「無駄にさせないために俺は来たんだよ。

それより、またムサシに会えて良かった……」

くそ、嬉しいこと言ってくるじゃないか！

最高の親友だと思ってたやつが死んだ友を異世界にまで会いに来てくれたんだぞ？嬉しいに決まってる！親友冥利に尽きるな…

「そ、そうか。ありがとな、一人で異世界は、少し心細かったんだ。」

.....

「あのく、師匠？」

この人たちは一体何なんですか？」

おっと、親友との感動の再会でイシュラたちと弟たちを図らずもな
いがしろにしてしまった。

「悪かったイシュラ。」

とりあえずどこか落ち着ける所で話そう。

オランドウさん、どこか静かな場所はないですか？」

「そうですね、本来は正式なファドラ神官以外は立ち入りは禁止な
んですが、ムサシさんなら神殿の祈祷室に入られても構いません、
もちろんお連れの方も。」

「そんな神聖なところを入れてもらえるんですか？」

「はい、ムサシさんには一生をかけても返しきれない多大な恩があ
りますから、これぐらいのことはさせてください。」

「そうですね、では、お言葉に甘えて祈祷室を使わせてもらいます。
みんな！オランドウさんに着いてきてくれ！」

これからのことを話すために俺たち…イシュラ、レヴィア、ユーゴ、
カケル、シヨウ、そして俺はファドラを奉る神殿の祈祷室に向かっ
た。

「さて、これからのことを話す前に自己紹介をしよう、なにがなんだかわからない弟たちのためにもな。」

祈祷室に着いて、オランダウさんを含む七人で自己紹介に入る

「まず、俺からだ。」

俺はそこにいるユーゴとカケルの兄で、日本と呼ばれる場所からここ、エターナルに来た…」

「え、兄さん！それってどういう…」

「ストップ！カケル、言いたいことは分かるが今は待ってくれ、それと、気持ちは分かるがレヴィアに失礼な視線を向けるな」

カケルのやつ、レヴィアの胸にガンガン視線をぶつけている、女性陣から早くもカケルの評価がガタ落ちなのがよく分かる。

「ああと、すみません！美しいお嬢さん、そこに人間の神秘があつて目がついつい…」

「はいはい、説明に戻るぞ。」

俺たちは考えられないほど遠くからエターナルにやってきた……おそらく、ユーゴたちは日本に帰りたいたいと思っているはずだが、帰るには方法が分らない。

しかし、その方法を知っている教団という連中がいる。

同時にその教団は世界征服を目論んでいて、すでに行動に移しつ

つある。

これから俺たちはその教団の世界征服を阻止しなければならない…
ここまでで何か質問あるか？」

無いけど明らかに不満そうなやつらがいる、なんで？

「…無いようだから各自、簡単でいいから自己紹介を皆に。」

「じゃあ俺から、名前はシヨウ。」

ムサシが言っていたが俺は日本という所にいた、ムサシとは親友だ。

「

「はい！次は僕！

僕はインテリ魔法使い、ウォーザードことミヤモト カケルです！
兄さんの実弟です！」

「俺は巖島 勇吾です。実弟じゃないけど兄さんの弟です。」

「私はレヴィア・アローネです。」

「あたしはイシュラ・アローネ。姉様の妹よ。」

「わたしはオランドウです、イシュラとレヴィアの父です。」

全員、紹介が終わったから詳しい説明に移るか。

「よし、次は細かい説明なんだけど、勝手が違うから別々に説明する。」

最初はユーゴたちだ、ちょっとこっちにきてくれ。」

ちよいちょいつと手招きしてユーゴたちを呼ぶ。

「ユーゴ、ここはどこだと思う？」

まずはゲームの中という先入観をユーゴとカケルの中から消さないと

「ゲームの中、『ギヤスパルクの復活』の中だと思う。」

何もしなきゃ当然といえば当然だな。

「一番大事なのは、ここはギヤスパルクの復活の中じゃない、俺たちが住んでいた世界と同じようにこのエターナルも同じ世界だ。言うならば別世界だな。」

「え、そんな、兄さん！どうやってた戻れるんだ！？」

「俺はここに来てから半年ほど過ごしている。」

それで分かったことは教団というやつらはエターナルと俺たちが住んでいた世界、教団の連中はガイアと呼んでた、ガイアを行き来できる方法があつて、邪神ギヤスパルクを復活させて世界征服を企んでいる。

その戦力として俺ら日本人が呼ばれた…呼ばれるというより強制召還が正しいか。帰るには教団を潰さないといけない。」

「それしか方法がないなら、わかったよ兄さん。」

「そうか、カケルは？」

「僕はずっとここにいてもいいよ！なんせここでは僕は超高レベルのウォーザードなんだ！」

「楽しまないと損だよ！」

「これで説明は終わりだ、あとは教団を見つけてからだ。
レヴィアたちにも説明してくる。」

さてさて、カケルはいいとしてユーゴは頭が固いな、真面目なのはいいんだけど真面目すぎだな。

「お待たせ、こつちの話はほとんどないけど一応。
旅にこれから出るわけだけど、これが最後の確認だ。

イシュラ、レヴィア……本当に着いて来るのか？危険な旅になる、
怪我どころか死ぬかもしれないぞ。今までのような修行じゃない、
死の可能性があるんだ。」

最終確認だ、甘いけど俺としては二人に来てほしい……半年も一
緒に過ごして情が移らない方がおかしい。

「もちろんですよ、師匠！何のために強くなったと思っているんですか？

師匠と旅をしたいからに決まってるじゃないですか！」

「はい。イシュラの言うとおりですよ。

危険ですけど、心躍る楽しい旅になると思っています、

そ、それと、ムサシさんと離れたくから……うう、恥ずかしいですノ
ノノノノ」

くっ！上目遣いはクるなあ、相変わらず的確に俺の心を抉ってくる
な……狙ってやってるのか？

「ムサシさんなら、娘を安心して任せられます、娘をよろしく願

います。」

「……わかりました。必ず教団を倒して無事にアルダ村に帰ってきます。」

「それでは明日から俺たちは目的である教団を倒しにここを旅立つ！」

「待つてましたあ！このレベル58ウォーザードのミヤモト カケルが敵をバツバツ倒してエターナルを平和にしてみせます！！………あ、でもさっきのガードアントとかキモい系はユーゴたちに任せる！」

そっか、カケルはガードアントとかキモい系は無理か………ガードアント！？

「ガードアントって、カケル本当か！？」

「本当だぞ？ここに来る前に確かにガードアントって表示されたアリ三匹と戦ったばかりだ」

シヨウが俺の刀を上げて証言してくる。

「オランドウさん！たしかガードアントって……」

「はい！ガードアント………卵を産むクイーンアントが巣を作り、その巣を守るのがガードアントです！巣は主に草原に作られるそうです！カケルさんの話が本当なら数ヶ月後にジャイアントアントが大発生して村に襲いに来てしまう！」

ムサシさん、これは村の問題ですがお願いします！村を助けてください！」

「当たり前ですよ、このアルダ村はもう俺にとっては故郷と呼べる場所です。

ユーゴたち、すまないがガードアント退治に協力してくれるか？」

「もちろんです、兄さんの頼みなら断る必要がないです。」

「俺もだ…ところで、この刀はムサシのか？」

「そうだ、エターナルに来たときに手持ちに無くて持ってこれなかったけど…今は正宗と朧があるからその刀はショウが使ってくれ、銘は炎鬼だ。俺が使った天亜流剣術は二刀での剣術だから三刀流はできないしな」

朧と正宗があるから炎鬼はショウに預ける。

我流だけあとで少し手解きしてやろう。

「明日は早速草原を主に巣を探索する、見つかり次第アリ退治だ、準備をしといてくれ」

原作忘れてたな…大まかなのは覚えてるんだけどな

「ユーゴ、このパーティーのリーダーはお前に頼む。正直なところ、俺はショウやユーゴほど頭は良くはないんだ。」

俺は頭の回転とか切り替えは早いけど、あくまでもそれまでだ。

例えるなら将棋で俺は2手3手なら読めるが、ショウとかは十手でも読めるぐらいの違いがある。

「そんなの俺には無理だよ、兄さんの方が向いてるよ」

「そんなことはない、ユーゴは勇者の器質を備えてる、俺は前衛で暴れる方が好きだしな。」

「俺が勇者の……。」

「……わかった、俺がリーダーをやる」

やっぱり物語ってのは全て主人公を中心に回ってる……俺はどんな立場なんだろう……

side ムサシ end

時は遡って3ヶ月前……

「王都ガライア」

side エルトリゼ

ムサシがガライアを去ってから3ヶ月が経った……

半年経てばまたやってくると言い残して……

ガルガンシア王はムサシの謁見の日から魔神の封印の警備を今までより強固なものにした、私もムサシに負けた日からキツイ訓練に変えた、後に聞いたことだがムサシは炎の魔法が得意らしくて私も炎を扱うパイロマンサーだ、思いがけない共通点を見つけて嬉しくな

った。

最近ではガルガンシア国はさらに豊かになり、つい先日、素行が問題視されていたガルガンシア王の次期後継者の一人、マイルズ王子の婚約が発表されガライア中が歓喜した、殿下の婚約者は私と同じ宮廷魔法使いのエミーナ・ラヴァンカだ、私は一度彼女と模擬戦をしたが危うく負けるところで力不足を痛感したので覚えている……
…このようにガライアはいま良いことづくめなのだがそれに反して私の心は沈んでいる…

（ムサシに会いたい……）

もう口癖のようにいつの間にかムサシに会いたいと心のなかで呟いている

突風のようにいきなりやってきては私の心を大きく揺らして過ぎ去って行ったムサシ……

（女ということなど捨てたはずだったけど……）

「……ル……エル……エル！一体どうしたのだ？この頃ずっとうわの空ではないか」

「ッ、すみません…ガルガンシア王」

呼ばれる声にハツとなる、ずいぶん深く考えていたようだ、ずっと呼ばれていたようで、ガルガンシア王が近くまできていた。

今はガライアの城下町の視察を行ってガルガンシア王自ら見回っているのだ、私はその護衛の一人だった…

「……………ムサシか、あやつはまたくると言った。あやつのは嘘をついておらなんだ、信じて待つがよい。
しかしエルよ、今のそなたを見たらムサシは喜ばないだろう、乙女のように心を躍らすのもよいが…少し時間をやる、しばらくの間休んでいる」

「……………はい、しばし休ませて頂きます…」

確かにうつつをぬかしている自覚はあった、それに対してガルガンシア王は頭を冷やせといってくれたのだ

（今の私をムサシは喜ばない、か……。……………そんなのは嫌だ！ムサシに見ていてもらいたい、好いてもらいたい！
ならば私がすべきことは一つ！）

私は兵士の訓練に使うコロシウムに向かう、今できることは自分を磨くことしかない！

side エルトリーゼ end

く????く

side マリー

——善悪に意味などない、あるのは力は絶対の真理ということ——

あたしはガイア…日本では如月 万里だった、エターナルに来てあたしはマリーになった。

同時にあの方に…出会い、教えられた…いや、悟った。
『力の真理』というものを……

………

………

「相変わらず早いお着きだな、マリー」

椅子に座るあたしのすぐ背後から声を掛けてくる男……ダイスこと
村瀬 大介だ

「ふん、あの方より早く来るのは当然だ。ダイスは違うのか」

先に声を掛けてくるまでダイスに気付かなかったのは彼のクラスが
ニンジャだからだけ……

はつきり言っただけであたしは彼がよく分からないが、あたしと彼はウマ
があう。

ダイスは教団最古参の幹部の一人だ

今日は教団の定例会議のため主だった幹部は召集される

あたしはいつも一番最初だ、もちろんあの方を崇拝しているものとして
当然のことだ。

「俺は…さて、どうだろうね。それよりどうだ？魔神の復活の準備
は出来てるのか？」

「そういうダイスはどうなんだ？」

「ぼちぼちだな」

そんな話をしていると他の幹部も集まってきたので話を中断する。

そして最後に突然、不意に円卓の玉座にスウツと現れるあの方、
猊下だ…

猊下が来てあたしも含め座っていたものは全員立ち上がり頭を下げる。

「座りなさい」

猊下は玉座に座ると穏やかに言った。

まるで音楽のような耳ざわりのよい滑らかな澄んだ声音。

「皆、忙しい中、ご苦勞様です。それでは報告からお願いします。」

空席が四席あるがこれもいつものことだ、この空席は四天王の連中の席だが、会議には数回しか参加したことない。

四天王の連中をあたしは好きではない、猊下によるとこの教団を設立したのは四天王だと聞いた……会議に参加しないのも猊下を蔑ろにしてる態度も何もかもが気に入らない。

あたしが内心で四天王に悪態を吐いているとあたしの報告の番が回ってきていた、どうやらあたしが最後みたいだ。

あたしは立ち上がり教団の団旗、知るものがみれば分かる邪神ギヤスパルクとそのしもべの魔神を示したものと分かる、真ん中に一際きわだつ金色の目を囲むようにこれまた金色の7つの目の教団の団旗に一礼して報告を始める。

「あたしに与えられた資金調達の指定金額は達して、もう一つのガイア人の教団への勧誘は芳しくはありませんが、先日、最近エターナルに来たと思われるガイア人、本名は不明ですがキャラクター名は『ムサシ』と表示される者を勧誘しましたが、失敗……。
しかし彼は性格に難はなく、頭もかなり切れ、力もあるものと思われます。これは直感ですが彼は敵か味方かで教団への影響は大きく左右します。見つけ次第彼を勧誘してもらいたいと考えてます……
報告は以上です。」

ムサシ、中々に面白い人間だった……あたしにも感じる、ムサシはイデアが高い。

絶対に引き込まないといけない、そんな強い予感がする……

「報告、ご苦勞様です。あなたが饒舌に誰かを語るなど珍しいですね……分かりました、彼の者を見つけ次第引き込みを命じます、よろしいですね？」

次に幹部の皆さんにしてもらうことがあります、かつて偶然エターナルに来てしまったガイア人が作った村があります、そこには人はもちろんのこと村に伝わる魔を封じる神具と称されるものが数多く存在します。

その村を処理してください、

村は『アカツキ』というらしいです、これは迅速にお願いします。」

アカツキ……か、ガイアの先人は面倒なものを残したようだ。

我らの悲願を阻む障害ならば叩き潰してくれる……

「ならばその命、私にお任せください！必ずや達成してみせます！」

「ではマリー、あなたに任せますよ。」

これにて会議は終わりです。」

「はい！」

猊下に期待される、なんて喜ばしいことだろうか、猊下のためにこの身を尽くすことができるなんて。

早速、手下を率いてアカツキを処理に取り掛かるう。

あたしは傍らに立っている臣下に声を掛ける。

「カズ！今のを聞いていたね？あんたはアカツキに出向く準備を下に伝えな、できたらアカツキに行くからね。」

「はっ、はい！分かりました！」

このヒョロツとした男はカズ、一応ガイア人んだけどアイデアが低いらしく低レベルでどこにでもいる男だ、気が利く小間使いとしてあたしの臣下に置いている。

カズはガイアに戻りたいらしい、だから教団にいる。

「あんたはとろいねえ、ムサシのツメの垢を煎じて飲ませてやりた
いよ。」

「すみません。」

マリーさんはそのムサシさんを気に入ってるんですね。」

「そうさね、あたしを前に少しも臆さないで情報を引き出そうとし

てきて、さらにあたしが教団に誘ったら逆にムサシのハーレムに入らないかって誘ってきたのさ、面白い男だよ本当に。」

「そんな人がいたんですか、僕も会ってみたいです。」

「多分、ムサシに会ったらカズのなかで何かが変わるよ。ムサシは人を変える力を持つてる……」

そう、あたしはなにかと言えば猯下を崇拜して想っていた、入る隙のないあたしの心をこじ開けた、そんな感じがする。

ちらちらとムサシの顔がフラッシュバックするのはなんでだろうねえ、これ以上ムサシに会うのはいけない気がするのにまた会いたいと思ってるのはなんでかね……こんな気持ちはあのお方にも起きないよ、ムサシはただ者じゃないね。

side マリー end

再会と…（後書き）

進むのが遅い…

小説力みたいなのをつけたい……今度本屋で『小説の書き方』みた
いなのを買おうかな…

《登場人物》（前書き）

長らく空けてしまい申し訳無いです。一体、完結はいつになるのやら…

《登場人物》

対極の2つの世界。

ガイアとエターナル、

…ガイアは科学技術が進んだ現代日本、対しエターナルは科学は皆無に等しく、魔法が、亜人が、魔物が溢れる世界。

平和に見える世界、エターナルに世界征服を画策しようとする教団がいた……教団は太古のエターナルの神々により封印されし“大邪神ギヤスパルク”を復活させるべくエターナルに眠るギヤスパルクのしもべである七柱の魔神の封印を解き放とうとしていた…

戦力を補うため教団は独自の召喚方法を使いガイアの日本人を召喚、教団に引き込んでいた。

ある日、教団に召喚されエターナルに不本意ながらやってきた日本人の二人の高校生、“巖島 勇吾”“宮本 翔”が織り成す本格RPGの冒険小説

『RPG W(・・)LRD』(ろーぷれ・わーど)に友を助け命を落とし転生した青年、武蔵の物語である

〈登場人物〉

宮本 武蔵 / ムサシ

LV : 1 2 2

HP : 2 3 8 9 / 2 3 8 9

MP : 1 4 5 1 / 1 4 5 1

CLASS : ドラゴンスレイヤー

年齢 : 17 歳

性別 : 男

種族 : 人間

STR : 2651

VIT : 543

DEX : 767

AGI : 1099

INT : 702

WIS : 900

LUK : 345

性格 :

普段は誰に対しても等しいが、女性にとてつもなく甘い…特に美人に。

明るくて表裏がなく、いつも調子は軽いがすべて本心から出ている、仲間を大切にし、やるときはやる男、大体の人には好印象だが、嫌いな人間もいる。

嫌いな人間TOP3は“女性を泣かせる者”、“理不尽極まりない者”、“常識を知らないバカ”。

容姿 :

転生した際に容姿が変わった、

容姿はFF7のアンジールを倒す前のザックス。

服装はエターナルに召喚されるときに着ていたジーンズにシャ

ツの上にパーカーを羽織るというラフな格好、他には西欧風のものを着ることもある。

身長185cm、体重75kg。

着痩せするため服を脱いだら筋肉がかなりついていることが分かる。両腰には女神からもらった脇差し『朧』、ザッカランの武器屋で買った刀『正宗』を帯刀。

備考：

友を庇って死んでしまったが、ミスをした女神に転生させてもらう。転生にするにあたり願い事を叶えてもらい、FFとドラクエの魔法、技を習得している。他には肉体とアイデアの“限界突破”が叶えられている。

転生後、来るべき時に備えて、日々修行をしていて気も扱え、魔法に関していえば右に出るものはいない、炎魔法が得意で独自に編み出すことも多々ある。

我流剣術はFF、ドラクエの技を取り込み、

『二天亜流』剣術を編み出してこちらも達人レベルだ。

最後に極めた魔法を己の武器に取り込む技法

『究極武装』。己の身に魔法を取り込む技法

『究極兵装』。

この二つがムサシの切り札となっている。

エターナルで英雄になりハーレムをつくることを目的としている。

坂本 翔/シヨウ

LV・20

HP : 314 / 314
MP : 85 / 85

CLASS : ビショップ

年齢 : 17 歳

性別 : 男

種族 : 人間

STR : 122
VIT : 159
DEX : 91
AGI : 103
INT : 76
WIS : 73
LUK : 2

性格 :

本質的には幼い頃からムサシといたからムサシに近いものがある。

少しクールなところがあり、興奮するとオープンになり口調が粗くなる

容姿 :

一見するとメガネをかけたイケてるインテリ男に見える、少し髪に金色に近い茶色が入っている。

服はエターナルに来た学ラン、ムサシに譲られた刀『炎鬼』を背に掛けている。

備考：

女神にムサシがいる世界に連れられムサシと再会、命を救われた恩のため絶対の友情の下にムサシについている漢である。しかし、生まれつき運が悪くいつも空回りしている。
… ついでに、メガネを外すと……。

巖島 勇吾／ユーゴ

LV：78

HP：735 / 735
MP：242 / 242

CLASS：ゴードেসナイト

年齢：16歳

性別：男

種族：人間

STR：1044
VIT：361
DEX：398
AGI：401
INT：223
WIS：242
LUK：121

性格：

困っているものは見過ごせない正義感が強い性格、優しさと厳しさを併せ持つ青年。

容姿：

学ランに、髪と瞳は金と茶の中間色だ。

備考：

真面目な高校生でカケルとショウとともにエターナルへきた。

個性の強い二人の姉妹に板挟みなのでしつかり者だが、健全な高校生ゆえに異性にも興味はある、しかし、義兄のムサシを尊敬しすぎ若干ブラコン。

宮本 翔／カケル

LV・58

HP：408／408

MP：1197／1197

CLASS：ウォーザード

年齢：16歳

性別：男

種族：人間

STR:184
VIT:290
DEX:128
AGI:209
INT:423
WIS:778
LUK:86

性格:

ムサシよりさらにお調子者、後先を考えずに動き、楽観的スケベ。

容姿:

学ラン、メガネをかけてオープンスケベそのまま。

頭が良さそうに見えなくもないが、やはりスケベ男。

備考:

ムサシの実弟。

ユーゴとは幼なじみでユーゴ同様に類を見ないゲーマーである。

16年間モテなかった反動でかなりのスケベ。

念願の超高レベル魔法使いになり気分上々、自分に敵はなし、と天狗になっているが…。

イシユラ・アローネ

LV:14

HP : 162 / 162
MP : 54 / 54

CLASS : 村娘

年齢 : 14 歳

性別 : 女

種族 : 人間

STR : 88
VIT : 105
DEX : 83
AGI : 79
INT : 42
WIS : 61
LUK : 41

性格 :

元気ハツラツ、明朗で思ったことは口に出す。
善く言えば天真爛漫、悪く言つと子供っぽい女の子。

容姿 :

やわらかい赤毛の髪を首筋で二つに分けて結っている。
瞳は赤毛の髪とお似合いのワインレッド。

いかにも村娘という服を着ている。

備考 :

パーティーのムードメーカー的存在。

姉のレヴィアを月の静かな美しい光に例えるならば、イシユラは

太陽の暖かい皆を照らす光になるだろう。

ムサシに強い恋情を持っている、半年間共に過ごしてその想いは強まり、ムサシへのアプローチは津波の如し。

レヴィア・アローネ

LV : 13

HP : 92

MP : 175

CLASS : 村娘

年齢 : 16歳

性別 : 女

種族 : 人間

STR : 51

VIT : 66

DEX : 45

AGI : 57

INT : 102

WIS : 128

LUK : 33

性格 :

大人しいと周りには思われがちだが実はかなり好奇心が強く、物腰がやわらかくもあり、ムサシに出会ってからには自分の意思ははっきり

りと主張するようになった。

容姿：

薄い碧の瞳に、背中までとどく紺色寄りの黒髪をストレートにしている。身長は160cmぐらいで女性特有の豊かな双丘に腰はくびれて16歳らしからぬ体型。

備考：

男性の目を引く体型ゆえに若干男嫌い。

ムサシに初めての恋情を抱いている。

ムサシの旅に好奇心により着いてくることを決意。

エルトリーゼ・ウィンラート

LV：35

HP：189 / 189

MP：412 / 412

CLASS：パイロマンサー

年齢：15歳

性別：女

種族：エルフ

STR：89

VIT: 144
DEX: 64
AGI: 121
INT: 226
WIS: 265
LUK: 45

性格:

冷静沈着に見えるが本当は内気。

不器用なところがあり冷たくあたるがそれは優しさからくるもの。

容姿:

なめらかな金髪をポニーテールに纏め、エルフ特有の尖った耳に、赤紫の見るものを萎縮させる鋭い瞳の美人、惜しむべきは胸の起伏が乏しいこと。

備考:

母国ユグドラシルを出て、アライエン王国で火神シュラハーの祝福により『パイロマンサー』

になりアライエンを旅立ち、現在はガルガンシア王国の宮廷魔術師としてそれなりに落ち着いていたがムサシに出会い、心の内の弱さを見透かされ激しく心を惹かれていた。

如月 万里ノマリー

LV: 53

HP : 531 / 531
MP : 234 / 234

CLASS : スペルダンサー

年齢 : 21歳

性別 : 女

種族 : 人間

STR : 255

VIT : 267

DEX : 268

AGI : 256

INT : 218

WIS : 244

LUK : 88

性格 :

普段は冷静だがその実は激情家。

容姿 :

スラリとした手足に似合わず体の起伏は豊かなラインを描くアイドル並のスタイル。

ゆるやかにウェーブした灰髪に、切れ長の目、目もとに青い星の形の刺青が真っ赤なくちびるに対称的に端整な顔立ちに映えている。

備考 :

教団のボス、猊下に出会いその思想、言動、真に在るべき生き方に

賛同を越え狂信している。

しかし、ムサシに会いその思想は変わらずも心底になにかしらの変化をもたらしている。本人はその小さな変化を気付いてはいるが単にももの珍しいだけとひとまずは自己納得している。

奥山 和典ノカズ

LV・9

HP：56 / 56

MP：31 / 31

CLASS：トラベラー

年齢：16歳

性別：男

種族：人間

STR：23

VIT：38

DEX：61

AGI：25

INT：14

WIS：34

LUK：17

性格：

争いを好まず、おどおどしていて自信が極端に無い。

容姿：

身長は平均的、かなり痩せていて姿勢が前屈みなのでうつむいて見える。顔立ちが平々凡々で周りからは“平凡”の代名詞を位置づけられている。

備考：

いつも独りクラスの端に小さくなりゲームをして、時々、お使いという名目のパシリをさせられていたが、何気なく応募した“ギヤスパルクの復活”が当選し普段はやらないRPGをプレイするもすぐにエターナルへ召喚され気付いたら教団にはいつていた。

《登場人物》（後書き）

登場人物設定などつまらないと思いますが読んでくれた方ありがとうございます

アリ退治1（前書き）

連続投稿なのか？

これからアクシデント多忙でなければ安定した更新を目指します

アリ退治1

「……………いた！」

森から少しはずれたところにあるだっ広い草原に俺達…ムサシ、ユーゴ、スケベ（カケル）、美人姉妹とそれにシヨウこと俺と数人のアルダ村の青年団はアリ退治にやってきた。

正直、ここに来るまでに俺は驚きの連続だった。そう言うのも幾度かモンスターの団体が来たんだが、モンスターのデフォルメが意外と気持ちわるいのもあるがそこじゃない……ムサシ、強くないか？

なぜこんなことを言うか、考えてもみる。

まばたきをする度にモンスターがほとんど消滅してるんだぞ？
不可思議な錯覚をおぼえるわ！

ともかくムサシがすごく強いのはわかった。

今はジャイアントアントの巣を探してるんだがモンスターの影も形も見えないのにムサシは見つけたらしい。

……なんだかおいてかれた気分だ、しかし、ムサシに恩を報いるため強くなつてやる…

少し考えすぎてたのかムサシが声をかけてきた。

「シヨウ！こつちだ！呆けていると痛い目みるぞ！」

「ああ、わかった。もう油断しない。」

少し歩くと巨大なアリの巣を見つけた。けれどアリ特有の触角をチヨロチヨロさせて辺りを警戒している『ガードアント』と表示される巨大なアリが四体いた。

別にアリは嫌いではない、しかし、こいつらは大木も噛み砕きそうな強靱なアゴ、鋭角な壁でも登れる鉤爪のような突起物が付いた長い手足、蟲特有の無機質な目。

（普通の人間ならあつという間に捕食されてしまいそうだな……そう、普通なら、な……）

「レヴィア！イシュラを援護しつつガードアントを牽制して一体を引き離して倒せ！
カケル！アリが無理ならユーゴにエンチャントをかける！

青年団の皆はギルバートの指示のもと一体頼む！
さて、もう一体はシヨウ、蟻ごとき楽勝だよな？頼んだぞ。バイキルト。スカラ。ピオラ。」

「あたりまえだ、この程度軽く倒せないとこの先キツいんだろう？」

「言うね、相変わらずスかした口調は直らないのか。」

「直るもなにも元からコレなんだ、仕方ないだろ。」

ムサシの補助呪文で身体に力がみなぎってきた。

俺の相棒になった炎鬼を抜いて片手最上段に構える、とそれだけで

刀から出る熱でアリが歪んでみえる。

「俺は手伝わないぞ。イシユラとレヴィアはともかく今シヨウたちがどこまでできるか見たいしな。できないなら変わってやってもいいぞ?」

「それこそ愚問だな。」

なつかしいな、こうして軽口をたたきあいつつ話すのが俺とムサシの普段の会話だったな。

「くそ、ちょこまかと……そこだ!」

がさがさと動きまわるガードアントに狙いをつけて素早く刀を横風呂ぎに振るうが…

「なっ!?!、くっ。普通のアリと同じに考えてた。まさか跳んでかわしてくるなんて」

このガードアント文字どおりアリのすばしこさを持ちつつ身が軽いから狙って斬ってもかわされる。

(どうするか……攻撃できないならば…攻撃させてやる)

スッと身体を脱力して刀を構える。

ガサガサガサガサ…

俺の倒す気が失せたと思って今まで以上の速さで来た。

「…さあ来い、振り返ちにしてやる。」

あと数メートル！

（今だ！）

刀の切っ先に手のひらを添えて片手上段に構え、添えられた左手を滑らすように炎鬼を迅く突き出す！

「見よう見まね…牙突！！」

炎鬼の牙突の迅さとガードアントの突進の速さで威力が相乗されてガードアントの頭から胴体を串刺しにする。

『ギイイイイ！！！！』

ガードアントがけたたましい叫びをあげて倒れ伏した。

「ハアハアハア…ッ、ハア、ハア、ハアア…疲れた…」

キツかった…時間にして五分ぐらいだろうけど一秒も気を抜けなかった精神的疲労が身体にきた。

「シヨウ、頑張ったな。初めてのモンスターを相手にはよくやった方だな。まあ、まだまだ強くなってもらわないとな。」

「ハッ、そんなのあたりまえだ。むしろムサシなんざすぐ追い抜くぜ？」

「ほう、面白い。ならやってみるよ。できるなら、だけどな…」

本当に懐かしいな、このムサシとの売り言葉に買い言葉な冗談でも

あり本気でもある会話…。

「みんな倒したな。それじゃアリの掃討を始めますか。俺が先に入るからユーゴたちもあとを続いて来てくれ。」

言うが早いかムサシはさっさと巨大なアリの巣のなかに入ってた。

…この軽率さ、前と全く変わってねえな。
でもいまや、ムサシには押しも押されもしない強さを持つてるみたいだから変わらないのも当然か…

「シヨウ、さん？はいらないんですか？あとは私とシヨウさんだけですよ？」

美人姉妹の姉のレヴィアがなかなか俺が入らないから急かしてるような勢いで言ってきた。

「おっと、すまない。今いく。」

巨大なアリの巣は深淵そのものだ、いまにもホラーみたく暗闇から手が出て引きずり込みそんな雰囲気を沸々と出している。

…こんなところで臆してどうする、いつもどおり涼やかに軽くこなさなければ…

俺は身体を叱咤して奮い立たせて深い闇の穴にはいった。

——あたしと姉様は自分の夢のため師匠の修行につきあつてきた。
だから暗い洞窟なんかはなんともない。モンスターでも暗闇でもかかってこい！

…と思つて、いつもの修行より身体に力を入れてモンスターに対して身構えてたら…

「イシユラ…」

「…はい」

「……………ぜんっぜんいないな」

さつきから姉様の胸をやらしい目で見てるメガネ（カケル）の魔法で巢の中が明るくなつたけど、師匠の言うとおりジャイアントアントトどころか普通の虫さえ一匹もいなかった。

「どうなつてんだ？みんな昼寝でもしてんのかな？」

「バカなことを言うなムサシ、そんなわけないだろう。もしそうだったらユニークなアリだけだな」

「たしかに。けどいないのは事実だ。
どうするか…困ったことに先を進むにしても道が複数あるような気がするの俺だけか？」

「安心しろ。俺にも三つほど道が見えるからお前は正気なはずだ。」

師匠はシヨウさん？と会ってからずっと話してばかり、でもあんな師匠はじめて見る…それだけシヨウさんを信頼してるってことなのかな。

——あんなに楽しそうな師匠を見るとなんだかむかむかして邪魔しなくなる。

「師匠！いつまでもへらへらしてないでちゃんとしてくださいよ！これからどうするんですか！？」

「はい！兄さん！僕はここでレヴィアちゃんたちと待機してるよ！」

「ああ、ごめんイシュラ。そんなに怒らないでくれよ。」

あさはかな弟よそんな愚案は却下だ。

いいか？、道が三つあるということはパーティーを三つにしないといけない。なぜなら固まっていたら広い通路や部屋ならともかく狭かったら攻撃できないし最悪は挟撃されて御陀仏もある。それにひとつひとつの道を行くとなると何より時間がかかりすぎる。」

別に師匠に怒ってるわけじゃないのになんでこんな嫌な気持ちになるんだろ？

（うつん、多分さつき村にいたときの師匠が言ったことが気になってるんだと思う。

…だって故郷に帰るために教団と戦うって言ってたからもしかして

あたしたちのことより故郷に早く帰りたいって思ってるのか不安なんだ。」

「パーティーはできるだけ力が均等になるようにする。

一つ目のパーティーがユーゴとシヨウと青年団のヒースとドラン。

次のパーティーがカケル、イシユラ、レヴィアと青年団のジャックーたち。

そして最後のパーティーが……俺。」

…え！？師匠一人！？たしかにあたしたちのなかで師匠が一番強いけど、いくらなんでも一人は無理だと思う。

「一人で平気なのか？」

「ああ、自慢ではないが実際このパーティーで一番俺が強いだろ。回復魔法使えるし大丈夫だ」

「そうか…、なら仕方ないか」

「兄さん！俺と一緒に行くよ！やっぱり一人は危険すぎるよ、俺は足手まといにはならないから。」

ユーゴさんが師匠に着いていくってあたしでも分かるけど師匠の次にユーゴさんが強いからパーティーが偏りすぎちゃうと思う。

「だめだ。パーティーが偏るし、ユーゴがいないとそっちのパーティーが危ない。」

それならあたしが！…あたしならそんなにパーティーに影響は思っ

から。

「師匠！あたしが着いていきます！あたしならいいですよね！？断つても着いていきますよ！」

「……はあ、わかったよ。イシユラは俺と一緒に。でもあんまり勝手なことはこれ以上はやめてくれよ？」

じゃあとりあえずこのパーティー編成で。ユーゴがリーダーで、カケルの方はギルバートが頼む。

危険だと思ったらすぐに引き返してこいよ、いいな？じゃあ無事を祈ってる。

イシユラ、行くぞ。」

「はい！師匠よろしくお願いします！」

師匠はさらに地中深くに行く道に歩いていった、師匠と二人だけなのは嬉しいけどさっきのこと聞かないと……

——でもやっぱり師匠と二人だけなんて嬉しい、不謹慎だけど姉様に負けないためにもアタックしよう！

アリ退治1（後書き）

中途半端で切ってしまいました、すいません。次でアリ退治は終わります。

目の前の話に四苦八苦なのにネタが出るのはなぜ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2459w/>

If、ろーぷれ・わーど

2011年11月28日01時54分発行